宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第192集

じろうざえもんいせき
次郎左衛門遺跡

国道219号交通円滑化事業に伴う発掘調査報告書

２０１０

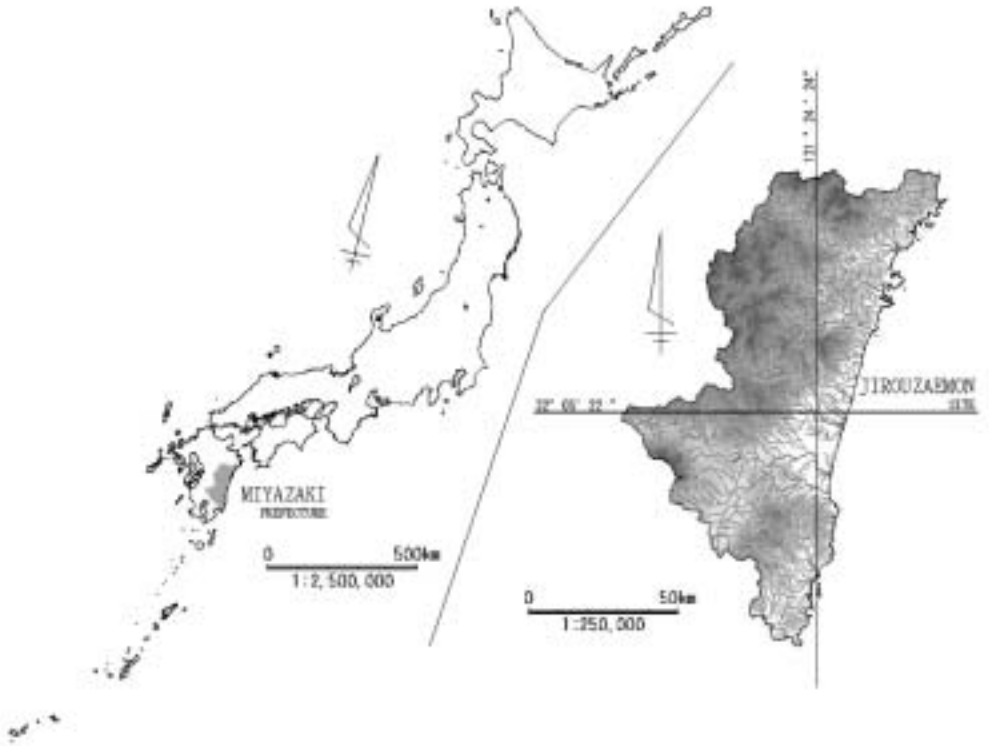
宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第192集

じろうざえもんいせき

次郎左衛門遺跡

国道219号交通円滑化事業に伴う発掘調査報告書



２０１０

宮崎県埋蔵文化財センター

序 文

平成20年９月から翌年２月まで発掘調査を行いました、西都市次郎左衛門遺跡の発掘調査報告書をここに刊行いたします。関係各位、地域住民の方々には並々ならぬご理解、ご協力を賜りましたこと、深謝いたす次第です。

次郎左衛門遺跡が所在する西都市一帯は、北に九州山地を望み南に開けた平野を持つ、豊かな環境にあります。当地は西都原古墳群をはじめ、日向国府、国分寺、国分尼寺などの史跡・遺跡が物語るように、古代からこの日向国の中心地として栄えて来ました。遺跡は西都市の平野部、一ツ瀬川が形成した沖積低地に位置しています。上記に挙げた台地上に位置する史跡・遺跡の調査に対して、沖積低地の発掘調査の事例は少なく、いつから人々が住み始めたのか、土地利用の変遷など、明らかになっていない課題は多いと言えます。今回報告する次郎左衛門遺跡発掘調査が、これらの課題解明の一助となれば幸いです。

我々が発掘調査を行っている、地面の下に眠る歴史は、先人たちが歩いてきた道程です。この道の延長線上に現代の生活は営まれています。地域の歴史を知ることは、これからを歩いてゆく人々にとって大変意味のあることだと言えるでしょう。そのためにも我々は、遺跡を保存し、発掘調査で得られた成果を地域住民に還元していくことを責務としています。宮崎県の教育･文化振興のため、たゆまぬ調査･研究に努める所存です。これからも、本県の埋蔵文化財保護事業にご理解、ご支援を賜らんことを切に願っております。

平成22年３月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　福永　展幸

例 言

1　本書は、国道219号交通円滑化事業に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県西都市次郎左衛門遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県西都土木事務所の分任を受けて、宮崎県教育委員会を主体に宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成20年９月８日から平成21年２月６日まで行った。

3　発掘調査は調査第二課第四担当主事森田利枝･同課第三担当主査松田博幸が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影についても調査担当者が行った。なお、発掘調査の組織は以下の通りである。

平成20年度

所長	福永　展幸	調査第二課長	石川　悦雄
副所長兼総務課長	長友　英詞	調査第二課副主幹調査第三担当リーダー	福田　泰典
総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信	調整担当（文化財課主査）	東　憲章
		同	日高　広人

4　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、森田が整理作業員の協力を得て行った。

5　基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社福島測量設計調査事務所に、掘削及び復旧業務は、株式会社藤井建設に、空中写真撮影業務は、有限会社スカイサーベイ九州にそれぞれ委託した。

6　自然化学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、分析結果については第Ⅲ章第７節に収録した。

7　本書の執筆は、第Ⅰ章第１節を日高（文化財課調整担当）が、その他の執筆と編集は森田が行った。なお、整理作業・報告書作成についての組織は以下の通りである。

平成20年度

所長	福永　展幸	調査第二課長	石川　悦雄
副所長兼総務課長	長友　英詞	調査第二課副主幹調査第三担当リーダー	福田　泰典
総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信	調整担当（文化財課主査）	東　憲章
		同	日高　広人

8　発掘調査、整理作業、報告書作成においては、以下の機関、諸氏に多大なご助言・ご教示を頂いた。

西都市教育委員会　宮崎市教育委員会　鹿児島県姶良町教育委員会　瀬戸哲也氏（沖縄県教育委員会）
若山浩章氏（文化財課）　堀田孝博氏（文化財課）　藤木　聡氏（当センター）

9　調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1　本書で使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１図（西都）、２万５千分の１（妻、佐土原）をもとに作成した。

2　本書で使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海抜絶対高を示す。

3　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2006『新版　標準土色帖』28版に準じた。

4　本書における遺構名の表記は、溝をＳＤ、土坑をＳＫ、柱穴・小穴をＰで示し、それぞれ調査区名（Ａ・Ｂ）を冠した。遺構番号については、１～２桁の番号を付した。

5　本書で参考にした文献については、本文末にまとめて記載した。

本 文 目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章　調査経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査および整理作業の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
　第３節　考古学的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査成果
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構の分布 …… 10
　第４節　各区の概要 …… 12
　第５節　Ａ区の遺構と遺物
　　近世 …… 13
　　中世 …… 34
　　時期不明 …… 36
　第６節　Ｂ区の遺構と遺物
　　近世 …… 41
　　中世 …… 42
　第７節　次郎左衛門遺跡における樹種同定 …… 56

第Ⅳ章　まとめ …… 57

図 版 目 次

1　遺跡上空から一ツ瀬川を望む
2　Ａ区・Ｂ区合成写真
3　上）Ａ区全景（真上から）
　　下）Ｂ区全景（北東から）
4　上）Ａ区中世柱穴（真上から）
　　下）Ｂ区周溝（真上から）
5　一段目：左）ASD２人頭大礫出土状況（東から）
　　右）ASD２円礫出土状況（東から）
　　二段目：左）ASD２堆積状況（東から）
　　右）ASD３堆積状況（東から）
　　三段目：左）ASK１遺物・礫出土状況（南から）
　　右）ASK２遺物・礫出土状況（東から）
　　四段目：Ｐ31木柱（東から）
6　一段目：Ｂ区中心部（真上から）
　　二段目：左）周溝（北西から）
　　右）周溝堆積状況（南から）
　　三段目：左）BSD５屈曲部（西から）
　　右）BSD５堆積状況（西から）
7　一列目：上）BSD10（南西から）
　　中）BSK７（南から）
　　下）BSK15・16（南東から）
　　二列目：上）BSK６（北西から）
　　中）BSK13（西から）
　　下）BSK17（南西から）
8　一段目：左）BSK18（南から）
　　右）BSK26・32・34・35（北西から）
　　二段目：左）BSK51石組崩落状況
　　右）BSK51堆積状況（南から）
　　三段目：完掘、炭化物検出状況
9　Ａ区出土遺物①
10　Ａ区出土遺物②
11　Ａ区出土遺物③
12　Ａ区出土遺物④
13　Ｂ区出土遺物①
14　Ｂ区出土遺物②

本 文 写 真 目 次

写真１　表土除去 …… 2
写真２　発掘作業風景 …… 2
写真３　遺物接合作業 …… 2
写真４　遺物実測 …… 2
写真５　1948年米軍撮影空中写真 …… 5
写真６　調査前の様子 …… 7
写真７　落ち込み確認トレンチ …… 36
写真８　落ち込み堆積状況 …… 36
写真９　ＢＳＤ８常滑甕出土状況 …… 45
写真10　ＢＳＤ８堆積状況（東から） …… 45
写真11　次郎左衛門遺跡の木材 …… 56

表 目 次

表１　遺物観察表 …… 25
表２　遺物観察表 …… 26
表３　遺物観察表 …… 27
表４　遺物観察表 …… 28
表５　遺物観察表 …… 29
表６　遺物観察表 …… 30
表７　遺物観察表 …… 31
表８　遺物観察表 …… 32
表９　土坑一覧表 …… 53

挿 図 目 次

図１　調査位置図 …… 1
図２　周辺の遺跡 …… 6
図３　調査区グリッド配置図 …… 7
図４　調査区南壁（Ａ区）・西壁（Ｂ区）
　　土層堆積状況…… 8
図５　次郎左衛門遺跡遺構分布図
…… 9
図６　Ａ区遺構分布図 …… 10
図７　Ｂ区遺構分布図 …… 11
図８　ＡＳＤ１・２・３ …… 13
図９　ＡＳＤ１・２・３堆積状況図 …… 14
図10　近世溝出土遺物実測図① …… 16
図11　近世溝出土遺物実測図② …… 17
図12　近世溝出土遺物実測図③ …… 18
図13　近世溝出土遺物実測図④ …… 19
図14　近世溝出土遺物実測図⑤ …… 20
図15　近世溝出土遺物実測図⑥ …… 21
図16　近世溝出土遺物実測図⑦ …… 22
図17　近世溝出土遺物実測図⑧ …… 23
図18　近世溝出土遺物実測図⑨ …… 24
図19　ＳＫ１･ＳＫ２出土状況、土層堆積状況図
…… 33
図20　ＳＫ２出土遺物 …… 33
図21　Ａ区中世遺構分布図 …… 34
図22　Ａ区中世溝堆積状況図、
　　ＡＳＤ４出土遺物実測図 …… 34
図23　柱穴列堆積状況図 …… 35
図24　ＡＳＫ３・４立面図 …… 35
図25　柱穴（Ｐ30・31・37）堆積状況図 …… 36
図26　落ち込み堆積状況図、出土遺物実測図
…… 36
図27　Ｂ区遺構分布図① …… 37
図28　Ｂ区遺構分布図② …… 38
図29　Ｂ区遺構分布図③ …… 39
図30　Ｂ区遺構分布図④ …… 40
図31　ＢＳＤ１堆積状況図、遺物実測図 …… 41
図32　ＢＳＤ５・６・10堆積状況図、
　　ＢＳＤ７立面図 …… 42
図33　ＢＳＤ５・６・７・10遺物実測図
…… 44
図34　ＢＳＤ８・９平面図・立面図 …… 45
図35　ＢＳＤ８・９堆積状況図 …… 46
図36　ＢＳＤ８・９出土遺物実測図 …… 47
図37　ＢＳＫ１・２、ＢＳＤ６堆積状況図
…… 48
図38　土坑堆積状況図 …… 49
図39　土坑堆積状況図 …… 50
図40　土坑出土遺物実測図 …… 51
図41　石組み土坑平面・堆積状況図 …… 52
図42　石組み土坑出土遺物 …… 52
図43　柱穴列堆積状況図 …… 54
図44　柱穴出土遺物 …… 54
図45　Ⅲ層・カクラン出土遺物実測図 …… 55
図46　調査成果と地籍 …… 60

第Ⅰ章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

西都土木事務所では、東九州自動車道西都IC及び地域高規格道路・春田バイパスの整備により生じた一般国道219号の交通混雑を解消するとともに宮崎東環状道路と一体となって、宮崎市と周辺都市間の連携強化・地域活性化を図る目的として、一般国道219号交通円滑化事業（総延長2.8km）を平成16年度より実施している。

建設予定地には当初、周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていなかったが、周辺に四日市遺跡が存在することや微高地が点在し、遺跡が立地する可能性があることから、県文化財課では、平成16年度末より同土木事務所と埋蔵文化財についての協議を開始した。

平成19年度に入り、園元地区（霧島神社横の低地）と赤池地区（赤池神社周辺の微高地）、岡富地区（住吉神社の所在する微高地に隣接する低地）の３箇所について同年10月９日から10日の２日間、試掘調査を実施した。調査の結果、赤池地区より古墳時代及び古代から中世の遺構や遺物を確認し、遺跡の存在が明かになったことから、所管の西都市教育委員会と協議を行い、遺跡の名称を小字名より「次郎左衛門遺跡」として取り扱うことにした。その後、同土木事務所と遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であるという結論に至り、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。また平成20年１月25日には、調査範囲の絞り込みを行うため同遺跡の確認調査を行い、調査対象範囲を2,800㎡とした。

発掘調査は西都土木事務所長からの本発掘調査の依頼を受けて、県埋蔵文化財センターが同年９月８日より平成21年２月６日まで実施した。

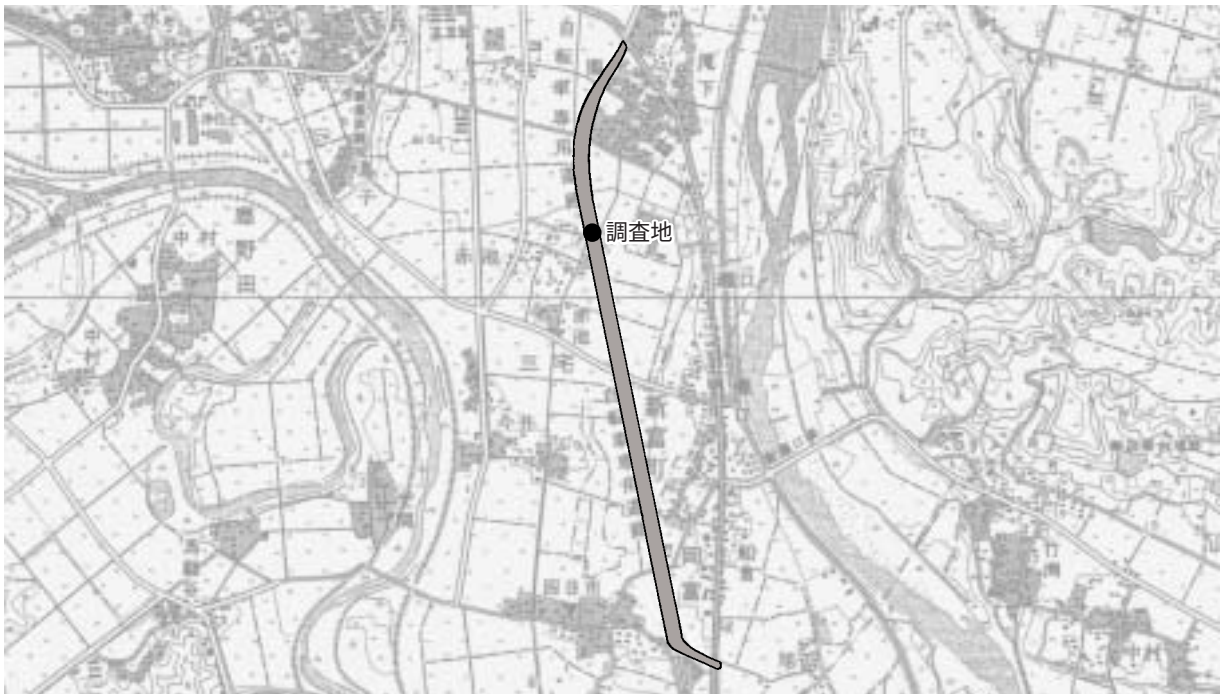


図１　調査位置図（１：25000）

第２節　発掘調査および整理作業の経過

調査対象地は赤池集落を南北に走る自転車専用道路（旧妻線）に沿う、南北約110ｍ、東西約27ｍの範囲である。対象面積は2800㎡、東西方向の市道を挟む関係で南側をＡ区、北側をＢ区に区分けして調査を行った。

発掘調査は平成20年９月８日より開始した。調査地全面に茂っていた藪を刈り払った後、バックホーによるＡ区の表土除去を行い、表土除去後９月24日から作業員を投入し、Ａ区の本格的な調査に入った。11月21日にＡ区の調査を終了し、Ｂ区の調査に着手した。Ｂ区検出作業の結果、調査区の南端と北端で後世の著しいカクランにより遺構の残存は見込めないと判断し、ここを排土置き場とした。Ｂ区の調査を平成21年２月６日に終え、現地調査に係る全ての作業を終了した。

発掘調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館へ持ち帰り、記録物の整理作業と出土品の一部洗浄作業を行った。平成21年６月１日より作業員による本格的な整理作業を開始し、遺物の注記、接合、実測作業を11月30日に終了した。そして、報告書刊行に係る製図及び執筆作業の全てを12月までに完了させ、翌年１月に印刷・製本作業を行った。

平成21年８月18日から30日の間、宮崎県立図書館特別展示室を会場とした「出前展示」において、発掘調査成果をパネル展示で紹介し、８月23日には遺跡発掘速報会「ひむかの歴史2009」にて、一般向けに成果報告を行った。

写真１　表土除去

写真２　発掘作業風景

写真３　遺物接合作業

写真４　遺物実測

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

次郎左衛門遺跡は西都市赤池地区に位置し、地番は大字三宅480番地ほかである。調査前の現況は畑地と宅地となり、標高は10.7ｍをはかる。

人間はさまざまな制約をうけて活動するものであり、遺跡の立地もその結果といえる。次郎左衛門遺跡の立地条件を理解するために、周辺の地理的環境を概観する。

九州山地に端を発した一ツ瀬川は狭隘な山地を縫って流れ、西都市杉安から河口まで約20kmの間に海成段丘を削り、北は新田原台地、南に西都原台地、鹿野田、上田島、佐土原丘陵地に分断して流れる。遺跡が立地するのはこの20kmの間に形成された沖積低地上である。周辺には一ツ瀬川をはじめ三財川、鳥子川など小河川が流れこれらの堆積物が複合してつくった沖積低地ともいえる。

赤池地区はこの沖積低地内の微高地上にあり、周りを水田に囲まれた集落である。一ツ瀬川右岸の沖積低地には同様な景観を持つ集落が散在し、1948年米軍によって撮影された空中写真（写真５）にも顕著にみられる。北から穂北、下水流、調殿、山角、妻、右松、園元、赤池の集落が島状に形成されている。この島状の微高地は小丸川右岸にもみられる特徴である。このような特徴は、河川の土砂運搬能力に起因すると考えられるが、小河川によって微高地が削られた結果、こうした景観を呈するようになったのかもしれない。また、集落東側に所在する、赤池地区の名の由来となる赤池（現在は畑地となっている）や長池は河跡湖であると考えられる。

沖積低地内の微地形は一般的に土地が高く水はけの良い場所は集落や畑に、土地が低く低湿な環境にある場所は水田に利用される。しかし開発が進んだ現代にあってはもともとの地形、土壌の質を知ることは難しい。『土地分類基本調査　妻･高鍋』の土壌図によれば、一ツ瀬川流域に分布する土壌は大きく、グライ土、灰色低地土、褐色低地土に分けられる。おもに一ツ瀬橋より下流域はグライ土が発達し、低湿な環境となっている。灰色低地土はこれより上流域に広く分布し、さらに細粒と粗粒に分類されている。粗粒灰色低地土は「地表から25cm内外のところより砂礫層または礫層となる土壌」であり河川の旧河道であると考えられる。細粒、粗粒とも「地下水位が低く、排水の良い乾田」として利用されているが、細粒の方が生産力は高い。褐色低地土は一ツ瀬川沿いに点々と分布し、先述した氾濫原内の微高地を形成するものである。地下水位は一般に低く、肥沃度は割合に高い。畑地として利用されている。現在、西都市域の一ツ瀬川流域は水田地帯となっている。しかし土壌図から読み取れる灰色低地土、とりわけ作土直下に砂礫層、礫層を基盤とする粗粒灰色低地土の水田利用は難しく、このような乾田を広域に潤すには高度な水利体系が必要である。当地の水田利用がいつごろまで遡るかは記録にないが、先述のような土壌から推して、享保７年（1722）に杉安井堰が開かれる以前は、収穫率の悪い田畑や荒れ地が広がっていたと思われる。井堰開鑿以後、穂北、童子丸、調殿、三宅、右松、黒生野、岡富の田を潤す水利体系が徐々に整えられ、現在のような豊かな水田風景が成立したのであろう。

第２節　歴史的環境

赤池地区が所在する西都市大字三宅の地は、承平年間（931－38）の『和名類聚抄』にみえる児湯郡内八郷のうちの三宅郷に比定され、その名の由来は国の正倉である「屯倉」にあるとされている。古代三宅郷の郷域については詳らかではないが、国衙・国分寺を中心とした地域であり、建久８年（1197）の『日向国図田帳』（『宮崎県史史料編中世１』以下『図田帳』）の三宅郷はこれを継承したものであると考えられている。しかし『図田帳』の面積は開発の進展に伴い変化する流動的なものであり、古代・中世を通じたその領域については憶測の域を出ない。同様に領有関係を見ても、残存する記録の少なさから古代・中世に至る時期の土地所有の変遷を知ることは出来ない。

鎌倉時代になって幕府が諸国の守護に命じて作成させた土地台帳が先の『図田帳』である。『図田帳』には、『没官領』（朝廷に没収された平家の所領）である三宅郷に地頭信綱（宇都宮所衆信房の誤り：幕府御家人）が置かれたことが記載されている。これより南北朝期に至るまでの約130年間の三宅郷に関する記録は残っていない。宇都宮信房は晩年豊前国に下向し、子孫は豊前国に基盤を置いた。しかし、宇都宮氏はその後の三宅郷の諸記録には出て来ていない。（『宮崎県史通史編中世』）

その後、当地の領有関係を知ることが出来る記録を次にあげる。

・延文６年（1361）荒瀧彦次郎に三宅郷の水田三町･在家一人を給分（「某袖判水田等宛行状」「荒瀧彦次郎給分坪付」『宮崎県史史料編中世１』）
・永徳３年（1383）日下部盛秀は三宅郷内の給分である寺迫三反を甥の彦三郎に譲った（「日下部盛秀譲状」『宮崎県史史料編中世１』）
・応永26年（1420）郷内の石貫薗付水田が若宮に永代寄進される。三宅郷御代官幸久から石貫新左衛門尉あて。（「三宅郷代官幸久寄進状写」『宮崎県史史料編中世１』）
・永享11年（1440）代官幸久が石貫之荒野を石貫太郎左衛門尉に宛行う。（「代官幸久宛行状写」『宮崎県史史料編中世１』）

伊東祐重の日向国下向は貞和４年（1348）とされている。『県史　通史編中世』で述べられているように、延文６年の文書にある花押が祐重のものと考えると、このころにはすでに伊東宗本家の所領であったことが分かる。また、この文書や応永26年、永享11年の文書は「代官」が発給したものであり、伊東氏の土地支配の一端が伺える史料でもある。

戦国期の史料としては弘治２年（1556）の「土田帳写」（『宮崎県史史料編中世１』）がある。この文書は妻万神社をはじめとする周辺の神社の神領を記録したものであるが、その中には妻万宮領、福野八幡（現三宅神社）領として「三宅之内」の「赤野」「竹之わき」「山路」「とりこ」「たるミ」といった現在に残る地名が記載されている。また、この中の福野八幡領人給分「御祓田三反岡とミ」が現岡富地区であると仮定するならば当時は三宅郷に含まれていた可能性もある。

天正５年（1577）島津氏との戦いに敗れた伊東氏は大友氏を頼って豊後国へと落ち、翌天正６年（1578）島津氏は、高城・耳川の合戦において大友氏を破ると日向国ほぼ全域を占領した。その後、天正15年（1587）全国統一を目指す豊臣方に島津氏が降伏し、九州における中世は幕を閉じた。

天正16年（1588）豊臣秀吉の朱印知行目録によって三宅を安堵されたのは高橋元種である。県史によ

第３節　考古学的環境

①　寺崎遺跡

日向国衙推定地であり、報告によれば７世紀末から官衙的建物配置が見られ、10世紀末～11世紀初頭まで大型の建物が建てられるが、報告者は古代末の大型建物については「館」的な性格を示唆している。この他、古代の竪穴住居や中世の土坑などが確認されている。

②　日向国分寺跡

中門跡、伽藍西門跡、推定講堂跡などが確認されている。各２～３期の建て替えが想定されている。佐土原町下村窯産瓦の出土地である。

③　宮ノ東遺跡

旧石器時代から近現代までの遺構が確認されている。特に、古墳時代の竪穴住居418軒、古代の竪穴住居213軒は周辺では類を見ない遺構密度である。中世は溝、道路状遺構、土坑墓などが確認され、鉄滓、鞴羽口、土錘、植物遺体の様相から生業面を伺える遺物も多く出土している。近世には住吉神社関係の遺構や土坑墓が確認されている。

④　竹淵Ｃ遺跡

縄文時代早期から中世に至る複合遺跡で、古墳から中世面では竪穴住居29軒、小穴1200基、掘立柱建物11軒、石組土坑２基、石積遺構が確認されている。石積遺構は塚状の高まりで、上部に五輪塔、板碑が置かれた参拝施設であると想定されている。

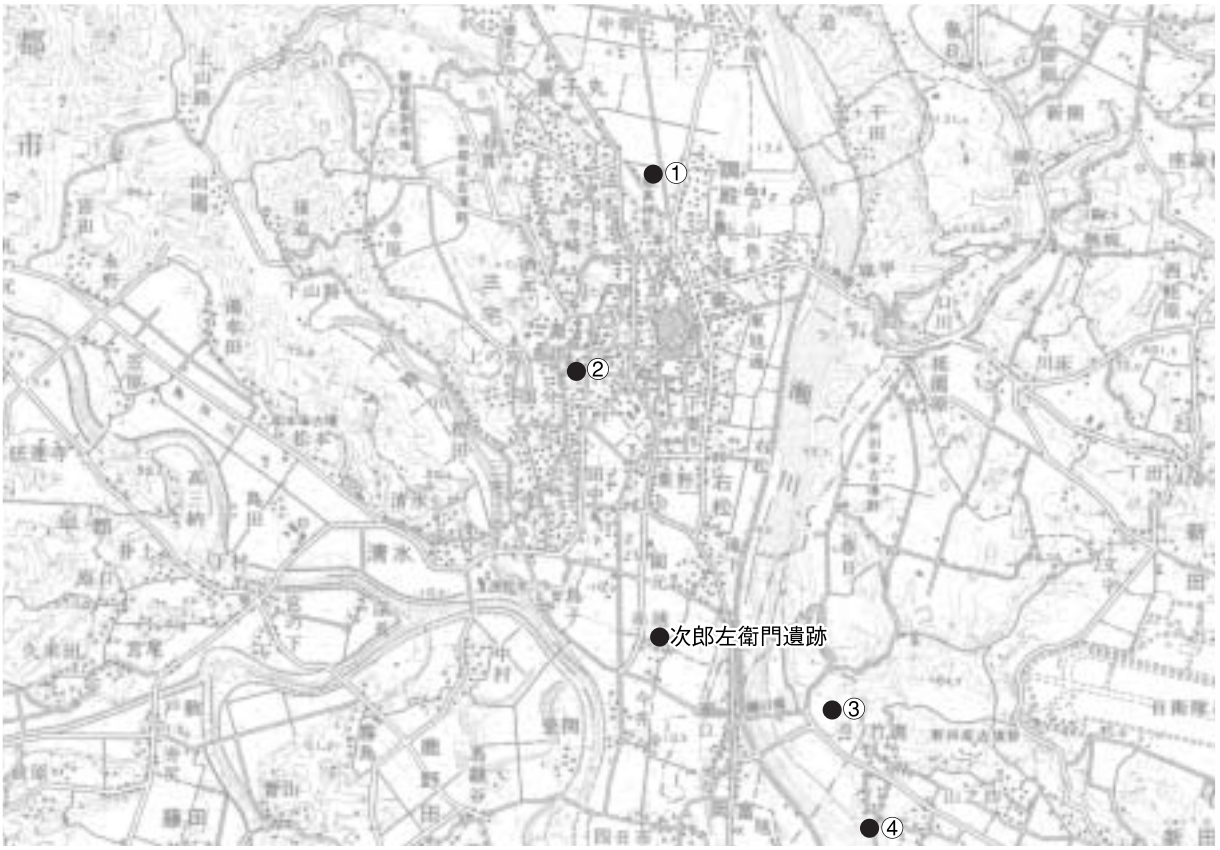


図２　周辺の遺跡（１：50000）

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の方法

調査区は、サイクリング道に沿って南北方向に伸び、市道を挟む関係で南からＡ、Ｂの２区に区分けした。調査は先ず、宅地造成土および近年の耕作土をバックホーによって除去後、遺物包含層、遺構発掘を人力で行った。また調査区全域に、世界測地系に準じた座標杭を10ｍ間隔で打ち、グリッドを設定した。各杭には４級水準点測量による海抜絶対高を出した。

表土除去後、調査区を巡らす下層確認トレンチを入れ、堆積土の層序を確認した。

写真６　　調査前の様子

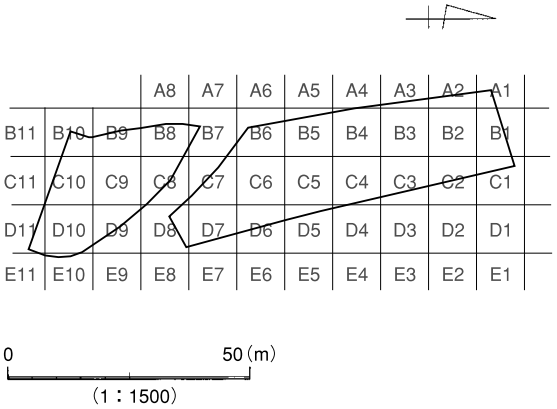


図３　調査区グリッド配置図（１：1500）

Ａ区では表土直下のⅡ層が近現代の水田耕作土と判断され、遺物包含層であるⅢ層が残存しない状況であったことから、Ⅱ層を掘り下げた後、Ⅳ層上面で遺構を検出した。

Ｂ区ではⅣ層から漸移的にⅢ層が形成された状況が確認できた。Ⅲ層とⅣ層の土質・土色が明確に分離できない堆積であった。グリッドごとにⅢ層を掘り下げ遺構検出を行ったが、遺構の見え方は一様ではなく、検出面はⅣ層上面およびⅢ層中である。

遺構の記録は埋土堆積状況図（断面図）と平面図を基本に作成した。堆積状況が単層であった遺構についての断面図は作成していない。遺構写真撮影は調査終了後、遺跡全景写真をラジコンヘリにて撮影し、遺構の個別写真や埋土堆積状況写真は調査中随時撮影した。

第２節　基本層序

Ⅰa層　現代の耕作土。台地上の黒土を持ってきたものである。

Ⅰb層　現代の宅地造成土。

Ⅱ 層　近世・近現代の遺物を含み、平行に堆積する。水田・畑耕作土と考えられる。水まわりの問題から、微高地上では水田はあまり見られないと考えていたが、近所の住民の話によると戦後までは水田だったという。耕作のためにもともとの土質、土色は変化していると考えられる。

Ⅲ層　中世の遺物包含層。Ａ区では調査区西側に薄く堆積していた。Ｂ区では良好な堆積であり、Ⅳ層から漸移的に堆積していく状況として捉えた。河川堆積土であるⅣ層を母体として生成され、遺物を包含することから人間活動と関係した土壌であるといえる。

Ⅳ層　古代の遺物包含層ではあるが、Ⅲ層のような地山からの分化はない。確認トレンチでは、検出面下約２ｍまでは同じ堆積が続く。

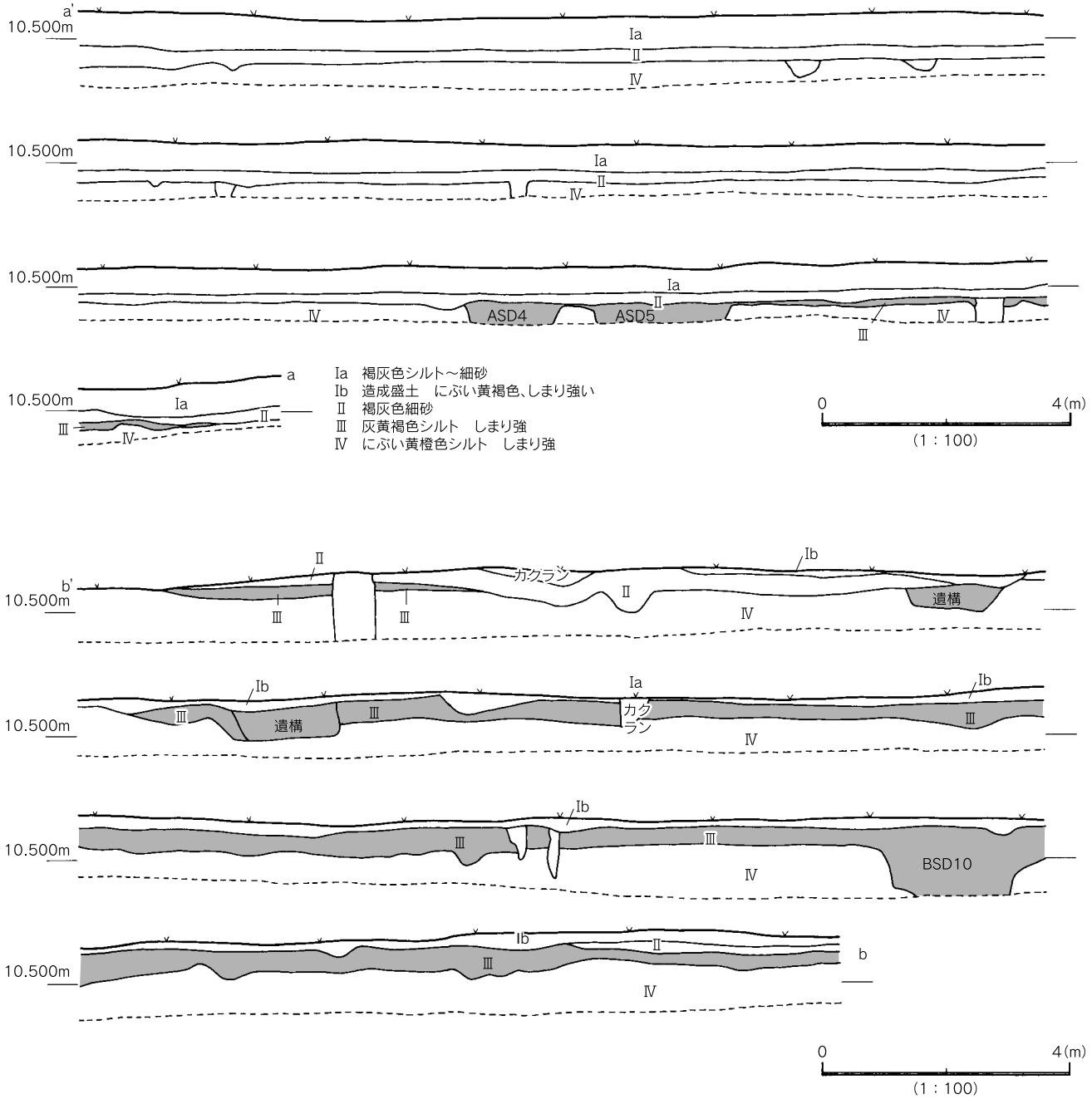


図４　調査区南壁（Ａ区）・西壁（Ｂ区）土層堆積状況（１：100）

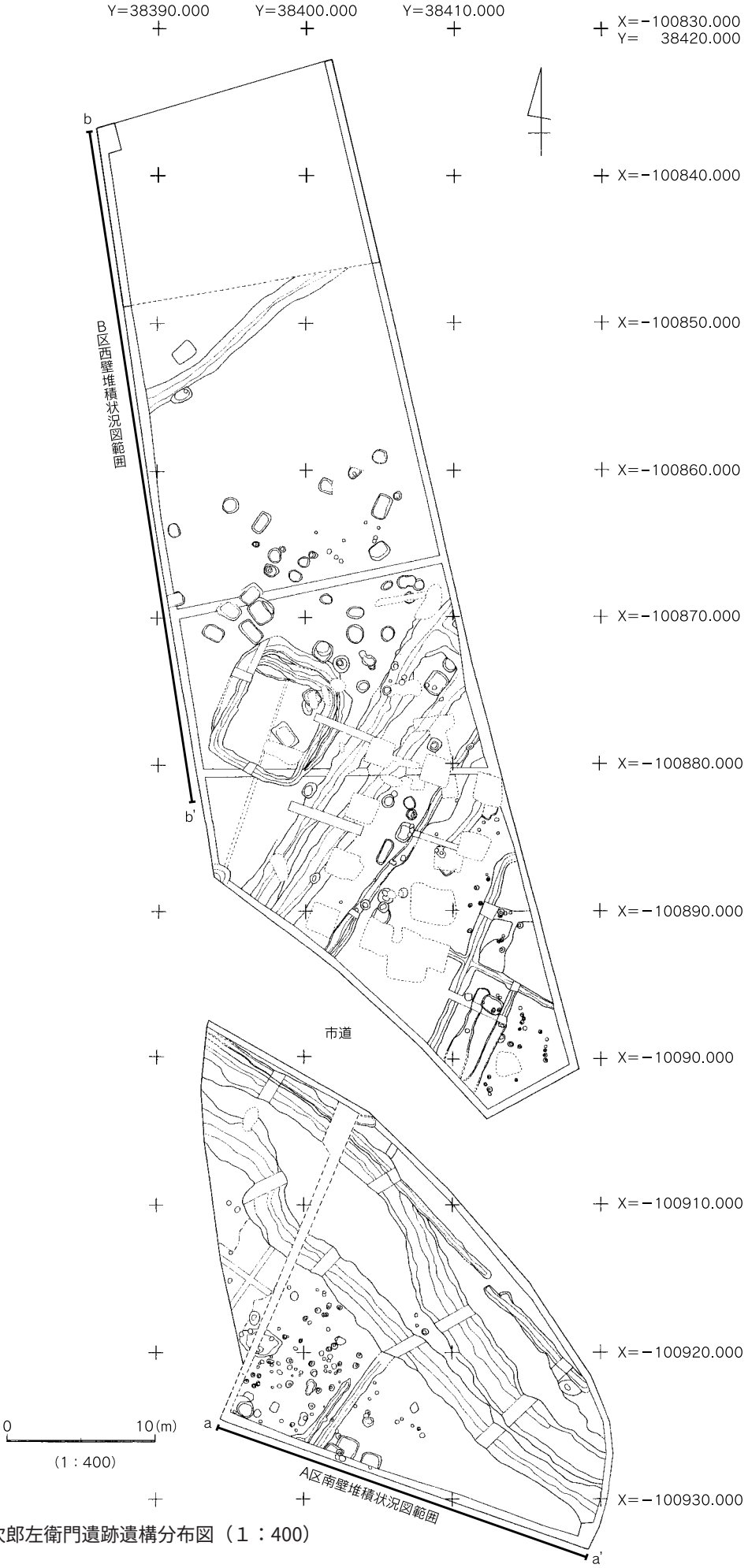


図５　次郎左衛門遺跡遺構分布図（１：400）

第３節　遺構の分布（図５）

後世の攪乱や削平を多く受けた調査区ではあるが、全体を概観すると、中央から南側にかけて遺構の集中があり、微高地端にあたる北側にいくにしたがって疎らである。中世、近世の遺構が大半を占める。その分布範囲は、微妙に重なり合いながらも分布の中心が重なることはなく、各時代による土地利用の違いを反映しているものと考える。

中世、近世ともに溝に区画された集落景観として復元されるであろうが、中世、近世ともに屋敷地の中心であった様相ではなく、集落の縁辺であった可能性がある。近世の溝は18世紀後半から19世紀初めに埋め立てられた状況であり、集落の地割を変えるなど、それまでとは異なる土地利用を始めるためであったと推測される。出土遺物は大きく、古代以前、古代（９世紀～10世紀代）、中世（12世紀後半～16世紀後葉）、近世（18世紀後半～19世紀初め）の所産に分けられる。

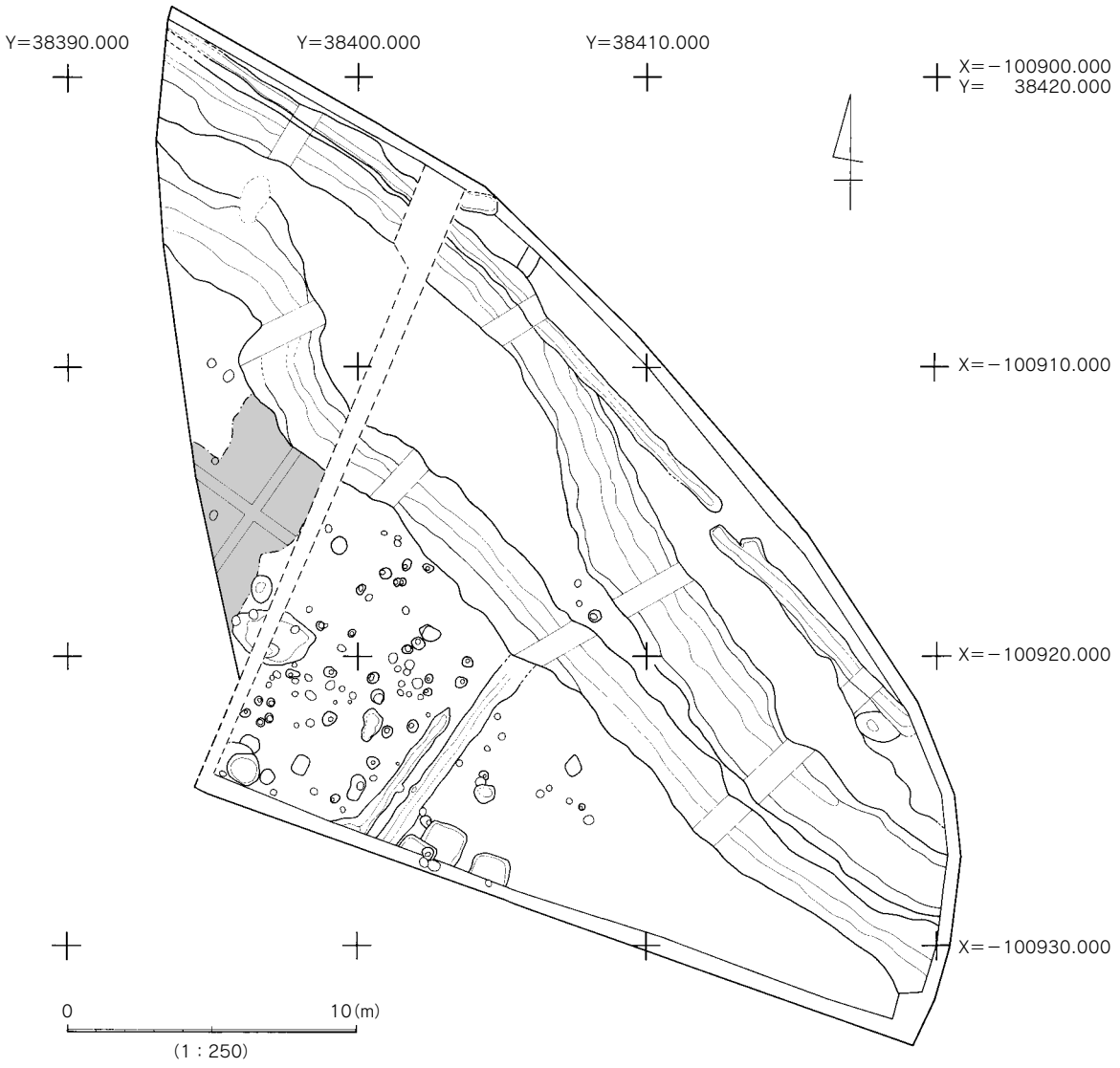


図６　Ａ区遺構分布図（１：250）

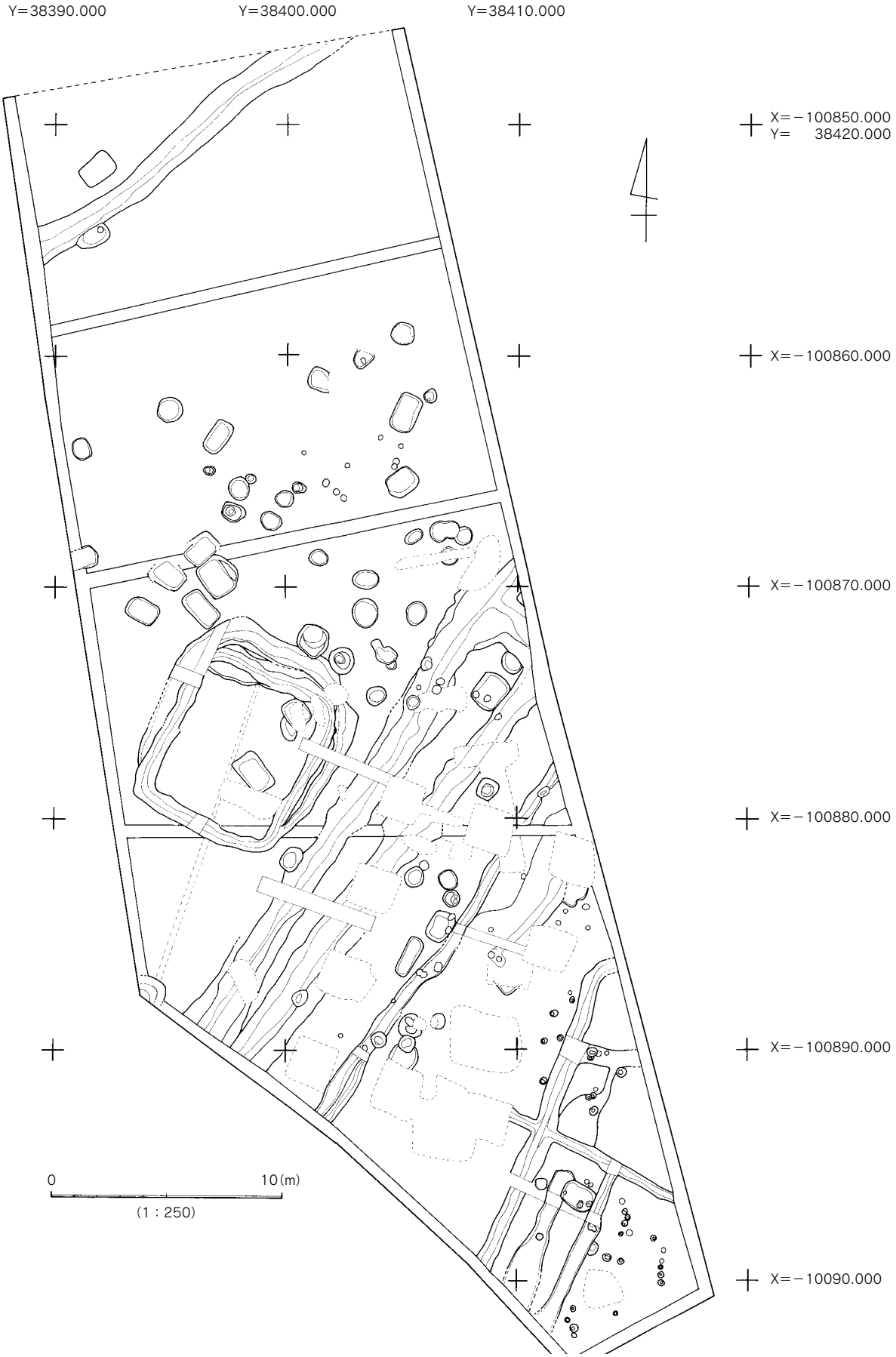


図７　Ｂ区遺構分布図（１：250）

第４節　各区の概要

Ａ区（図６）：　現況は畑地である。表土（Ⅰ層）は、台地上に生成する黒土であり、畑作のためにここに移動されたものである。表土直下に水田層（Ⅱ層）が確認された。この水田層からは少量の近現代遺物に混じって中近世の遺物が出土したが、ごく微量である。遺物包含層（Ⅲ層）は削平のため残っておらず、水田層の直下は基盤層（Ⅳ層）である。グリッドごとにⅡ層を除去し、検出はⅣ層上面で行った。検出した遺構は、Ⅱ層由来の埋土を持つ近現代のもの、Ⅲ層の淡い色調の土を埋土とする近世のもの、Ⅲ層由来の埋土を持つ中世（古代も含むか）のもの、Ⅳ層由来の埋土を持つものである。このうち近現代の遺構は記録していない。

各時代の遺構・遺物は以下のとおりである。

近世の遺構：溝３条（ＡＳＤ１・２・３）、土坑３基（ＡＳＫ１・２・３）
中世の遺構：溝２条（ＡＳＤ４・５）、土坑３基（ＡＳＫ４・５・６）、柱穴97基
時期不明（古代か）の遺構：柱穴４基、落ち込み

遺物：肥前系陶磁器、薩摩系陶器、関西系擂鉢、瓦質土器、焙烙、中国産青磁・白磁・染付、備前産陶器、東播系須恵器、中世土師器、須恵器、土師器、瓦、火打ち石、銅銭、鉄滓

Ｂ区（図７）：　現況は宅地と畑地である。表土はおもに宅地造成土であった。一部、Ａ区で確認した水田層（Ⅱ層）が堆積し、一時は水田として利用されていたらしい。現代の攪乱が著しかった調査区北端の約230㎡は遺構が検出されなかったため、排土置き場とした。また、調査区全域にわたって建物基礎などの攪乱が激しく遺構を破壊している状況であったが、遺物包含層であるⅢ層は良好に残っていた。表土除去後、グリッドごとにⅢ層を掘り下げながら遺構検出を行った。検出した面はⅢ層中およびⅣ層上面である。遺構の埋土はほぼＡ区と同様であった。遺構図上、比較的大きな攪乱は最小線幅の波線であらわした。

各時代の遺構・遺物は以下のとおりである。

近世の遺構：溝４条（ＢＳＤ１・２・３・４）
中世の遺構：溝５条（ＢＳＤ５・６・７・８・９・10）、土坑（ＢＳＫ）54基、柱穴68基

遺物：肥前系磁器・中国産青磁・白磁・染付、備前産陶器、常滑産陶器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、中世土師器、須恵器・土師器

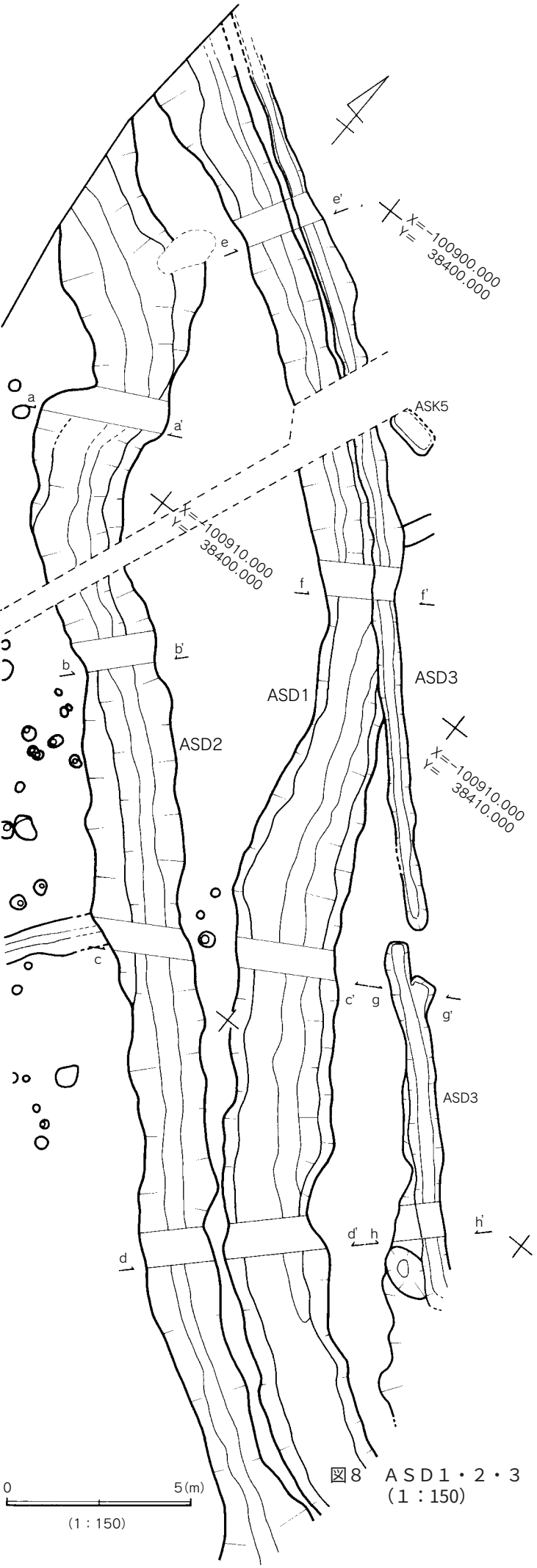


図８　ＡＳＤ１・２・３
（１：150）

第５節　Ａ区の遺構と遺物

近世

溝跡（ＡＳＤ１・２・３）

調査区を縦断する３条の溝跡は、出土した遺物の接合関係から19世紀初め以降に一度に埋められたと考えられる。

ＡＳＤ１は検出面にて礫・遺物が確認された。堆積土はⅣ層に類似するが、若干砂質であった。礫・遺物はほとんど遺構上面から出土している。この出土状況を一括廃棄状況と捉えれば、検出面においてすでに遺構底面付近であった可能性があり、上層と下層の堆積に時間的な断絶が推測される。

ＡＳＤ２の溝底面付近からは人頭大から拳大の礫と一緒に陶磁器が廃棄された状況で出土した。廃棄された礫は溝の西側では拳大の円礫、東側は割れた人頭大の礫で赤化するものも見られた。断面形は逆台形で、人為的に掘削された溝であると考えられる。堆積状況を見ると、最下層に粘土が堆積し、その直上に礫・遺物が検出された。水路として利用されていた可能性がある。また、自然堆積層を掘り込んで掘削されていることから、何度か掘り直しされた溝であったことが伺える。

ＡＳＤ３はＳＤ１と重複関係にあり、東側で一端途切れ、互い違いの溝となる。東側の溝は掘り直しの跡が見られた。布堀状の溝で、ほぼ現在の市道と平行する。堆積土はブロック土を含み、一度に埋められたと推測される。

削平のために調査区の旧地形の復元は困難であるが、溝底面の標高から推して北西から南東に傾斜する地形であったと考えている。

18世紀後半～19世紀初めの遺物が大量に出土していることから、この時期以降に埋められたと考えているが、廃棄された大量の遺物や礫はどこからもたらされたのか、疑問は残る。

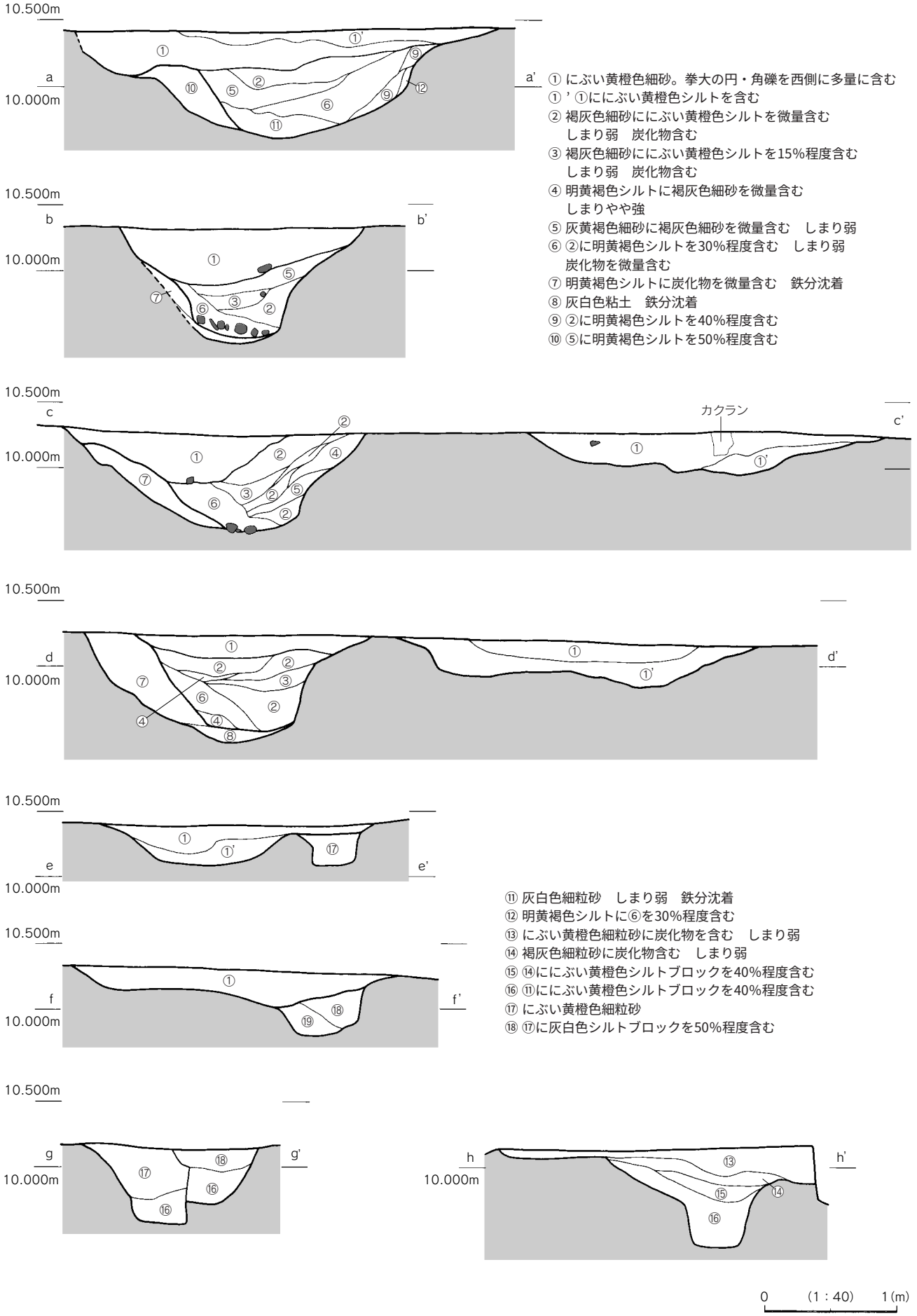


図９　ＡＳＤ１・２・３堆積状況図（１：40）

遺物（図10～18）

出土した遺物は、総重量60.2kgで、弥生時代から近世後半までの幅広い時期のものが出土している。これらを概観すると、①９世紀から10世紀代、②12世紀後半から16世紀後葉、③18世紀後半から19世紀初めの時期に出土数がまとまっている。以下に時期ごとの様相をまとめる。

①　９世紀から10世紀代（図15－112～127　8.6kg）

遺物の種類と器種は、土師器坏・埦・甕・かまど、須恵器坏・はそう・瓶・甕、灰釉陶器瓶である。土師器埦の時期は、円盤状、高脚といった高台形態のものが出土し、これらは10世紀代のものであろう。図15に図示した110・111の土師器坏は古代的な様相を持つが、体部の開き具合から11世紀代に入るかもしれない。土師器甕は、内面縦方向ケズリ調整を施すものが多く、口縁部のつくりも断面方形のものが多い。９世紀代の所産と考えられる。須恵器は、重量のほとんどを甕破片が占めている。全体的に焼成は良い。124に図示した甕破片は内面に車輪文の当て具痕が残る。下村窯産の可能性がある。灰釉陶器瓶は127に図示した。体部上半に釉をハケ塗りする。黒笹90号窯式と見られ、９世紀後半の年代が与えられる。

②　12世紀中葉から16世紀後葉（図15～17－128～194　18kg）

東播系須恵器、瓦器・瓦質土器、備前壺・甕・摺鉢、常滑甕、中国産青磁・白磁・染付・褐釉陶器が出土している。東播系須恵器は13世紀前葉から14世紀前半の特徴をもつものが多い。備前摺鉢は14世紀中葉から16世紀後葉のものがみられ、壺･甕は15世紀代に収まると思われる。中国産青磁は157の同安窯系青磁碗、158の龍泉窯系内面劃花文碗といった12世紀中葉から後半にかけてのものは少なく、多数を占めるのは14世紀後半から15世紀中葉ごろの年代を持つものである。白磁の年代も概ねこれと同様な年代を持つもの（166・174）、15世紀中葉から後半（164・167・168・169）と、15世紀後半から16世紀中葉（165・170・172・173）景徳鎮窯産白磁の時期がある。染付は、概ね15世紀後半から16世紀後半まで流通したものである。なお、遺物観察表の分類は、中世遺物についての代表的な文献による分類に従う。これらの文献については、巻末に記載している。

③　18世紀後半から19世紀初め（図10～14－１～108　32.5kg）

近世の遺物の年代は、磁器の器形・文様から判断した。器形は碗類が多く、喫茶用の茶碗である筒型碗・丸碗、飯碗、体部が直線的に開く蓋付の碗に、この時期の特徴が現れている。文様では、見込み五弁花文・四方襷文・矢羽根文・梅花文・菊花文・二重網目文・コンニャク印などである。なお、焼き物の年代について、肥前産磁器に見られる特徴で時期決定を行ったのであるが、近年、肥前以外の窯で類似した焼き物を生産している報告も見られるようになってきた。当遺跡出土の磁器もその可能性は持っているが、他の生産地でも、器形・文様は肥前産の製品が模倣されていると考えて時期を比定した。また、陶器の生産についても同様の状況にある。当遺跡でも、薩摩焼の器形・釉薬に似た特徴をもつ「薩摩系」とも言うべき一群（図10－13～17、図13－82～90）が出土している。この他、鉄滓が約２kg出土している。

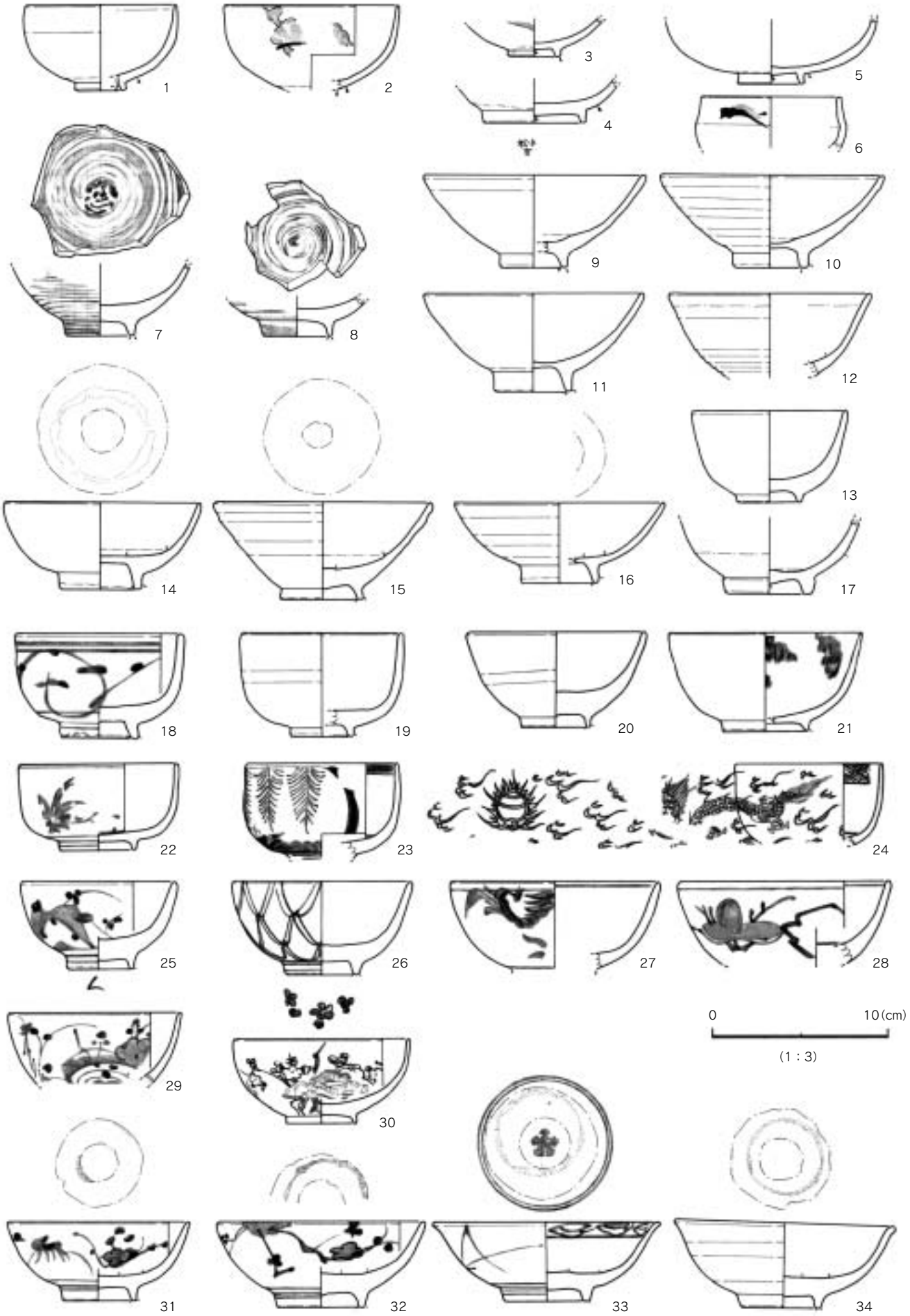


図10　近世溝出土遺物実測図①（1：3）

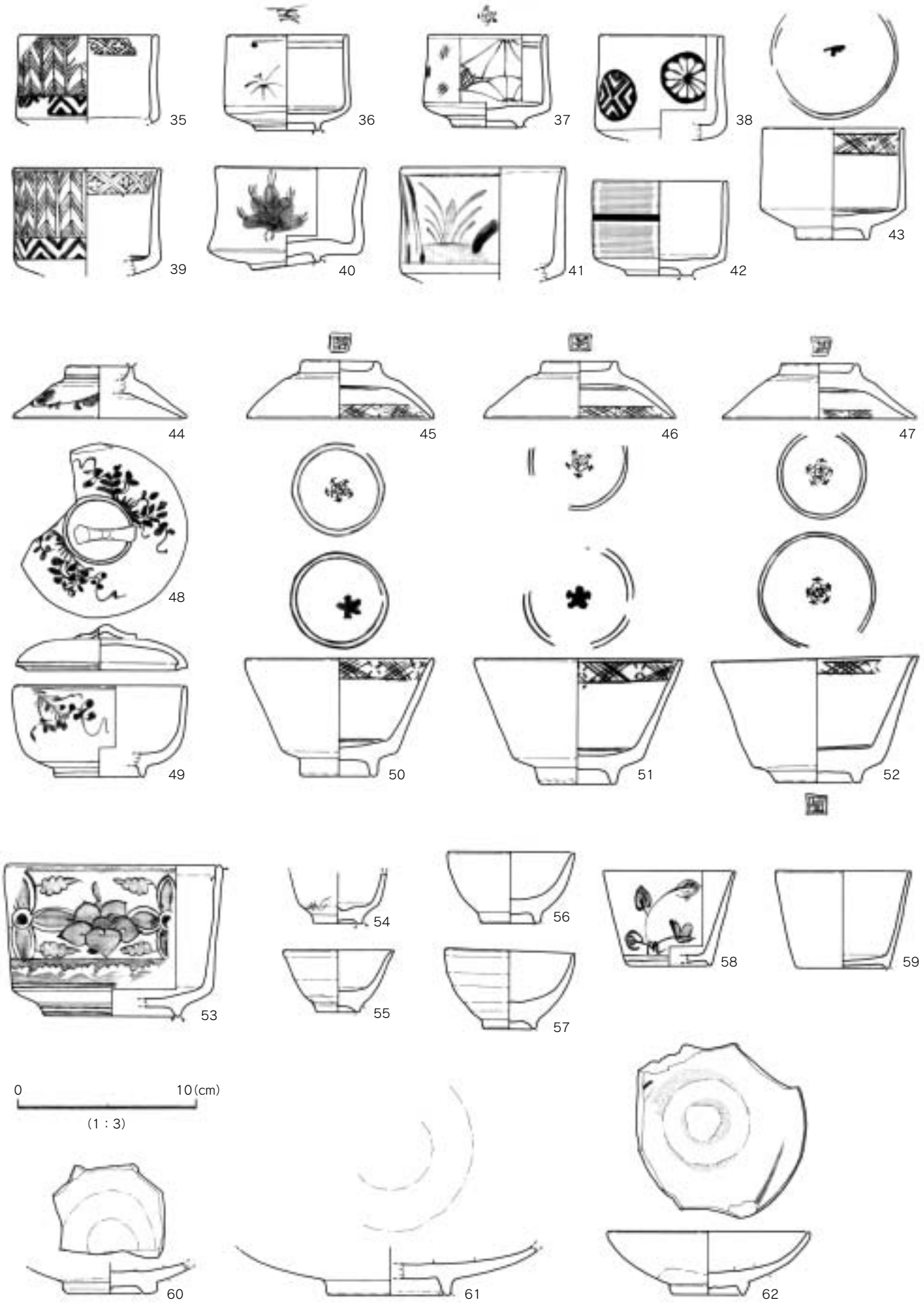


図11　近世溝出土遺物実測図②（1：3）

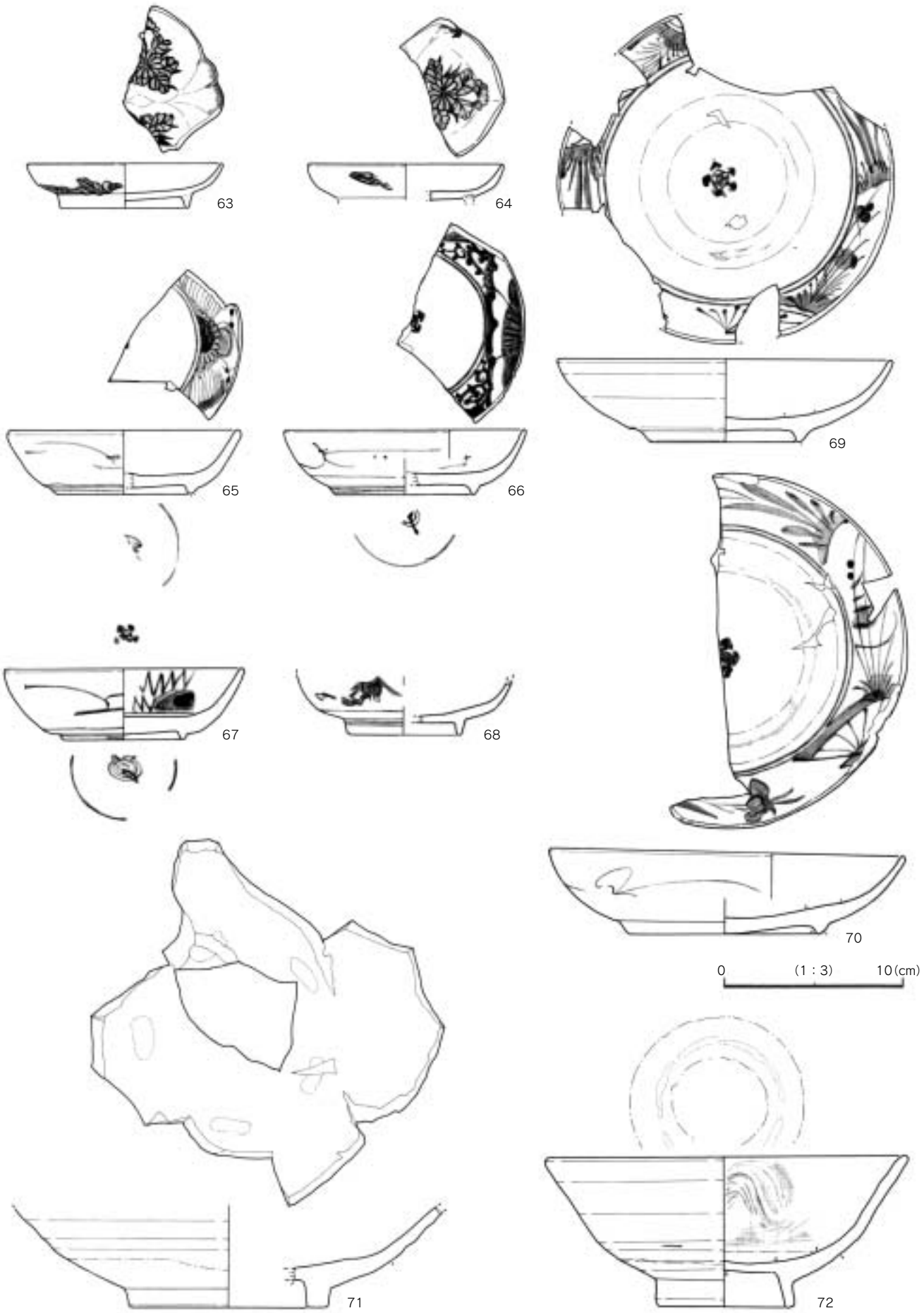


図12　近世溝出土遺物実測図③（1：3）

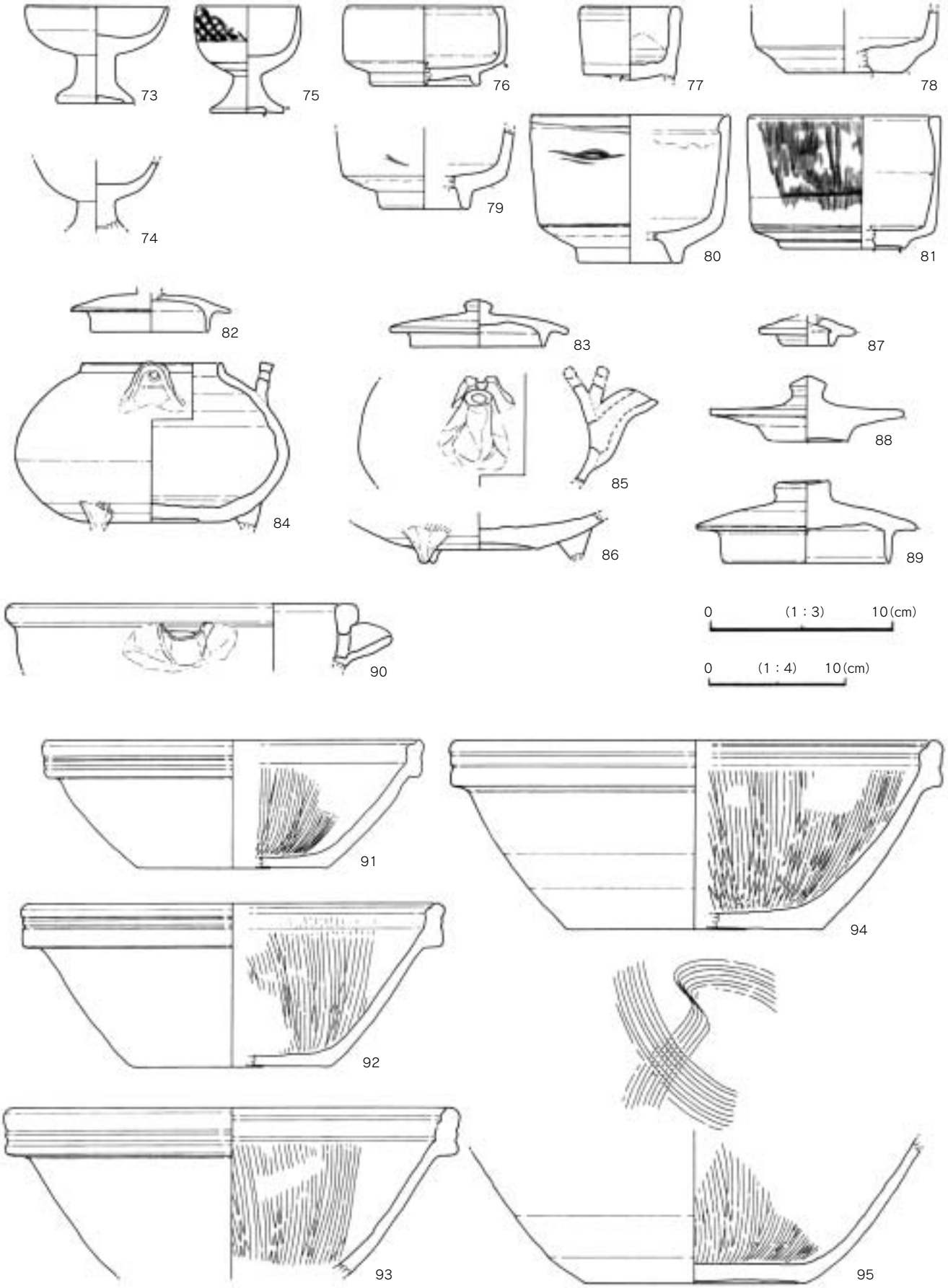


図13　近世溝出土遺物実測図④（1：3 , 91～95は1：4）

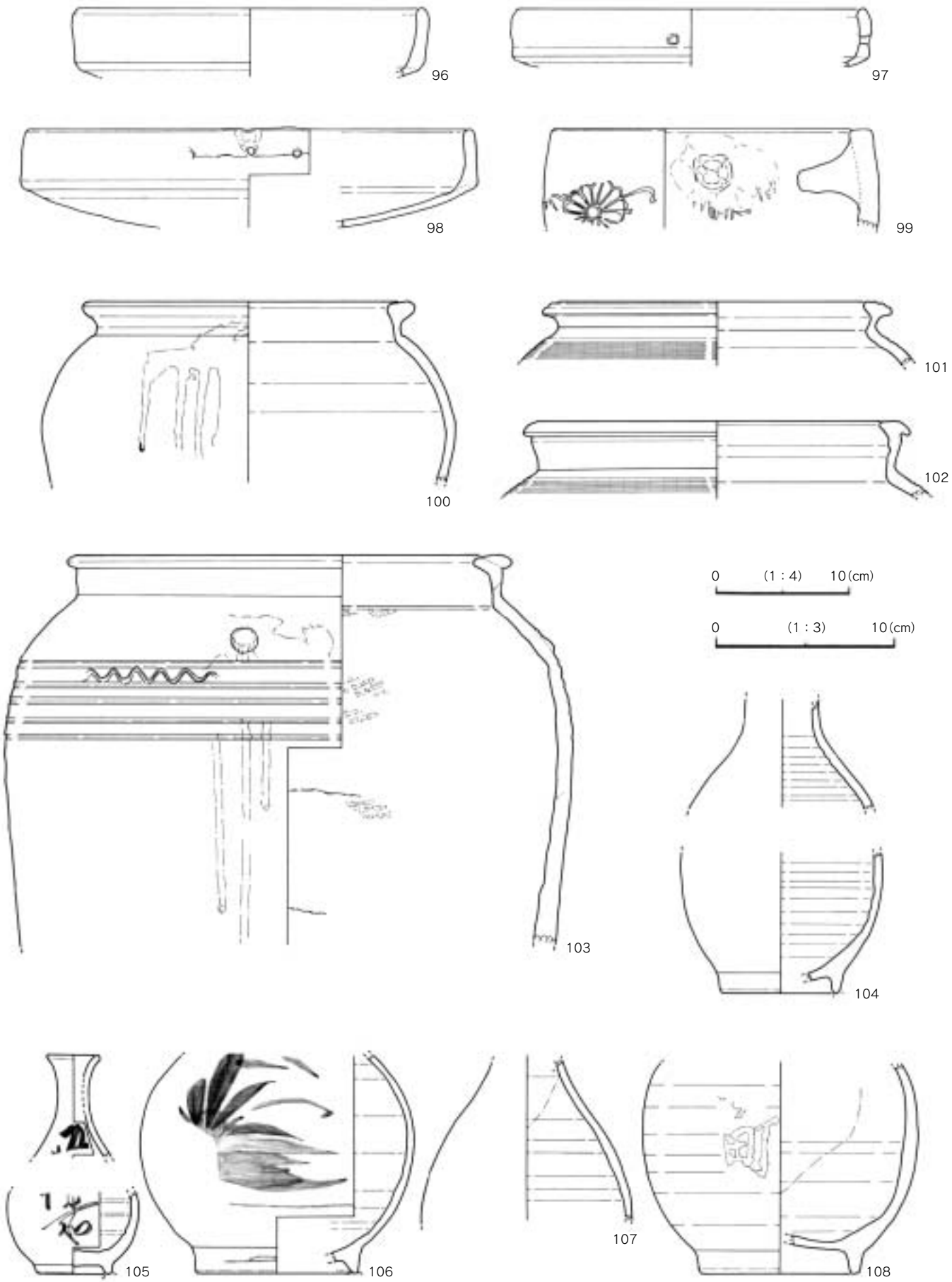


図14　近世溝出土遺物実測図⑤（1：3 , 100～103は1：4）

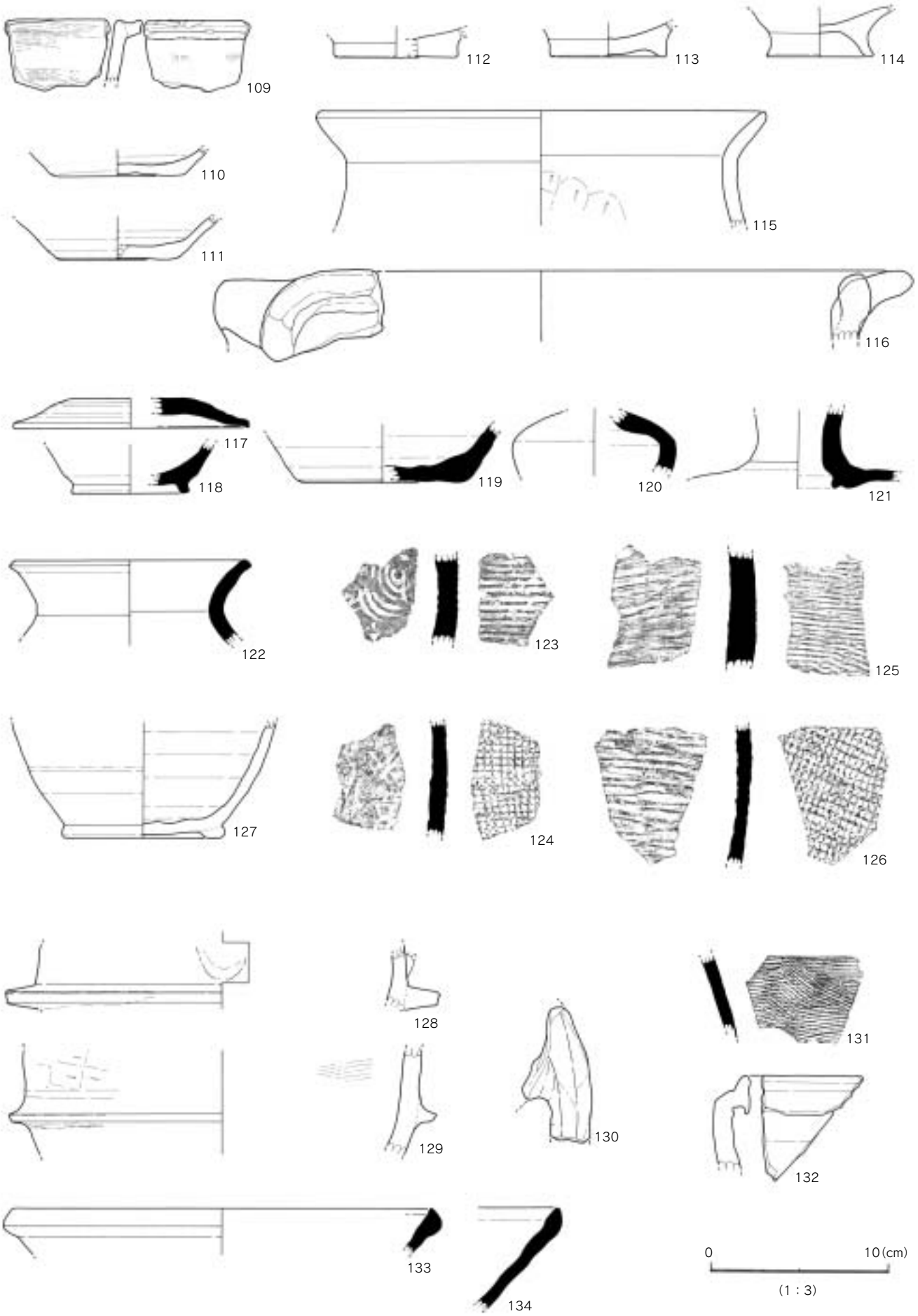


図15　近世溝出土遺物実測図⑥（1：3）

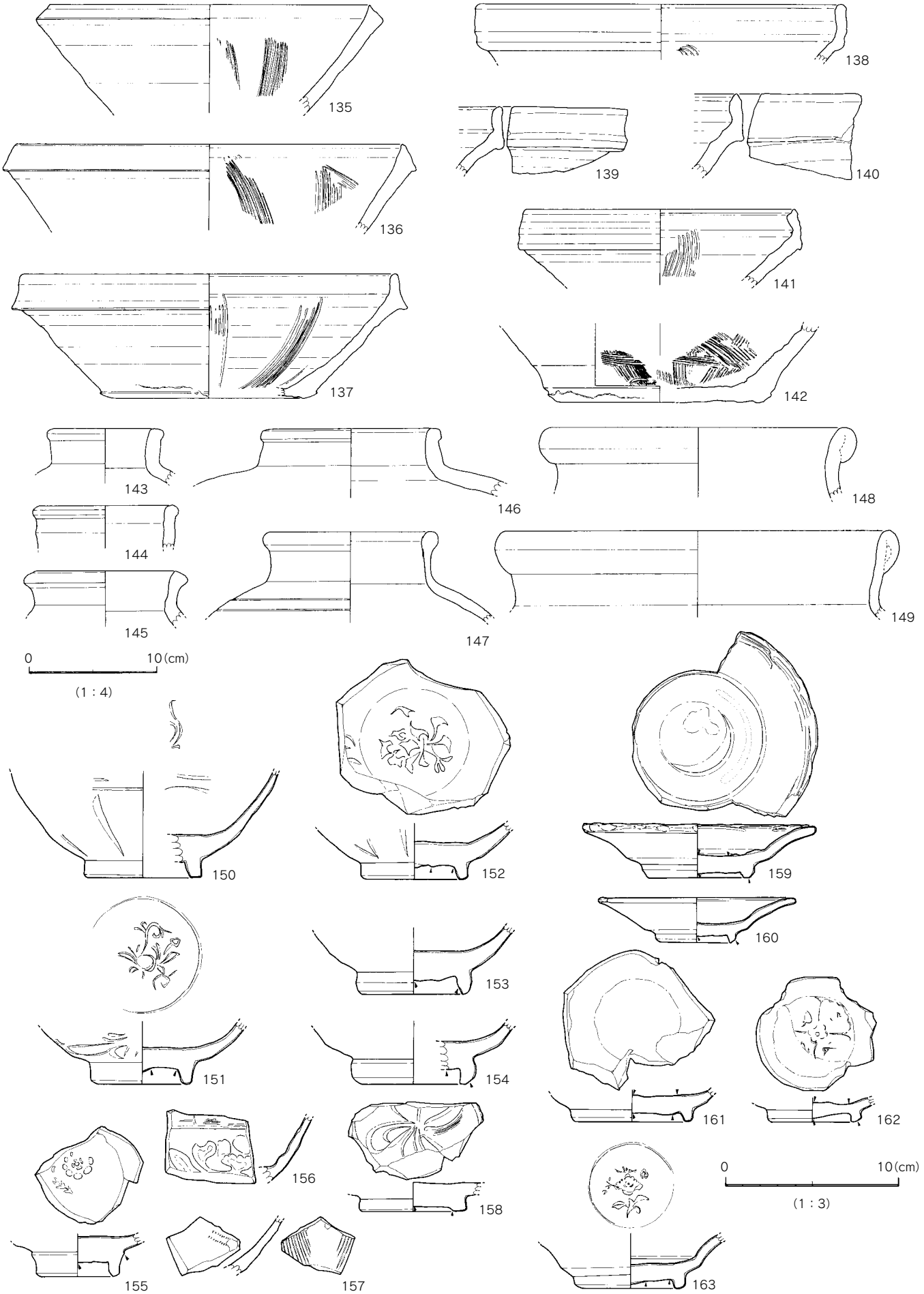


図16　近世溝出土遺物実測図⑦（153～149は1：4 , 150～163は1：3）

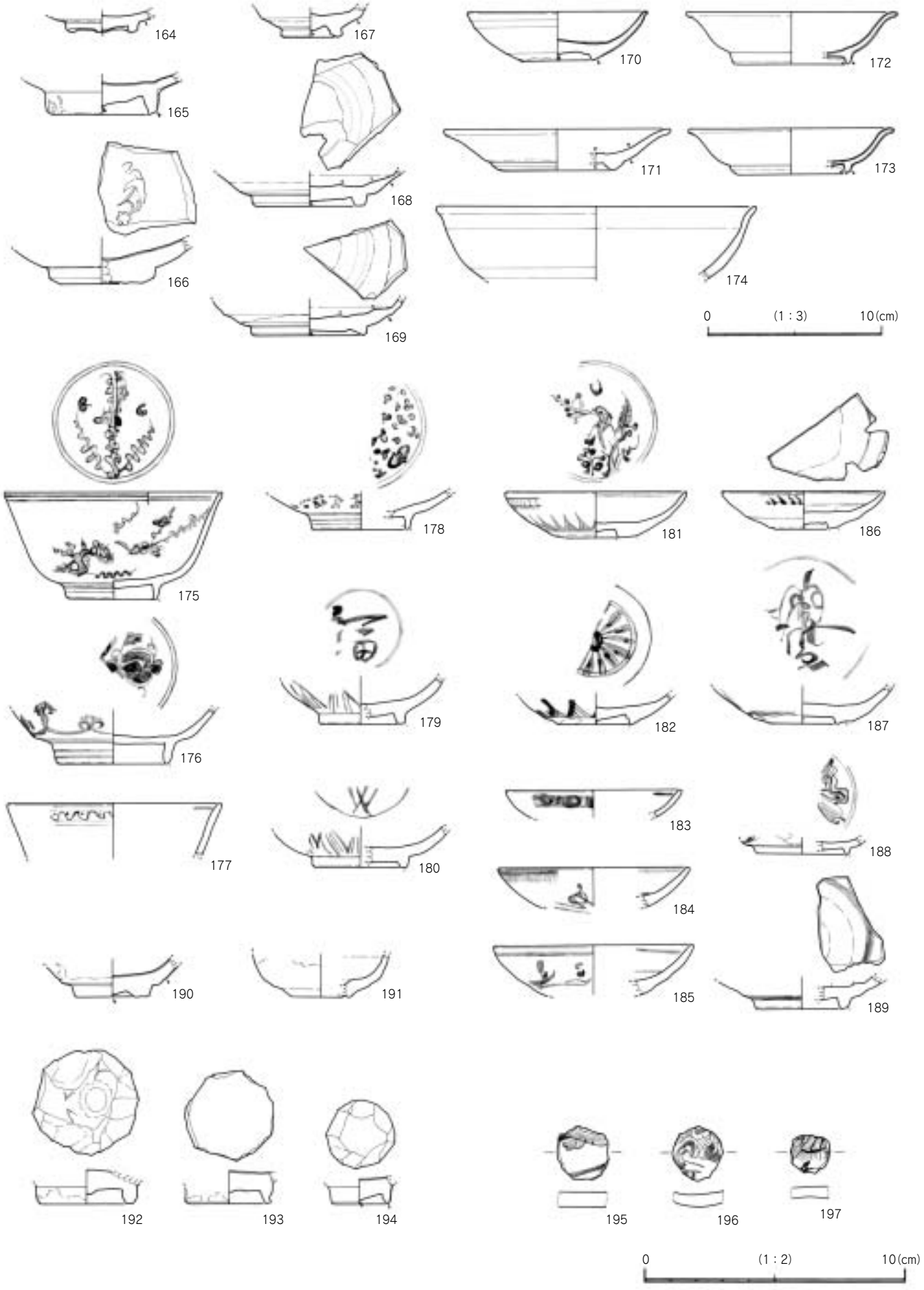


図17　近世溝出土遺物実測図⑧（1：3，195～197は1：2）

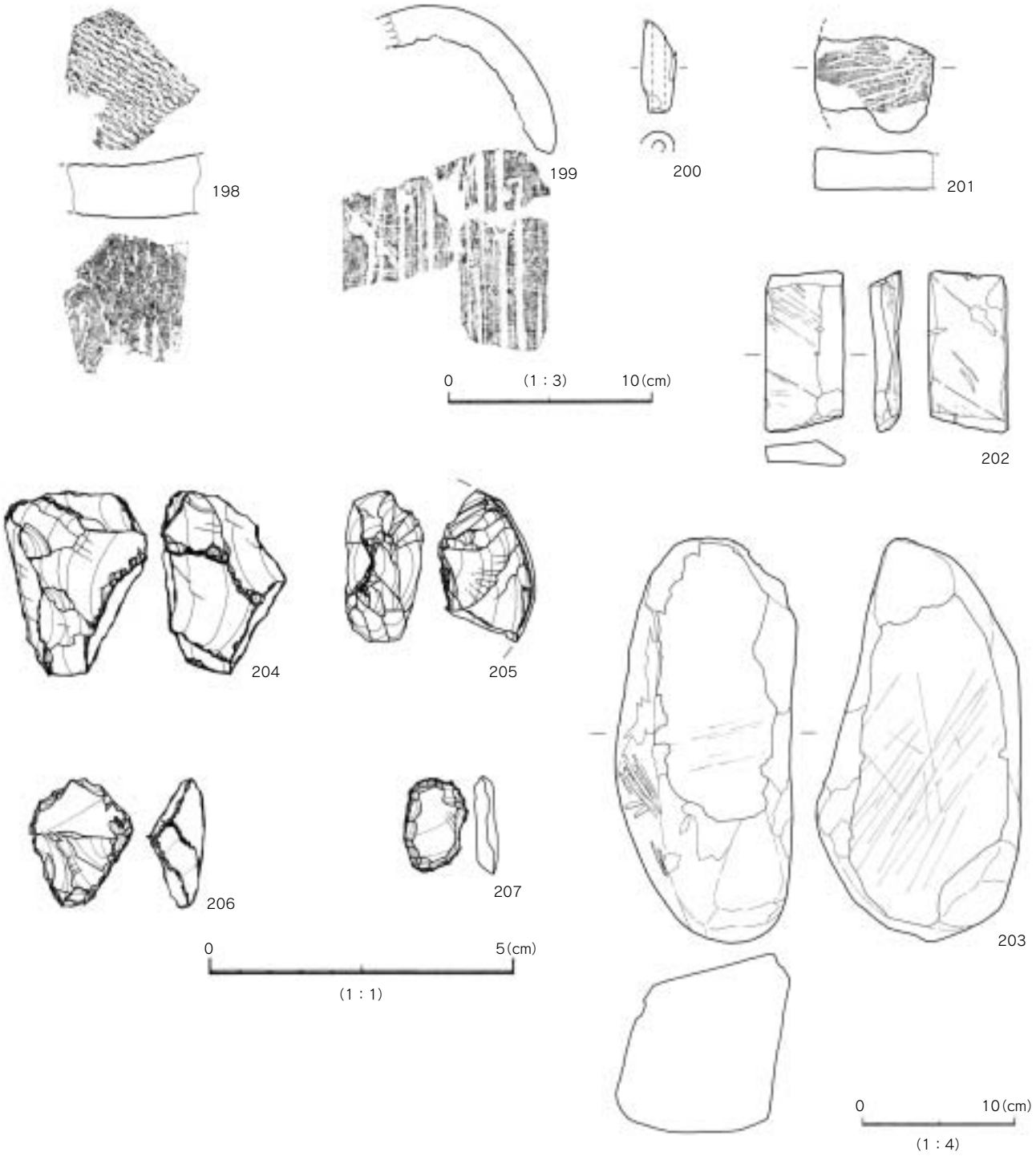


図18　近世溝出土遺物実測図⑨（1：3 , 201～203は1：4 , 204～207は1：1）

表１　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
1	SD2	陶器丸碗	(8.4)	(2.4)	4.9	透明釉	釉調：灰白色 胎土：にぶい黄橙色				京焼	
2	SD2上・下層	陶器丸碗	(9.3)			透明釉	釉調：浅黄色 胎土：にぶい黄橙色	色絵			京焼	
3	C-9Ⅱ層	陶器丸碗		(2.9)		透明釉	釉調：灰黄色 胎土：にぶい黄橙色	色絵			京焼	
4	SD2礫集中	陶器碗		5.8		透明釉	釉調：灰黄色 胎土：にぶい黄橙色			「小松吉」	肥前	京焼風
5	SD1・2下層	陶器丸碗		3.7		透明釉	釉調：浅黄色 胎土：にぶい黄橙色				京焼	
6	SD2上層	陶器せんじ碗	(7.7)			透明釉	釉調：浅黄色 胎土：にぶい黄橙色	鉄絵あり			肥前	京焼風
7	SD2礫集中	陶器碗		(3.8)		白化粧土	内外面：灰褐色・灰白色	刷毛目	刷毛目		肥前	唐津
8	SD3上層 C-8Ⅱ層	陶器碗		(3.8)		白化粧土	内外面：灰色・灰白色	刷毛目	刷毛目		肥前	唐津
9	SD2上層	陶器平碗	(12.6)	(3.6)	5.3	灰釉	釉調：にぶい黄褐色 胎土：灰色					在地？
10	SD2礫集中・上層下層	陶器平碗	12.5	4.3	5.35	灰釉	釉調：灰黄色 胎土：灰色					在地？
11	SD1上層 SD2	陶器平碗	(12.3)	(4.4)	(5.6)	灰釉	釉調：にぶい黄色 胎土：灰色					在地？
12	SD2 C-9Ⅱ層	陶器碗	(11.3)			口縁:緑灰色の釉 内外面:透明釉	内外面：灰色 口縁：緑灰色					
13	SD3	陶器碗	(8.6)	(3.5)	5.3	鉄釉	内外面：黒色 口縁：暗褐色					在地？
14	SD1・3上層 C-9Ⅱ層	陶器碗	11.2	4.5	5.0	鉄釉	釉調：黒色			蛇の目釉はぎ		在地？
15	SD2礫集中	陶器碗	12.2	4.6	5.6	鉄釉	釉調：暗オリーブ褐色			蛇の目釉はぎ		在地？
16	SD2下層	陶器碗	(11.8)	(4.3)	4.5	鉄釉	釉調：にぶい褐色			蛇の目釉はぎ		在地？
17	C-9Ⅱ層	陶器碗		(5.0)		外白釉 内鉄釉	外面：灰白色 内面：黒褐色					
18	SD2上層	陶胎染付碗	9.6	4.1	6.0	陶胎染付		口縁部二重圏線 唐草文				
19	C-9Ⅱ層 D-10Ⅱ層	青磁碗	9.0	3.7	5.9	青磁釉	釉調：灰オリーブ色～灰色					
20	SD2上層・3 D-10Ⅱ層	青磁碗	10.5	4.0	5.4	青磁釉	釉調：オリーブ灰色～灰色					
21	SD2上層	青磁染付碗	(11.0)	(4.8)	(5.65)	青磁釉			呉須が流れたような文様			
22	SD2礫集中・下層 D-9Ⅱ層	染付丸形碗	(9.0)	4.4	4.9	染付		口縁部一重圏線 草花文 腰部一重圏線		高台二重圏線		
23	SD2礫集中	染付丸形碗	(8.4)			染付		藤花文	口縁部二重圏線	高台二重圏線		
24	SD2礫集中・上層下層	染付丸形碗	8.3			染付		龍・飛雲・火焔宝珠文	四方襷文帯			
25	SD2	染付飯椀	(8.7)	(3.85)	5.0	染付		梅花文		高台二重圏線 外底「Ｌ」	肥前	
26	C-8Ⅱ層	染付飯椀	10.05	4.2	5.3	染付		二重網目文		高台二重圏線	肥前	

表２　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
27	SD2上層	染付飯椀	11.8			染付		口縁部一重圏線	口縁部一重圏線		肥前	
28	SD2上層	染付飯椀	(11.8)			染付		口縁部一重圏線松と重ね菱	口縁部一重圏線	見込み一重圏線	肥前	
29	SD3上層 D-9 II 層	染付飯椀	(9.8)			染付		梅花文			肥前	
30	SD2上・下層	色絵丸椀	(9.85)	3.85	4.8	色絵		松竹梅文		赤絵梅花文	肥前	
31	SD2下層	染付飯椀	(10.45)	4.25	4.55	染付		梅花文 腰部一重圏線		見込み蛇の目釉はぎ 高台二重圏線	肥前	
32	SD2上・下層	染付飯椀	(11.65)	(5.0)	(4.9)	染付		梅花文 腰部一重圏線		見込み蛇の目釉はぎ 高台二重圏線	肥前	
33	SD2礫集中 D-9 II 層	染付飯椀	(13.0)	4.8	4.5	染付		折松葉文	連弧文帯	蛇の目釉はぎ・コンニャク五弁花	肥前	
34	SD2礫集中・下層	飯椀	(12.65)	4.5	5.1	白磁	釉調：明オリーブ灰色			蛇の目釉はぎ	肥前	
35	SD3上層	染付筒型碗	(7.68)			染付		矢羽根文	四方襷文帯			
36	SD2礫集中	染付筒型碗	(6.6)	(3.6)	5.4	染付		草文	口縁部二重圏線	見込み一重圏線・文様 高台二重圏線		
37	SD2	染付筒型碗	6.5	4.0	5.2	染付		格子地半菊文 腰部一重圏線		見込み花文		
38	SD2上・下層	染付筒型碗	(6.7)			染付		コンニャク印文様				
39	SD1上層 SD2	染付筒型碗	8.2			染付		矢羽根文	四方襷文帯	見込み一重圏線		
40	SD2	染付筒型碗	(8.2)	3.7	5.9	染付		松				
41	C-9 II 層	染付筒型碗	9.1			染付		口縁部一重圏線 草花文				
42	SD1・SD3上層 D-10 II 層	染付筒型碗	(7.3)	(3.6)	5.33	鉄絵		鉄釉帯文・沈線			肥前	
43	SD2下層 D-10 II 層	青磁染付筒型碗	7.75	4.15	6.3	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・文様		
44	SD2上層	染付蓋	(9.7)		2.9	染付		頂部一重圏線 唐草文		摘み二重圏線		
45	SD2上層	青磁染付蓋	10.45		3.3	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・五弁花 摘み内「菫」	肥前	筒江窯 18c後半～19c初め
46	SD2下層	青磁染付蓋	10.7		3.2	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・五弁花 摘み内「菫」	肥前	筒江窯 18c後半～19c初め
47	SD2礫集中	青磁染付蓋	10.9		3.7	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・五弁花 摘み内「菫」	肥前	筒江窯 18c後半～19c初め
48	SD2礫集中・上層	染付蓋	(8.35)			染付		口縁部一重圏線 草花文				
49	SD2上層 D-10 II 層	染付丸碗	(9.4)	(5.05)	(5.15)	染付		口縁部一重圏線 草花文 腰部二重圏線		頂部二重圏線 高台二重圏線		
50	SD2 D-10 II 層	青磁染付朝顔型碗	10.45	4.4	6.6	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・コンニャク五弁花	肥前	18c後半～19c初め
51	SD2礫集中・下層 D-9 II 層	青磁染付朝顔型碗	11.6	4.4	7.1	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・コンニャク五弁花	肥前	18c後半～19c初め
52	SD2上・下層	青磁染付朝顔型碗	(11.6)	4.75	7.25	外青磁内染付		青磁釉	四方襷文帯	見込み二重圏線・五弁花 外底「菫」	肥前	筒江窯か 18c後半～19c初め

表３　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
53	SD2	染付筒型鉢	(12.0)	(7.5)	8.6	染付		口縁部一重圏線 花文 腰部二重圏線		高台二重圏線		蓋物か
54	SD2下層	染付小坏		3.8		染付		草花文			肥前	18c代
55	Ⅱ層	陶器小坏	(6.15)	(2.4)	3.5	白化粧土	内外面：灰褐色 胎土：にぶい褐色					
56	SD2下層	小坏	(7.1)	(3.4)	4.0	白磁	釉調：灰色 胎土：灰白色					
57	SD2下層	陶器小坏	7.15	3.0	4.4	白化粧土	内外面：灰白色 胎土：にぶい褐色				薩摩	
58	SD2 D-9・11Ⅱ層	染付蕎麦猪口	7.3	4.6	5.4	染付		草花文 二重圏線				18c代
59	SD2礫集中・下層	蕎麦猪口	(7.6)	5.0	5.5	白磁	釉調：灰白色					
60	SD3	陶器皿		(4.8)		外白釉 内銅緑釉	釉調：緑灰色 胎土：にぶい黄橙色			蛇の目釉はぎ	肥前	内野山窯
61	SD2	陶器皿		(6.8)		黄釉	釉調：浅黄色 胎土：褐色			蛇の目釉はぎ		
62	SD2礫集中	染付皿				染付			文様あり	蛇の目釉はぎ		17c末～18c中頃
63	SD1上層・2	染付皿	(10.8)	(7.2)	2.53	染付		コンニャク印葉文	コンニャク印花文			型押成形同型
64	SD2下層	染付皿	(10.9)			染付		コンニャク印葉文	コンニャク印花文			
65	SD2下層	染付皿	(12.8)	(7.4)	(3.6)	染付		唐草文	二方花文	見込み一重圏線・五弁花 高台一重圏線 外底一重圏線・「渦福」		
66	SD2礫集中	染付皿	(13.4)	(7.7)	3.65	染付		唐草文	蛸唐草梅花文	見込み一重圏線・五弁花 高台二重圏線 外底一重圏線・「渦福」		18c後半～19c初め
67	SD1 C-9・D-10・11Ⅱ層	染付皿	13.3	(6.8)	4.0	染付				見込み一重圏線・五弁花　高台二重圏線 外底一重圏線・「渦福」		18c後半～19c初め
68	SD3上層 C-9Ⅱ層	染付皿		(6.0)		染付		文様あり 腰部一重圏線		高台二重圏線		
69	SD2礫集中	染付皿	18.6	8.5	4.7	染付			花扇草花文	見込み二重圏線・蛇の目釉はぎ・コンニャク五弁花		
70	SD2礫集中・上・下層C-9・10・D-9Ⅱ層	染付皿	19.6	10.7	4.8	染付		折松葉文	花扇草花文	見込み二重圏線・蛇の目釉はぎ・コンニャク五弁花		
71	SD2礫集中・下層	陶器鉢		10.95		鉄釉	釉調：黒褐色 胎土：にぶい黄橙色			見込み胎土目		
72	SD2礫集中・下層	陶器鉢	(19.9)	7.7	8.5	白化粧土	釉調：灰白色 胎土：にぶい橙色		刷毛目	蛇の目釉はぎ		
73	SD2上・下層	仏飯器	(7.9)	4.15	5.35	白磁	釉調：灰白色					
74	C-9Ⅱ層	仏飯器				白磁	釉調：灰白色					
75	SD3上層	染付仏飯器	(5.5)	(4.0)	(5.85)	染付		斜格子文 二重圏線				18c後半～19c初め
76	SD1・2	陶器香炉	8.4	5.5	4.38	透明釉	内外面：灰オリーブ色 胎土：にぶい黄橙色	鉄絵文様あり			肥前	京焼風
77	D-10Ⅱ層	香炉	(5.5)			白磁	釉調：灰白色					
78	SD3上層	香炉		(6.3)		白磁	釉調：灰白色					

表４　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
79	SD2礫集中	陶胎染付香炉		(4.6)		陶胎染付		文様あり				
80	SD2上・下層 C-9Ⅱ層	陶胎染付香炉	(10.7)	8.1	(5.6)	陶胎染付		口縁部二重圏線 腰部一重圏線				
81	D-9・10 Ⅱ層	染付香炉	(10.4)	(6.7)	(7.3)	染付		呉須が流れたような文様 腰部二重圏線		高台一重圏線		
82	SD2下層	陶器蓋	(6.35)			灰釉	外面：暗オリーブ色 内面：にぶい赤褐色				薩摩系	
83	SD2下層 D-9Ⅱ層	陶器蓋	(7.3)		2.6	灰釉					薩摩系	
84	SD2底面	陶器土瓶	(7.3)		9.18	灰釉	釉調：灰黄色 胎土：褐灰色	体部下半露胎		三足	薩摩系	
85	SD2下層	陶器土瓶		胴径 (12.2)		灰釉	釉調：灰黄色				薩摩系	
86	SD2礫集中・下層 D-10Ⅱ層	陶器土瓶			(6.4)	―	胎土：灰褐～灰黄色			三足	薩摩系	
87	D-9Ⅱ層	陶器蓋	(2.7)			透明釉	釉調：灰白色					
88	SD2礫集中	陶器蓋	4.55		3.6	鉄釉	釉調：黒褐色 胎土：にぶい黄橙色		糸切り痕			
89	SD2	陶器蓋	(9.1)		4.3	鉄釉	釉調：黒褐色 胎土：にぶい橙色					
90	SD1	陶器片口鉢	(18.6)			灰釉	釉調：灰白～灰色 胎土：灰白色					
91	SD1上層 SD2礫集中・下層	焼締陶器摺鉢	(27.4)	(13.8)	9.4	―	外面：にぶい赤褐色 内面：明赤褐色	回転ナデ	9条1単位	見込み摺目文様あり	関西	堺か
92	SD1・2 礫集中	焼締陶器摺鉢	(29.9)	(12.4)	11.95	―	内外面：橙色	回転ケズリ	7条1単位	見込み摺目文様あり	関西	堺か
93	SD3 B-8･9･D-11Ⅱ層	焼締陶器摺鉢	(32.8)			―	内外面：暗赤褐色	回転ナデ	9条1単位			
94	SD2下層・3上層	焼締陶器摺鉢	(35.3)	(18.6)	13.8	―		回転ケズリ	9条1単位	見込み摺目文様あり	関西	堺か
95	SD2礫集中・3上層	焼締陶器摺鉢		(15.9)		―		回転ナデ	8条1単位	見込み摺目文様・焼き台痕あり	関西	堺か
96	SD1	土師器焙烙	(25.6)			―	内外面：にぶい橙色					
97	SD2上・下層	土師器焙烙	(25.8)			―	内外面：にぶい橙色	体部穿孔				
98	SD2礫集中・下層	土師器焙烙	(32.7)			―	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	口唇から体部・体部穿孔				
99	SD2礫集中	瓦質土器焜炉	(23.7)			―	内外面：灰色	印花スタンプ文	体部角状突起			
100	SD1上層 D-10Ⅱ層	陶器甕	(23.8)			鉄釉	釉調：極暗褐色～黒褐色 胎土：灰色	鉄釉流し掛け				
101	SD2上・下層	陶器甕	(22.6)			鉄釉	釉調：にぶい赤褐色 胎土：灰色	円形浮文・沈線5条・波状文1条	格子目あて具痕			
102	SD2礫集中	陶器甕	(26.8)			鉄釉	釉調：黒褐色 胎土：灰褐色					
103	SD1･2上下層･3上 C-9･10･D-10･11 Ⅱ層	陶器甕	(31.8)			鉄釉						
104	D-10Ⅱ層	瓶		(6.6)		白磁	釉調：灰白色 胎土：にぶい橙色					

表５　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
105	SD3	染付瓶	(2.95)	4.2	(12.3)	染付		文字				
106	SD1上層・2	染付瓶		(8.45)		染付		草花文				
107	SD2下層・3上層	瓶		胴径(12)		白磁	釉調：オリーブ灰色					
108	SD2礫集中	陶器瓶		(8.8)		灰釉	釉調：にぶい黄橙色～灰褐色 胎土：赤褐色	釘書き「□町」				
109	B-8・9 II層	弥生土器甕				―	内外面：浅黄橙色	口縁部突帯ハケ→ナデ	横方向ハケ			弥生時代中期
110	SD1下層	土師器坏		7.6		―	内外面：橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り		
111	D-9 II層	土師器坏		(7.0)		―	内外面：浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り		
112	SD1上層	土師器高台坏		(7.05)		–	外面：にぶい橙色 内面：橙色			円盤高台		10c代
113	B-8・9 II層	土師器高台坏		(6.5)		―	内外面：橙色			高台貼付		10c代
114	SD2	土師器高台碗		(6.1)		―	内外面：橙色			高台貼付		10c代
115	SD2下層	土師器甕	(25.0)			―	内外面：にぶい黄橙色	磨滅著しい	縦方向ケズリ			古代
116	SD2下層	土師器かまど	(35.8)			―	内外面：褐色			庇部貼付？		コテ状工具で調整
117	C-10 II層	須恵器坏蓋	(13.3)			―	内外面：灰色	回転ナデ	回転ナデ	頂部ヘラ切り後ケズリ調整		9c代
118	トレンチ	須恵器高台坏		(6.6)		―	内外面：灰色			高台貼付		9c代
119	SD1上層	須恵器坏		(9.75)		―	内外面：灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後未調整		8c中～後半
120	SD2	須恵器はそう				―	内外面：灰白色	横ナデ	横ナデ			7c代
121	SD1上層	須恵器瓶	頸部径(5.6)			―	内外面：灰色	回転ナデ	回転ナデ			頸部、三段構成にて接合
122	SD2上層	須恵器甕	(13.2)			―	内外面：灰色	回転ナデ	回転ナデ			
123	SD2上層	須恵器甕				―	外面：灰色 内面：黄灰色	平行タタキ	同心円当て具			
124	SD1	須恵器甕				―	内外面：浅黄色	格子目タタキ	車輪文当て具			下村窯か
125	SD2	須恵器甕				―	外面：灰色 内面：灰黄色	平行タタキ	平行当て具			
126	SD2下層	須恵器甕				―	内外面：にぶい褐色	格子目タタキ	平行当て具			
127	C-9 II層	灰釉陶器瓶		(9.1)		灰釉	釉調：灰白～にぶい黄色 胎土：灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付		
128	C-9 II層	土師器双耳付羽釜	鍔径(24.6)	胴径(21)		―	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	鍔にスス付着				15～16c代
129	SD2礫集中	瓦質土器羽釜	鍔径(24.2)	胴径(22.6)		―	外面:オリーブ黒色 内面:にぶい黄橙色	鍔にスス付着 横方向ケズリ調整	横ハケ			
130	SD2下層	瓦質土器足付羽釜	7.5	2.3		―	外面：黒灰色 断面：灰白色	コテ状工具で調整	貼付部位から剥離			脚部のみ

表６　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
131	SD1上層	須恵器甕				―	内外面：灰黄色	細かい平行タタキ	当て具痕ナデ消し			
132	SD1上層	陶器甕				自然釉	内面:オリーブ褐色～暗赤褐色 外面:暗オリーブ色	横ナデ	横ナデ		常滑	常滑6型式 13c後半
133	SD1 C-5Ⅱ層	須恵器鉢	(23.6)			―	内外面：灰色 口縁外面：青灰色	回転ナデ	回転ナデ		東播系	第Ⅱ期第2段階 12c末葉～13c初頭
134	SD1	須恵器鉢				―	内面：灰色 外面：灰白～灰色	回転ナデ	回転ナデ		東播系	第Ⅱ期第2段階 12c末葉～13c初頭
135	SD2	焼締陶器摺鉢	(24.8)			―	内外面：赤褐色 断面：明褐灰色	回転ナデ	回転ナデ→9条1単位		備前	中世3期ｂ 14c後葉～15c前葉
136	SD1・2下層	焼締陶器摺鉢	(29.8)			―	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ→8条1単位		備前	中世3期ｂ 14c後葉～15c前葉
137	SD2下層	焼締陶器摺鉢	(28.8)	(14.8)	9.6	―	内外面：褐灰色 断面：赤褐色	回転ナデ	回転ナデ→8条1単位		備前	中世5期a 15c後葉
138	SD1	焼締陶器摺鉢	(28.1)			―	外、断面：赤褐色 内面：褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世6期 16c初頭～16c第3四半期
139	SD2礫集中	焼締陶器摺鉢				―	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世6期 16c初頭～16c第3四半期
140	SD1上層	焼締陶器摺鉢				―	赤灰色	回転ナデ	回転ナデ→8条1単位		備前	中世6期 16c初頭～16c第3四半期
141	SD2下層	焼締陶器摺鉢	(20.8)			―	内外面：褐灰色 断面：赤褐色	回転ナデ	回転ナデ→8条1単位		備前	近世1期 16c第4四半期～17c第1四半期
142	SD2礫集中	焼締陶器摺鉢		(16.0)		―	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ→4・12条1単位（不定方向）	見込み摺目	備前	近世1期 16c第4四半期～17c第1四半期
143	SD1	焼締陶器壺	(9.0)			―	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
144	SD2	焼締陶器壺	(10.4)			―	内外面：赤褐色 断面：褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
145	C-8Ⅱ層	焼締陶器壺	(12.8)			―	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
146	SD1	焼締陶器壺	(13.8)			―	外面：赤褐色 内断面：黒褐色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
147	SD1 C-9・D-9・10Ⅱ層	焼締陶器壺	(12.6)			―	内外面：赤褐色 断面：褐灰色	回転ナデ	回転ナデ 肩に沈線2条		備前	中世4～5期 15c代
148	SD2礫集中	焼締陶器甕	(22.9)			―	内外面：赤灰色 断面：褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
149	SD2	焼締陶器甕	(29.9)			―	内外面：赤灰～暗赤灰色 断面：褐灰色	回転ナデ	回転ナデ		備前	中世4～5期 15c代
150	SD1	青磁碗		(6.6)		青磁	釉調：暗緑灰色 胎土：灰色	雷文帯 連弁文	文様あり	見込み文様あり	中国	上田C-Ⅱ-b 14c後半～15c前後
151	SD1・SD2礫集中	青磁碗		5.0		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰色			見込み印花文 外底面蛇の目釉はぎ	中国	沖縄碗Ⅴ-3　15c前半～半ば
152	SD2礫集中	青磁碗		5.5		青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰黄色	連弁文		見込み印花文 外底面蛇の目釉はぎ	中国	沖縄碗Ⅴ-3　15c前半～半ば
153	文化財課トレンチ	青磁碗		(6.0)		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰白～明橙色			高台内面途中まで釉がかかる	中国	上田Ｅ類 14c後半～15c前後
154	SD2	青磁碗		(6.0)		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰白～明橙色			高台外面途中まで釉がかかる	中国	上田Ｅ類 14c後半～15c前後
155	SD2	青磁碗		(4.4)		青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰色			見込み印花文 高台外面途中まで釉がかかる	中国	沖縄碗Ⅶ-0　16c半ば～後半
156	SD1・SD2	青磁碗				青磁	釉調：緑灰色 胎土：明橙～黄褐色		雷文帯 印花文		中国	沖縄碗Ⅴ-2　15c前半～半ば

表７　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
157	SD1	青磁碗				青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰色	櫛歯状工具による文様	縦方向櫛目		中国	太宰府同安窯系 碗Ⅰ-1b 12c中頃～後半
158	SD1 C-9Ⅱ層	青磁碗		(6.2)		青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰白色			見込み片彫蓮花文 高台内面途中まで釉がかかる	中国	太宰府龍泉窯系 碗Ⅰ-2a 12c中頃～後半
159	SD1	青磁皿	(13.6)	5.9	3.0	青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：黄橙色	口縁に刻目	口縁部文様帯	見込み釉はぎ目痕あり 高台外面途中まで釉がかかる	中国	沖縄皿Ⅵ-0 15c後半～16c前半
160	SD1	青磁皿	11.3	4.0	2.6	青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰色	口縁に刻目	口縁部文様帯	高台内面途中まで釉がかかる	中国	沖縄皿Ⅵ-0 15c後半～16c前半
161	SD2	青磁皿		(6.6)		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰白色			見込み釉はぎ 高台内部釉を削る	中国	沖縄皿Ⅵ-0 15c後半～16c前半
162	C-9Ⅱ層	青磁皿		4.6		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰白色			見込み印花文 高台外面の途中まで釉がかかる	中国	沖縄皿Ⅵ-0 15c後半～16c前半
163	SD1	青磁坏		5.3		青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰白色			見込み印花文 外底面蛇の目釉はぎ	中国	沖縄皿Ⅴ-0 15c前半～半ば
164	SD1下層	白磁碗		(3.5)		白磁	釉調：白色（失透釉） 胎土：灰白色			抉入高台	中国	沖縄D群 邵武四都窯系
165	SD1・2 サブトレンチ	白磁碗		(5.5)		白磁	釉調：明オリーブ灰色 胎土：白色				中国	沖縄Ｂ’群？
166	SD1・2 サブトレンチ	白磁碗		(4.6)		白磁	釉調：緑灰色 胎土：黄橙色			見込み印花 天目形高台	中国	沖縄C群南平茶洋窯 14c半ば～15c初め
167	SD2	白磁坏		(3.0)		白磁	釉調：白色（失透釉） 胎土：灰白色				中国	沖縄D群 邵武四都窯系
168	SD3	白磁皿		(6.3)		白磁	釉調：オリーブ灰色（失透釉） 胎土：灰白色			見込み蛇の目釉はぎ 高台畳付から内部を削る	中国	沖縄D’群 15c前半～半ば
169	SD2	白磁皿		(6.2)		白磁	釉調：オリーブ灰色（失透釉） 胎土：灰白色			見込み蛇の目釉はぎ 高台畳付から内部を削る	中国	沖縄D’群 15c前半～半ば
170	SD1・ SD3	白磁皿	(10.1)	(4.0)	2.8	白磁	釉調：うすいオリーブ灰色 胎土：灰白色			碁笥底	中国	沖縄E群
171	SD2礫集中	白磁皿	(13.0)	(6.2)	2.4	白磁	釉調：灰白色 胎土：灰白色			高台畳付から内部を削る	中国	沖縄D群 邵武四都窯系
172	SD2下層	白磁皿	(12.0)	(6.5)	3.0	白磁	釉調：灰白色（失透釉） 胎土：灰白色			畳付のみ釉はぎ	中国	沖縄E群　景德鎮窯 15c後半～16c初め
173	SD1	白磁皿	(11.6)	(6.3)	2.7	白磁	釉調：灰白色（失透釉） 胎土：灰白色			畳付のみ釉はぎ	中国	沖縄E群　景德鎮窯 15c後半～16c初め
174	SD2下層	白磁碗	(18.2)			白磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰色				中国	沖縄C群
175	SD1・SD2・SD3 D-9・10Ⅱ層 Eサブトレンチ	青花碗	12.5	4.9	6.2	染付		口縁部二重圏線梅花文	口縁部二重圏線	見込み二重圏線・梅月文 高台二重圏線	中国	小野碗D群　景德鎮窯 15c後半～16c前半
176	C-9Ⅱ層	青花碗		(6.3)		染付		アラベスク文		見込み二重圏線・十字花文 高台二重圏線	中国	小野碗D群　景德鎮窯 15c後半～16c前半
177	SD3	青花碗	(12.4)			染付					中国	小野碗D群　景德鎮窯 15c後半～16c前半
178	SD1 C-9Ⅱ層	青花碗		(5.4)		染付		小花文		見込み二重圏線・小花文 高台二重圏線	中国	小野碗C群　景德鎮窯 15c後半～16c前半
179	SD1	青花碗		5.0		染付				見込み一重圏線・「福」	中国	漳州窯系
180	文化財課トレンチ	青花碗		(5.5)		染付		芭蕉葉文帯		見込み一重圏線・人物字か	中国	漳州窯系
181	SD1・SD3 B-8・9Ⅱ層	青花皿	(10.4)	(2.6)	2.7	染付		波濤文帯 芭蕉葉文帯		見込み二重圏線・花鳥月文	中国	小野皿C群　景德鎮窯 15c後半～16c前半
182	C-9Ⅱ層	青花皿		4.0		染付		芭蕉葉文帯		見込み一重圏線・花文	中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半

表８　遺物観察表

№	出土遺構・地点	器種	法量(cm)（　）内は復元			施釉（石材）	色調	調整・装飾方法			製作地	備考
			口径【最大長】	底径【最大長】	器高【最大厚】			外面	内面	見込み・外底面		
183	SD2	青花皿	(10.0)			染付		口縁部文様帯	口縁部一重圏線		中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半
184	SD1	青花皿	(11.0)			染付		雨だれ文帯 略字か	雨だれ文帯		中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半
185	SD1	青花皿	(11.5)			染付		略字か	口縁部一重圏線	見込み一重圏線	中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半
186	SD3	青花皿	(9.5)	(3.0)	2.2	染付		波濤文帯	口縁部一重圏線	見込み一重圏線・釉はぎ	中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半
187	SD1 文化財課トレンチ	青花皿		4.0		染付		腰部に文様あり		見込み一重圏線・人物字	中国	小野皿C群 漳州窯系 16c半ば～後半
188	D-9 II 層	青花皿		(5.0)		染付		腰部に文様あり		見込み二重圏線・花文	中国	小野皿B1群 景徳鎮窯 15c後半～16c前半
189	D-10 II 層	青花皿		(4.8)		染付				見込み一重圏線・蛇の目釉はぎ 高台一重圏線	中国	漳州窯系
190	SD2礫集中	陶器碗		4.2		鉄釉	釉調：暗褐～黒褐色 胎土：灰色		鉄釉	高台露胎	中国	天目茶碗
191	SD1上層	褐釉陶器小壺		(3.4)		褐釉	釉調：褐灰色 胎土：青灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部糸切り痕	中国	
192	D-10 II 層	青磁瓦玉		(5.3)		青磁	釉調：オリーブ灰色 胎土：灰褐色			見込み印花文 高台外面途中まで釉がかかる	中国	沖縄碗VII-0　16c半ば～後半
193	D-9 II 層	青磁瓦玉		4.4		青磁	釉調：赤灰色 胎土：橙色			高台外面まで釉がかかる	中国	沖縄碗VII-0　16c半ば～後半
194	SD1	青磁瓦玉		3.1		青磁	釉調：緑灰色 胎土：灰白色			高台外面まで釉がかかる	中国	太宰府椀III類？ 底部器壁厚い
195	D-10 II 層	染付おはじき	2.1	1.9	0.6	染付						
196	C-9 II 層	染付おはじき	2.1	1.95	0.6	染付						
197	C-9 II 層	染付おはじき	1.45	1.55	0.45	染付						
198	SD2礫集中	平瓦		6.4	2.9		内外面：灰色	凹面：細かい縄目	凸面：粗い縄目をナデ消す			古代
199	SD2・3上層	丸瓦	10.5	8.7	1.8		内外面：灰白色	凹面：細かい布目	凸面：コテ状工具による縦方向平滑化	端部、コテ状工具による面取り		近世か
200	土錘	土錘	4.8	1.5			内外面：灰黄褐色					
201	SD1	石臼	4.8	6.0	2.1	砂岩	褐色	上面：摺目（磨滅）	下面：剥離か			赤化している（被熱？）
202	SD2	砥石	10.7	5.2	2.1	砂岩	にぶい黄橙色					
203	SD1上層	砥石	26.7	11.5	13.4	砂岩	にぶい黄橙色					
204	SD1上層	火打ち石	3.1	2.4	2.0	チャート	透光性のない白色					鉄錆付着
205	C-9 II 層	火打ち石	2.5	1.8	1.5	チャート	透光性のない黒色					ピンポン球大の円礫素材
206	C-9 II 層	火打ち石	2.1	1.7	0.9	チャート	やや透光性のある乳白色					
207	D-11 II 層	火打ち石	1.5	1.0	0.3	チャート	やや透光性のある淡緑色					

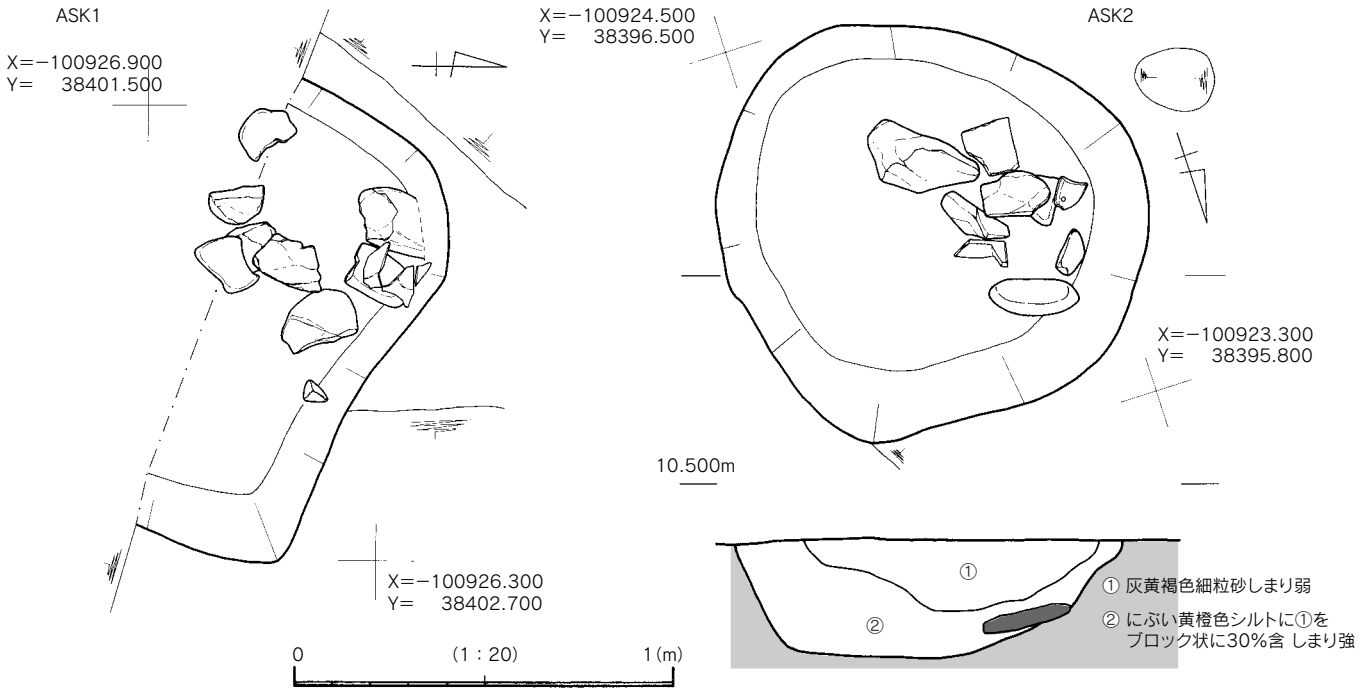


図19　ＳＫ１・ＳＫ２出土状況、土層堆積状況図（１：20）

土坑

ＡＳＫ１

調査区南端で確認した。中世の土坑ＡＳＫ４と重複関係にある。調査区外に続くが、平面形は方形を呈すると推測される。遺構底面付近からは人頭大の割れた川原石が出土した。遺物は染付碗、摺鉢が出土している。

ＡＳＫ２

調査区南西端で確認した。堆積土はブロック土を含み、人為的に埋め戻された状況と考えられる。底面付近から人頭大の割れた川原石が遺物とともに出土した。出土した遺物は、片口鉢（1）、軒平瓦（2）、平瓦、天目茶碗破片、くらわんか碗破片である。

ＡＳＫ１・２で出土した遺物はＡＳＤ２出土遺物と接合関係にあり、土坑内で検出された割れた川原石もＡＳＤ２の底面で検出された状況と同様であると捉えられる。溝と同時期に一括廃棄された状況である。

土坑の機能・性格については不明であるものの、ＳＫ２の平面形・断面形からは、樽などを埋設した可能性も考えられる。

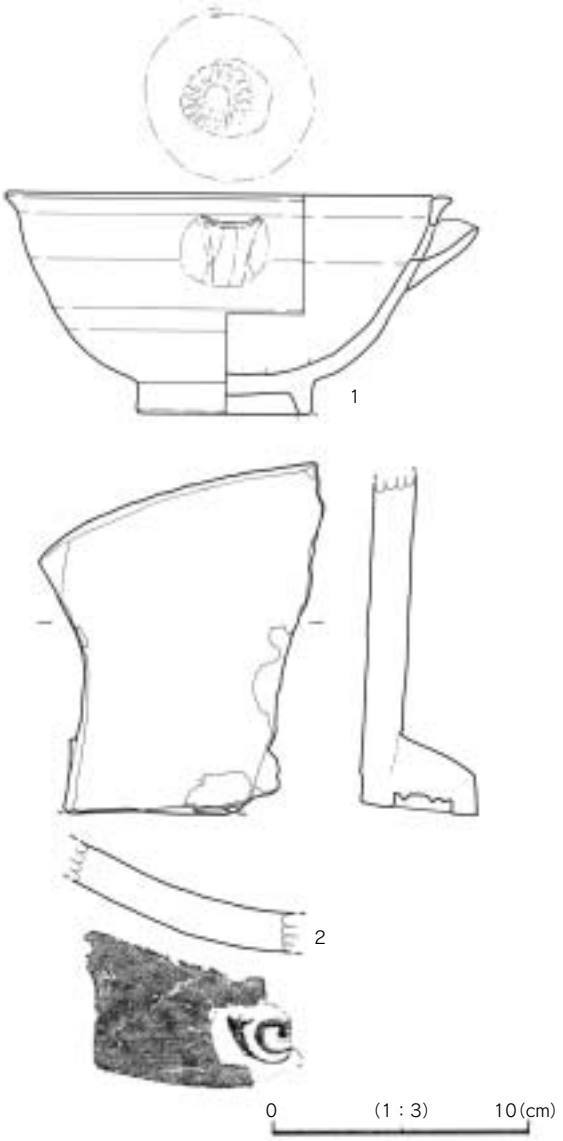


図20　ＳＫ２出土遺物（１：３）

図21　Ａ区中世遺構分布図（１：80）

中世

溝跡（ＡＳＤ４・５）（図21）

ＡＳＤ４・５とも堆積土はⅢ層由来土である。水性堆積の痕跡は認められなかった。ともに真北から東へ約35°の傾きを持つ。これはＢ区中世溝と同じ傾きであり、区画溝として機能していた可能性がある。

ＡＳＤ４は調査区南端において西側に曲がる。ＡＳＤ５は近世溝ＡＳＤ２と重複関係にあるが、切り合いの部分は明瞭に検出できなかった。

遺物はＡＳＤ４から土師器破片、須恵器破片、ＡＳＤ５から土師皿（１）破片、須恵器破片、古代以前と考えられる土師器破片が出土している。

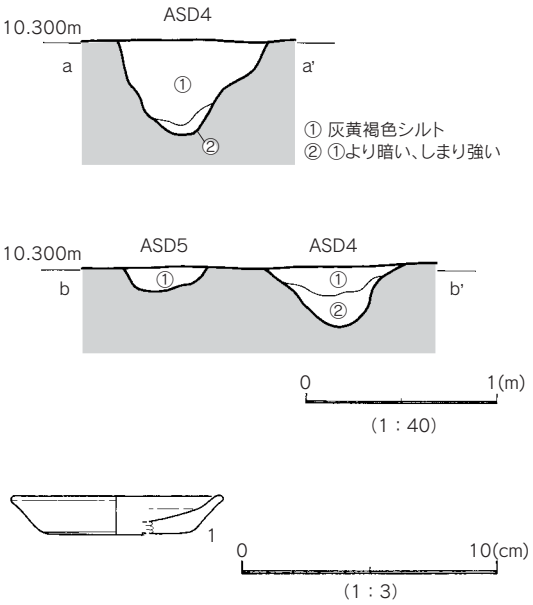
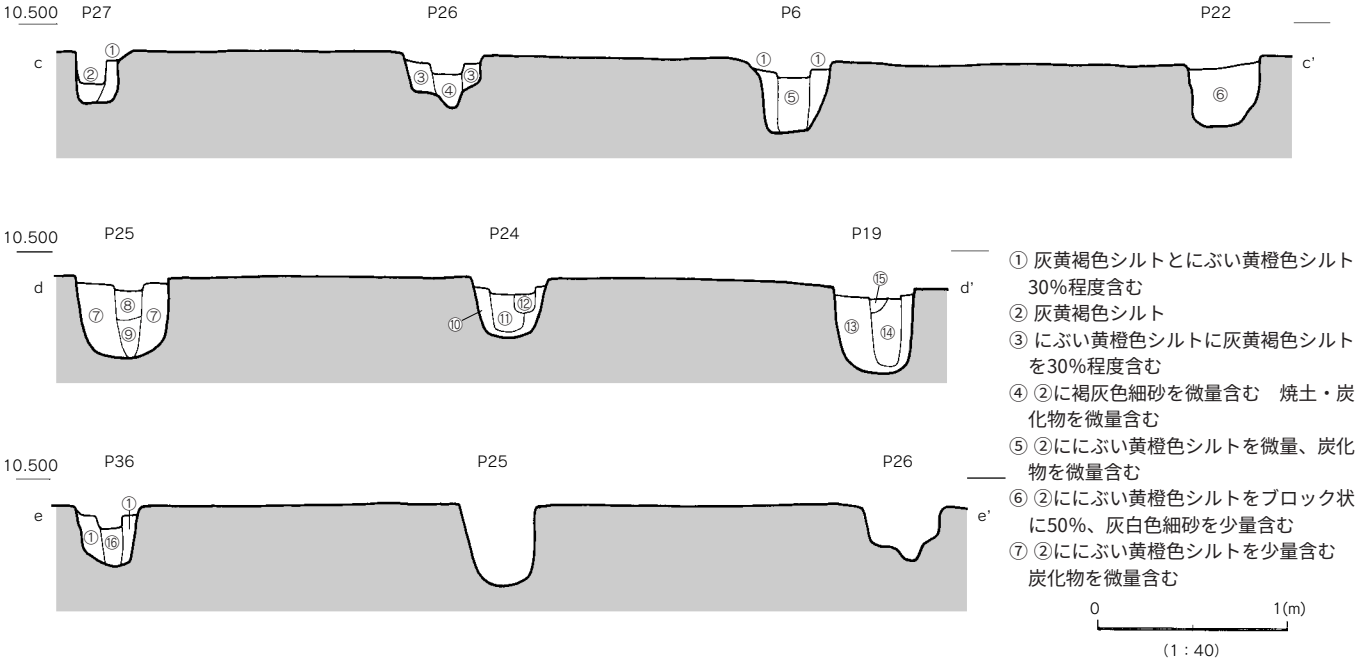


図22　Ａ区中世溝堆積状況図（１：40）
ＡＳＤ４出土遺物実測図（１：３）

柱穴群（掘立柱建物）（図21）

調査区南西に分布が集中する。直径約50～30㎝のものと約30～10㎝前後のものがあり、全ての柱穴を先ず約５㎝ 掘り下げて柱痕の有無を確認した。前者には直径約15㎝ 程度の柱痕跡が確認できた。柱痕跡の堆積土は焼土・炭を含み、細粒砂が主体となる。しまりが弱い。柱痕跡の下部は灰色のかたくしまる細粒砂となる。

発掘調査段階では、何列かの柱穴列は確認できたが建物跡復元までには至らなかった。図上で柱間距離・方向を検討した結果、３列の柱穴列を抽出して図示した。



⑧ にぶい黄橙色シルトに焼土30%含む　炭化物を微量含む
⑨ 褐灰色細砂に炭化物10%程度含む　しまり弱
⑩ にぶい黄橙色シルトに②を微量含む
⑪ ②に炭化物を微量含む
⑫ ②に焼土微量含む　下部灰白色細砂に変質
⑬ ②ににぶい黄橙色シルト50%含む
⑭ にぶい黄橙色シルトに②を20%含む
⑮ ②に焼土20含む
⑯ 褐灰色細砂に②をブロック状に30%程度含む しまり弱

図23　柱穴列堆積状況図（１：40）

土坑（ＡＳＫ３・４・５）（図８・21）

ＡＳＫ３・４（図21）は調査区南端で検出した。南壁際のサブトレンチに破壊されるが、南壁の土層堆積では確認していない。このことから、ほぼ方形の平面形に復元できる。ＡＳＫ３は近世土坑ＳＫ１と重複関係にある。**ＡＳＫ５**（図８）は近世溝ＡＳＤ３北側で検出した。平面は長方形となる。３基とも、堆積土はⅢ層由来土で単層、底面は平坦となる。

遺物は、ほとんどが土師器の破片で、図化できる大きさではない。

１はＡＳＫ４出土の土錘である。

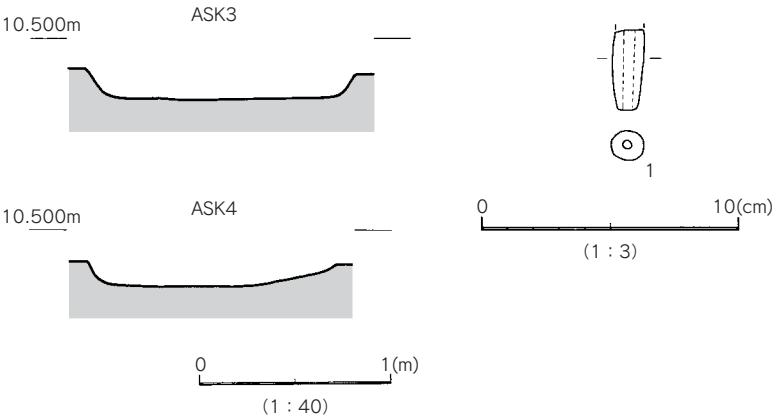


図24　ＡＳＫ３・４立面図（１：40）

時期不明

柱穴（Ｐ30・31・37）（図21）

堆積土はⅣ層由来であり、Ⅳ層より若干砂質で灰色系の色調を呈する。Ⅲ層由来土の柱穴より長軸約70㎝と大きく、柱痕跡も約30㎝である。

Ｐ31には木柱が残る。ただ、検出面からの深さ1.15ｍを測り、建物の柱穴として考えられるか疑問が残る。自然科学分析の結果、スギ材であることが判明した。遺物は10世紀代の高台付碗底部が出土している。

落ち込み（図６の網掛け部分）

検出時、近世溝ＳＤ２南側で地山（Ⅳ層）の土質が変質した部分があり、トレンチを入れて堆積状況を確認した。その結果、ブロック土を含む土坑とみられる堆積と落ち込み状の堆積を確認したが、平面形は不明瞭であった。遺物は、９世紀代の須恵器高台坏底部（２）、10世紀代の高台付碗底部（１）、その他格子目タタキの須恵器甕破片、土師器破片が出土している。

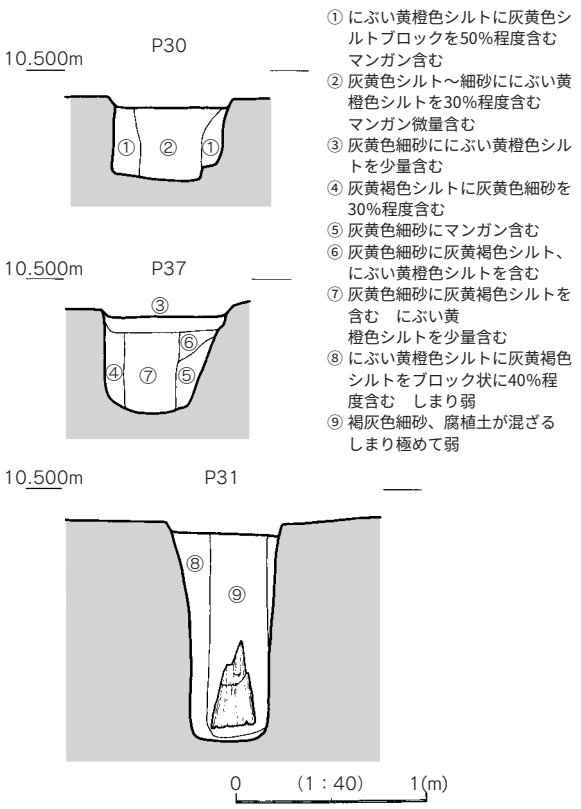


図25　柱穴（Ｐ30・31・37）堆積状況図（１：40）

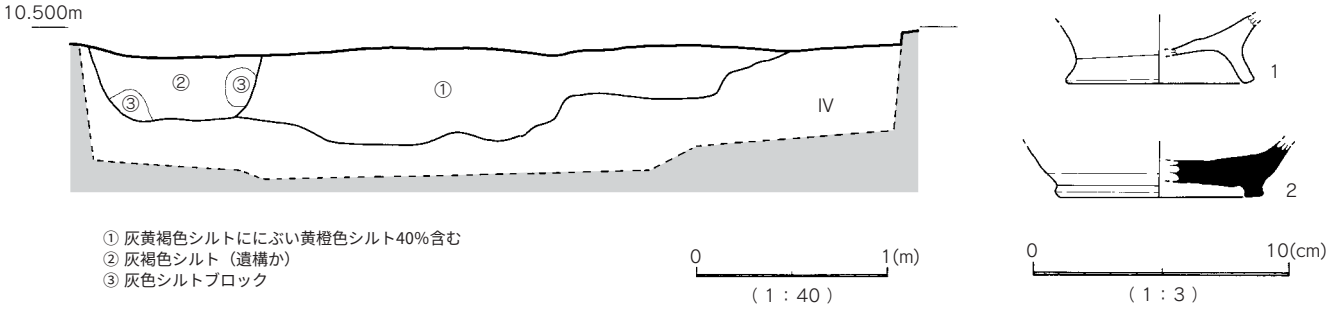


図26　落ち込み堆積状況図（１：40）出土遺物実測図（１：3）

写真７　落ち込み確認トレンチ

写真８　落ち込み堆積状況

第６節　B区の遺構と遺物

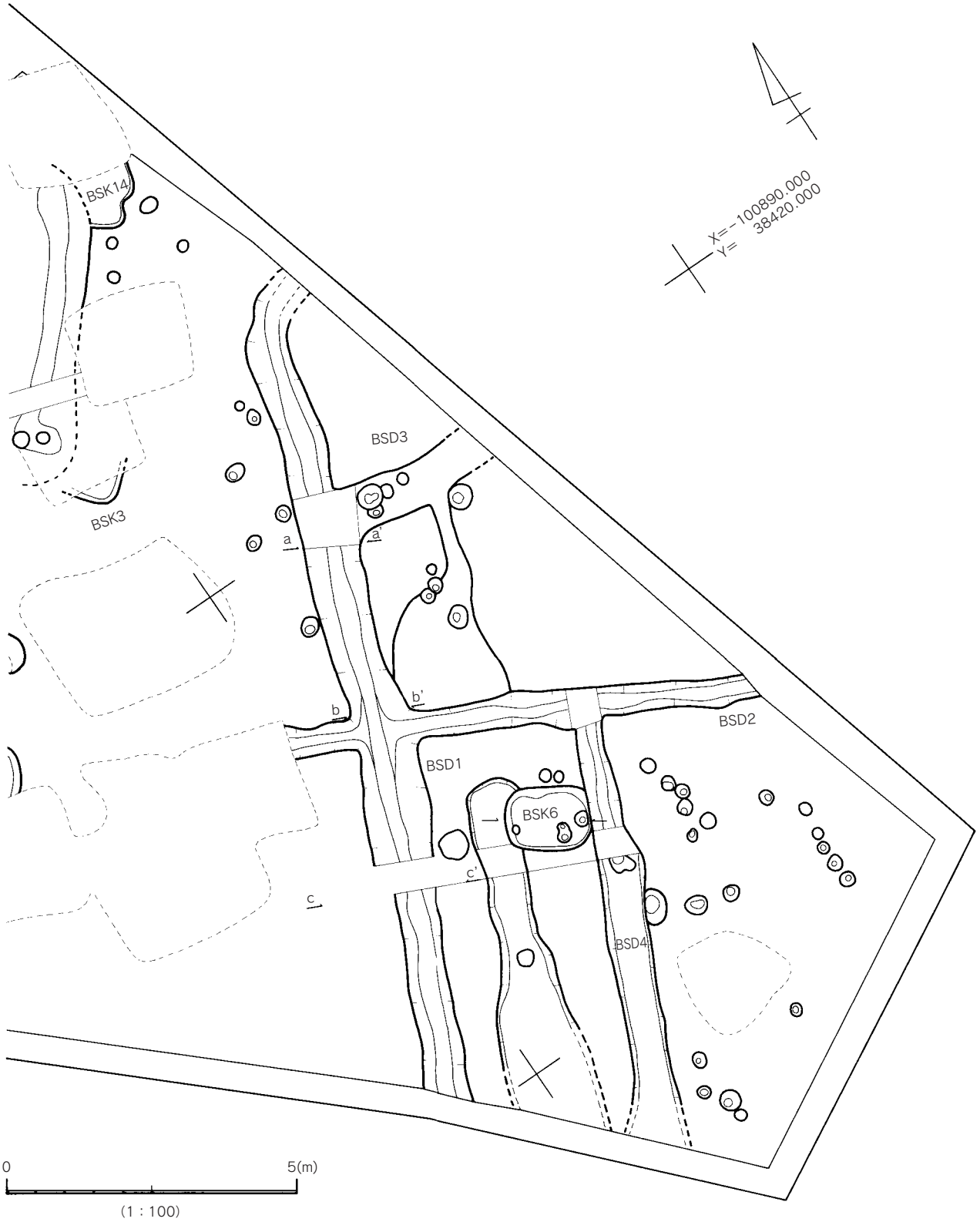


図27　B区遺構分布図①（1：100）

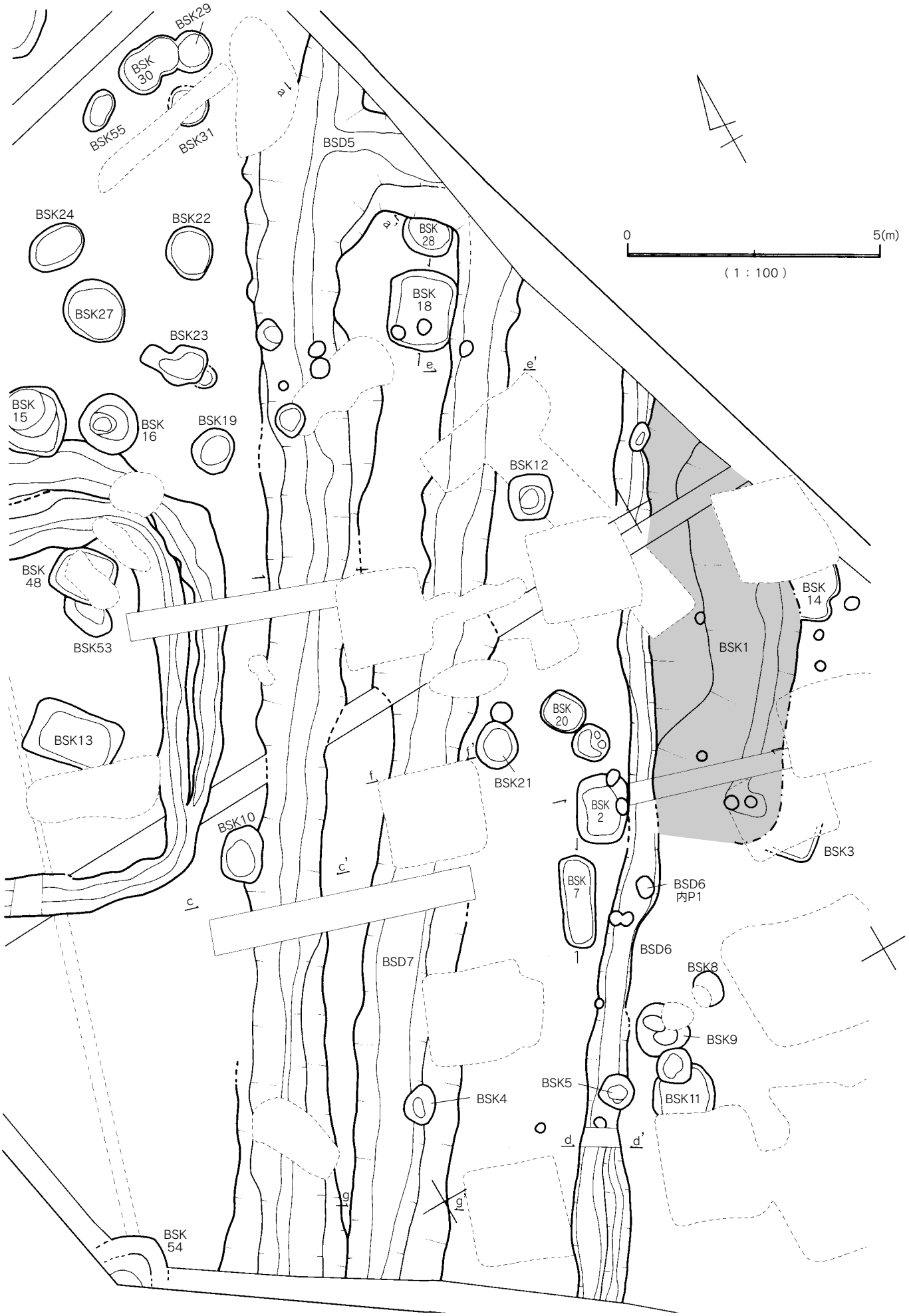


図28　B区遺構分布図②（1：100）

図29　B区遺構分布図③（1：100）

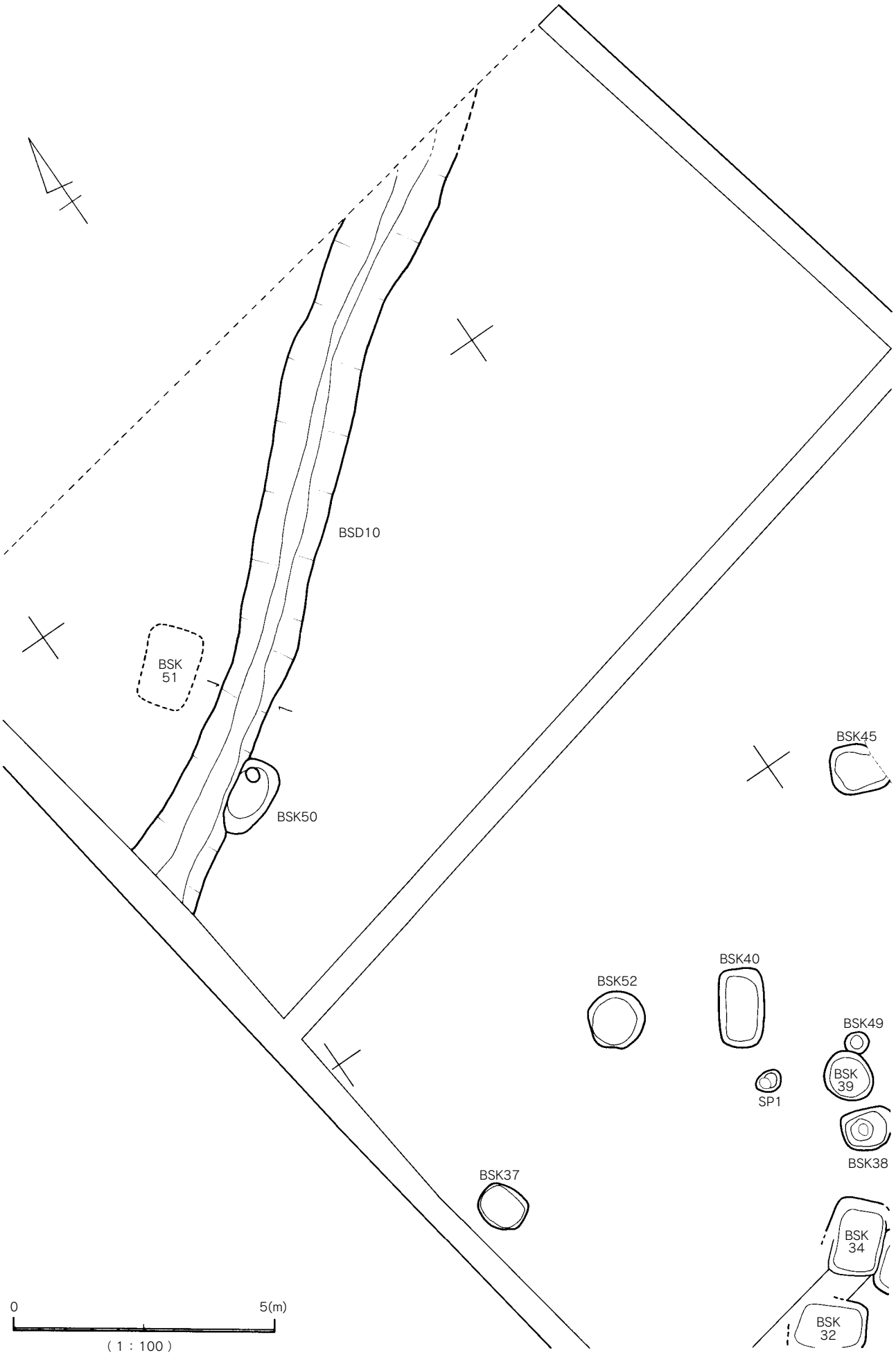


図30　B区遺構分布図④（1：100）

近世

近世の遺構・遺物分布はＡ区の分布状況に比べて極めてうすく、調査区南東隅部分で検出した。

溝跡（ＢＳＤ１・２・３・４）（図30・31）

Ｂ区南側で検出した。堆積土はすべて類似する土質であった。Ｂ区において近世の遺構はこの４条の溝のみである。

ＢＳＤ１と**４**は平行し、真北から20°東へ傾く。ＢＳＤ１とＢＳＤ２・３、ＢＳＤ２とＢＳＤ４は、ほぼ直交する。この重複の新旧関係を確認することはできなかった。

第Ⅳ章に掲載した明治時代初期の地籍図（図46）を見れば、ＢＳＤ１と２が畑地の地割にのる位置にあることが分かる。このことから、土地を区画する溝であったことは、ほぼ間違いない。ＢＳＤ３・４についても、区画内の小区画に係わる溝であった可能性がある。埋没年代は出土遺物から、19世紀以降が考えられるが、図46の地籍図が描かれた当時もこの溝が存続していたかどうかは判断できない。また区画の土地利用について言えば、遺構・遺物の量から、近世を通じて居住域であったとは考えにくく、やはり田畑として利用されていた状況を想定している。

出土した遺物はＢＳＤ１が464ｇ、ＢＳＤ２が71ｇ、ＢＳＤ４が1848ｇである。その中で図化できたものは染付碗（1・3）、軒丸瓦（2）、土錘（4・5）である。

染付碗１は外面に文様が描かれる。染付碗３は外面６条の圏線の下に草花文が、内面は口縁部二重圏線、見込み一重圏線が描かれる。器形、文様から18世紀後半以降の年代が与えられよう。

軒丸瓦は瓦当部分に八葉花弁文が施される。焼成は堅緻で光沢がある。18世紀後半～19世紀初め以降に生産されたものである。

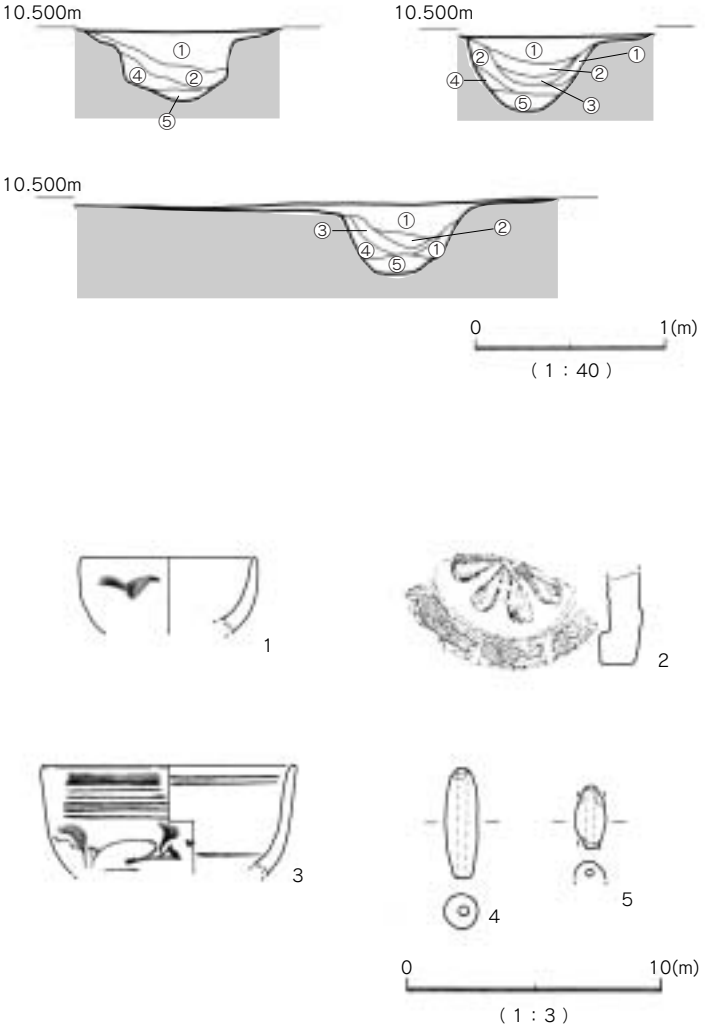


図31　ＢＳＤ１堆積状況図（１：40）・遺物実測図（１：３）

中世

溝跡（ＢＳＤ５・６・７・10）（図28・32）

ＢＳＤ５・６・７は、調査区北東方向から北西方向に位置する。３条ともほぼ平行であり、真北から35°東に傾く。

ＢＳＤ５は調査区東壁付近で南東方向に直角に曲がる。ＢＳＤ７との連結もしくは切り合い関係は確認出来なかった。断面形はＶ字～Ｕ字である。堆積状況はおもに、Ⅲ層に由来する黒褐色から灰黄褐色シルトの自然堆積である。堆積土の中には、微砂・細砂を含むものもあるが層を形成するには至っていない。平面・断面形から区画溝として機能していたと考えている。また、溝底面で検出した小穴については溝に架けた橋の橋脚である可能性も考えたが、規則的な配列にはなっていない。出土遺物は古代から14世紀前半ごろの所産である。

ＢＳＤ６は、ほぼ北側半分がＢＳＫ１と重複関係にあった。検出時には判然としなかったが、図37の堆積状況図では、ＢＳＫ１の堆積を切っている。

ＢＳＤ７はＢＳＤ５と並列する。ＢＳＤ５の上層堆積土（①層）と同様の堆積土であり、それ以上の分層は出来なかった。ＢＳＤ５との位置関係や底面が平坦になることから、ＢＳＤ５に沿う道跡である可能性もあるが、硬化面は確認していない。出土遺物はＢＳＫ５と同様の時期のものである。

ＢＳＤ10は調査区北端で検出した。真北から50°東に傾く。堆積土はⅣ層のにぶい黄褐色シルトを主体とし、他の中世遺構の堆積土と異なる。東播系須恵器鉢破片出土により、中世遺構として報告する。

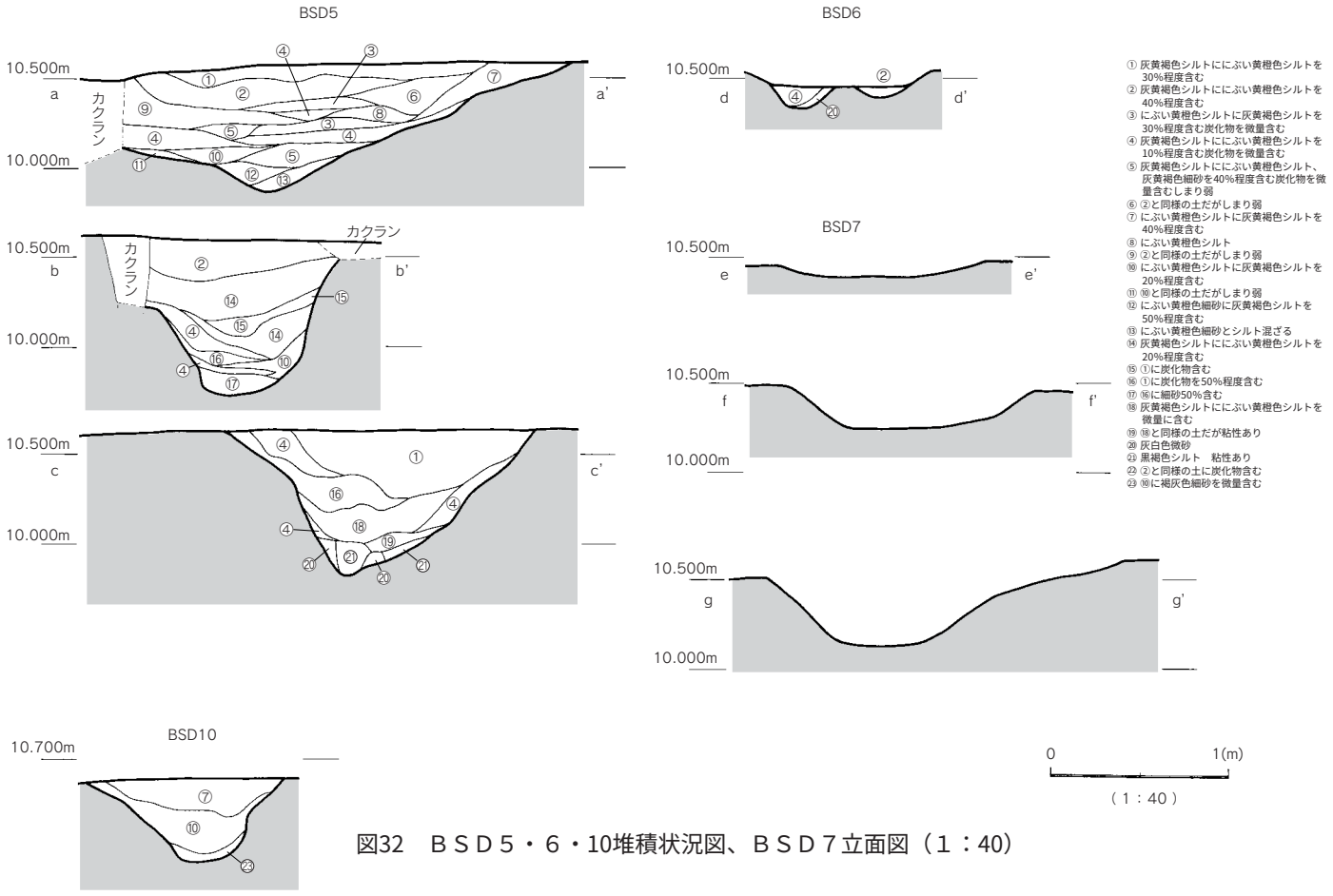


図32　ＢＳＤ５・６・10堆積状況図、ＢＳＤ７立面図（１：40）

遺物（図33）

遺物はＢＳＤ５が総量3316ｇ、ＢＳＤ６が総量1099ｇ、ＢＳＤ７が総量3974ｇ、ＢＳＤ10が総量282ｇ出土している。出土状況に際だった状況はなく、層位による偏りもなかった。いずれも小破片での出土であるが、時期比定できるものを抽出して図示した。

区画溝としての性格が考えられる、ＢＳＤ５・７からは古代から14世紀前半ごろの遺物が出土しているが、相対的に12世紀中頃～13世紀代の遺物が多く、このころ埋没し始めたと考えている。

ＢＳＤ５（図33－１～13）　１は糸切りの土師器坏である。２・３・４は東播系須恵器の鉢破片で口縁部形態から13世紀前葉から中葉の所産であろう。４はＢＳＫ27と遺構間接合したものである。５は越州窯系青磁碗で太宰府分類のII類に相当するものである。６は同安窯系青磁碗（太宰府Ｉ－１ｂ）、７･10は龍泉窯系青磁で、７は盤、10は碗である。８は白磁皿で太宰府分類IX類の口縁部口禿げ皿で、13世紀後半～14世紀前半に出土量が増加すると報告されているものである。９は白磁碗で太宰府分類Ｖ類であろう。高台内外面とも無釉である。底部破片を打ち欠き調整した、いわゆる「瓦玉」と呼ばれるものである。11・12は土錘で、11は細型、12は体部中位が膨らむ形のものである。13は透光性のない乳白色に黒の入るチャート製火打石である。石質はあまり良くない。稜線の潰れは部分的である。図示した遺物の他に、土師器、器種不明鉄製品、古代須恵器甕、常滑焼甕が破片で出土している。全体に占める割合は土師器破片が2386ｇと卓越している。

ＢＳＤ６（図33－14～17）　14～16は細型の土錘。17はＢＳＤ６内小穴から出土した土師器の坏で、底部から体部立ち上がり部分にヘラケズリ調整を施し、丁寧なつくりである。内面体部、底部に焼成前の記号刻書がある。調整や記号刻書には古代の土師器の特徴がみられ、器形は体部が大きく開く中世的な様相を示す。柱穴建立・廃絶の祭祀に伴う可能性もある。この他、土師器破片、東播系須恵器鉢破片が出土している。出土遺物の大半を土師器破片が占める。

ＢＳＤ７（図33－19～29）　19～21は土師器小皿、22～24は土師器坏である。22は完形に復元された。25は越州窯系青磁碗（太宰府II類）、26、27は同安窯系青磁碗（太宰府Ｉ－１ａ、Ｉ－１ｂ）、28は龍泉窯系内面劃花文青磁碗（太宰府Ｉ－４ｂ）である。29は鍔付きの石鍋で、12世紀後半～13世紀前半の年代が与えられよう。この他、土師器、古代須恵器甕、東播系須恵器鉢、常滑焼甕、器種不明鉄製品が破片で出土している。全体に占める割合は土師器破片が2940ｇと卓越している。

ＢＳＤ10（図33－18）　18は細型の土錘である。このほかに東播系須恵器の鉢破片や古代・古代以前と見られる土師器小片が出土している。

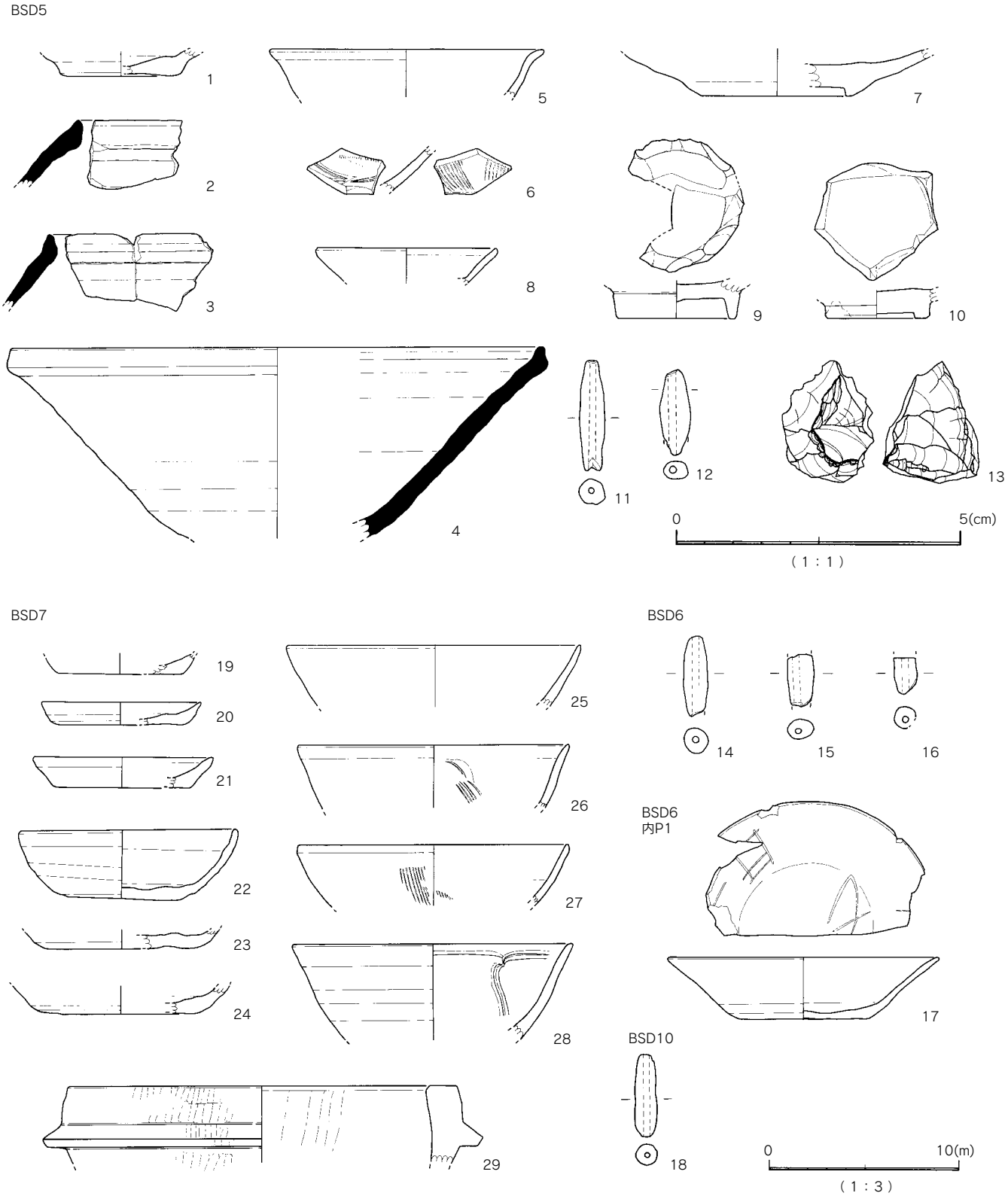


図33　ＢＳＤ５・６・７・10遺物実測図（１：３、13は１：１）

周溝（ＢＳＤ８・９）

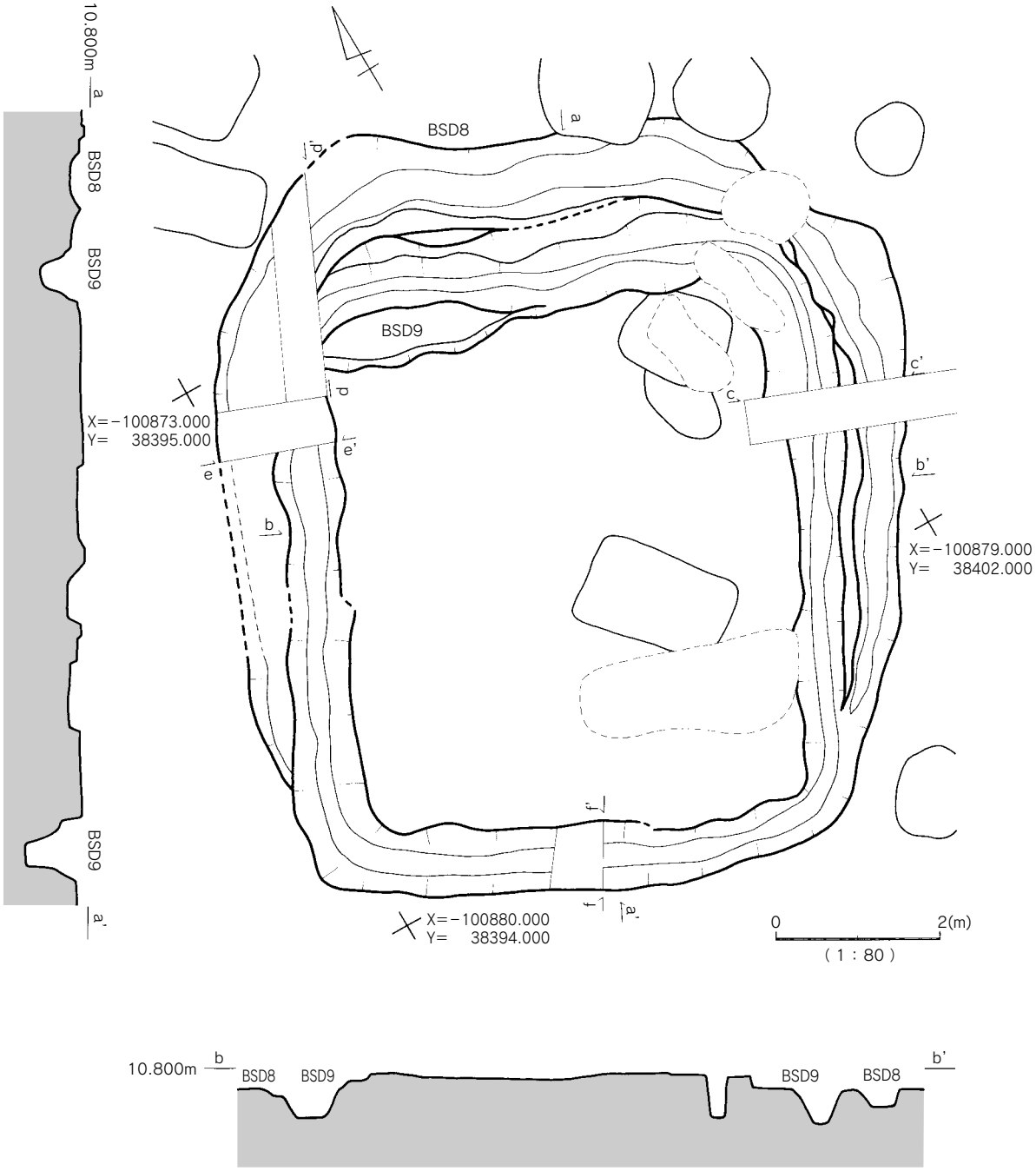


図34　ＢＳＤ８・９平面図・立面図（１：80）

写真９　ＢＳＤ８常滑甕出土状況

写真10　ＢＳＤ８堆積状況（東から）

ＢＳＤ８・９（図34・35）

ＢＳＤ５と長軸方向を同じくする方形周溝である。ＢＳＤ８と９の二重に重なり掘り巡らされる溝で、ＢＳＤ８の方が新しいが、南辺部分では重複関係は明らかでない。ＢＳＤ９埋没後に南辺を残した三辺が再掘削されたとも考えられる。

ＢＳＤ９の平面形は整然とした方形を呈し、断面形は逆台形状に掘り込まれる。ＢＳＤ８は９より一回り大きく掘削され、断面形はＢＳＤ９より浅く不定形である。

堆積状況はＢＳＤ９埋没後、ＢＳＤ８が掘削された状況である。ただ、Ａセクションの堆積状況図を見ると、ＢＳＤ８の最下層③はＢセクションではＢＳＤ９の上層に堆積し、ＢＳＤ８①層に切られている。この③層はＢＳＤ８の①・②層と一連の堆積とは考えられず、ＢＳＤ９埋没後ＢＳＤ８掘削以前に掘削された溝の存在を示唆するものであろう。

遺物は溝底面からの出土はなく、ほとんどが浮いた状態で出土し、③層中からの出土が多かった。周溝南辺上層土からは常滑焼の甕破片がまとまって出土した。（写真９･10図36－13）また、土師器皿（図36－５）は完形で出土し、（図36－９）も破片ではあるがまとまって出土している。③層は腐食有機質を多量に含むシルトであるが、腐食有機質を含む堆積は③層・⑤層のみである。多量の植物が堆積した状況を想定する。

ＢＳＤ８・９はその形態から周溝の内部に土を盛り上げた塚であったと推測するが、盛土の形跡は見られず、溝堆積土にも特徴的なブロック土の堆積は見られなかった。遺物の出土状況は高所からの転落である根拠が弱く、③層についても塚に生成した草や落葉などが流れ込んだ堆積である可能性はあるが、断定できる状況にはない。

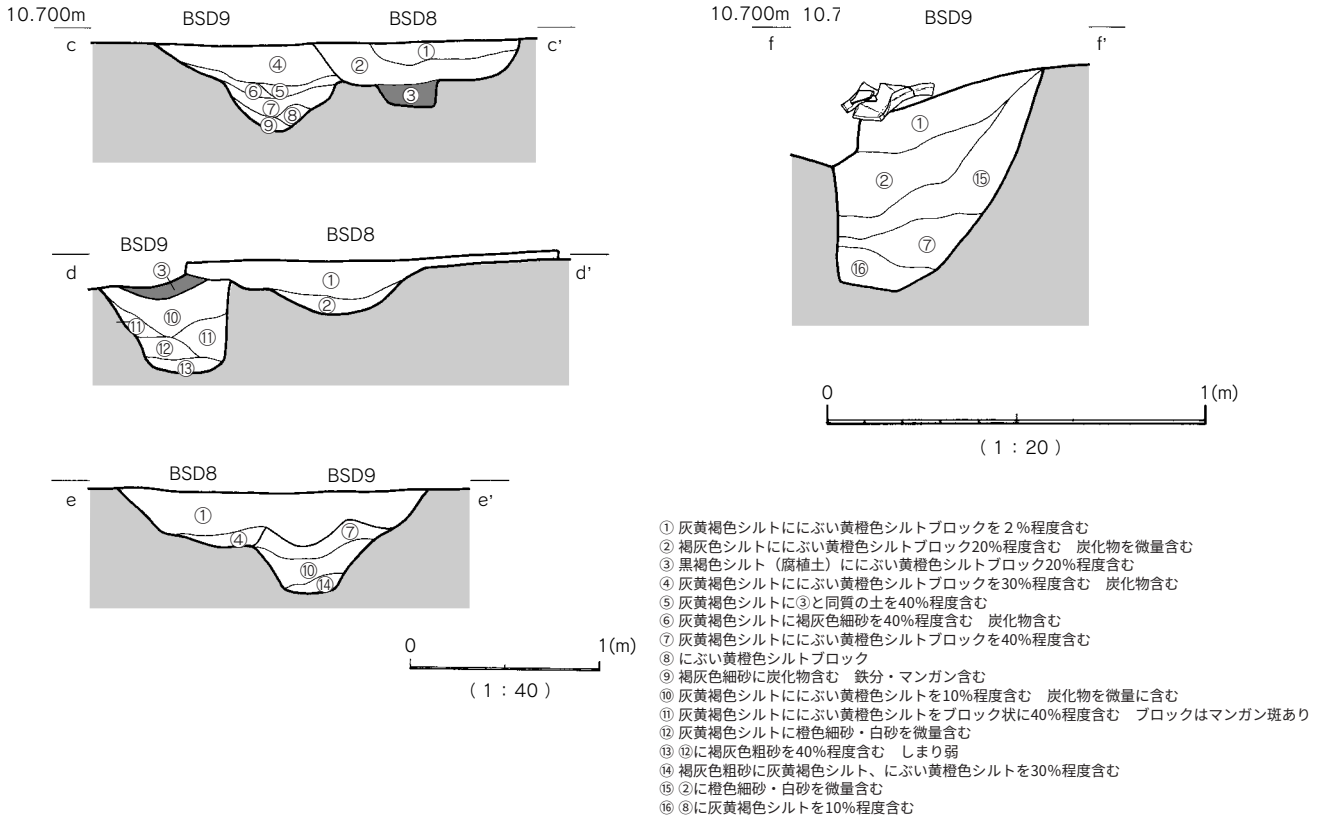


図35　ＢＳＤ８・９堆積状況図（１：20、１：40）

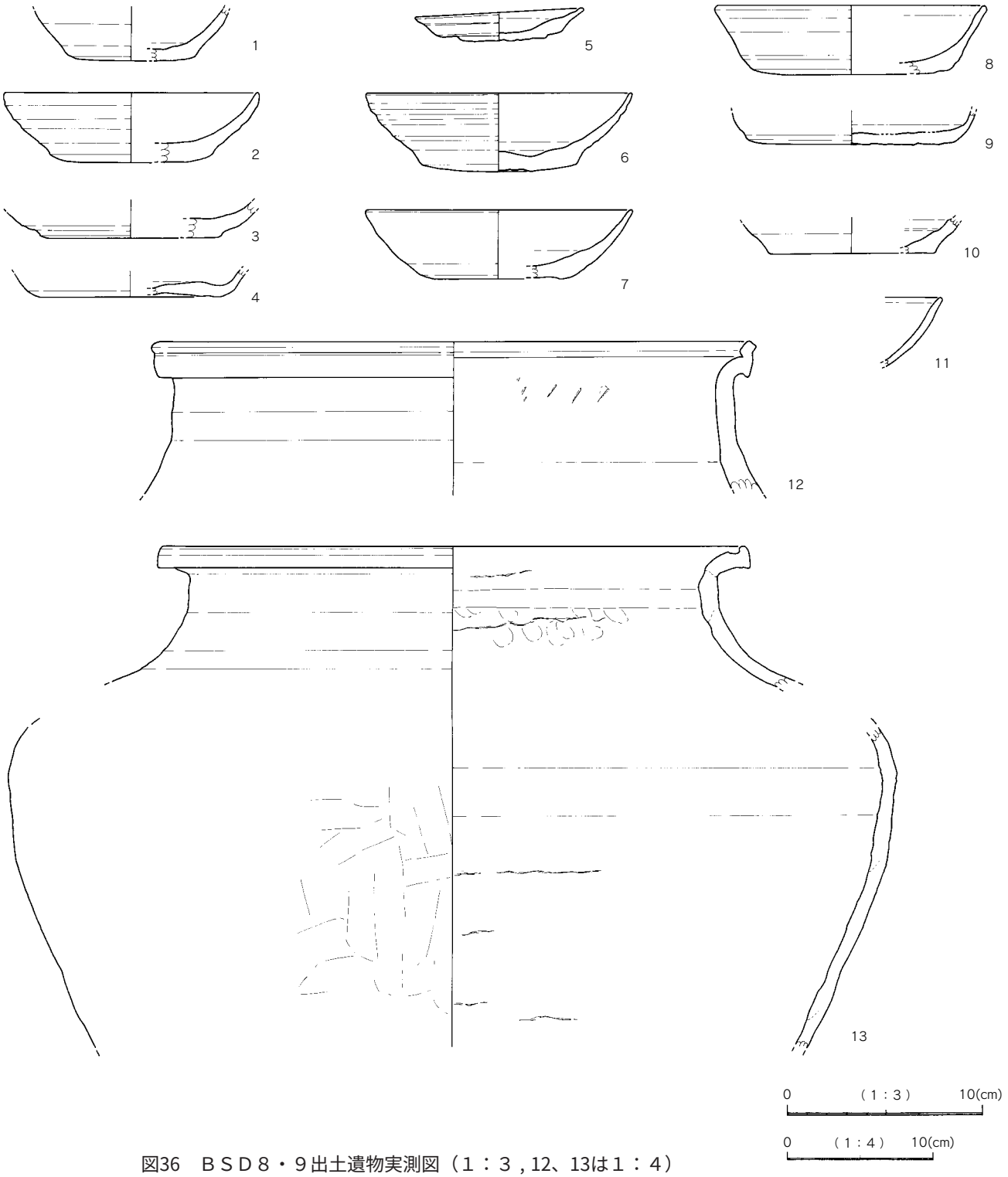


図36　ＢＳＤ８・９出土遺物実測図（１：３，12、13は１：４）

方形周溝の中心部に主体部となるような土坑は存在せず、ＢＳＫ13・48・53といった土坑は方形周溝に伴うものである可能性は低い。

１～10は土師器皿、坏である。11は瓦器碗、12、13は常滑焼甕である。土師器皿（５）はＢＳＤ９東辺③層中から完形で出土したものである。見込み部分を強くなで、底部外面はヘラ切り後未調整である。２、６は同形態で、見込み部分を強くなで、底部外面ヘラ切り後ヘラケズリ調整を施す。９は底部のみの残存であるが、周溝西辺からまとまって出土したもので、底部外面ヘラ切り後丁寧なヘラケズリ調整を施す。10は底部糸切り、体部内面に強いロクロナデで段を作るものである。11の瓦器碗は磨滅が著しく、調整は良好に残っていない。12は口縁部形態から13世紀後半～14世紀前半ごろの所産であると考えられる。13は13世紀代に収まる年代が与えられよう。

土坑（ＢＳＫ１～ＢＳＫ54）（図37・38・39）

遺構検出は、Ⅲ層中及びⅣ層上面で行ったが、Ⅲ～Ⅳ層の漸移的な幅が大きく、ほとんどはこの中での検出となった。そのため、Ⅲ層を埋土に持つ遺構はラインが不明瞭であった。調査中、土坑として発掘したものの中には、柱穴である可能性のあるものも含まれているが、土坑一覧表には掲載している。

土坑の堆積土の基本はⅢ層に由来する堆積で、灰黄褐色シルトを中心としⅣ層（にぶい黄橙色シルト）を含むものである。

Ｂ区で確認した土坑の平面形は大きく３つに分けられる。隅丸長方形・円形・楕円形・不整形（落ち込み）である。

隅丸長方形プランを持つ土坑は、土坑墓である可能性を意識して調査を行った。しかし、いずれも検出面からの深度が10～20㎝と浅く、埋土の堆積状況・遺物出土状況ともに土坑墓であると断定できる状況ではない。この隅丸長方形の土坑はＢ区全体に分布しているが、長軸線が北西方向に傾くもの（ＢＳＫ６・13・17・26・32・35・48）と、北東方向に傾くもの（ＢＳＫ２・７・18・34・40・41・42・50・51）の２つに分けられる。方向による細かな形態の差はない。

円形・楕円形の土坑もＢ区全体に分布している。浅い掘り込みで単層堆積のものも多い。この中で、比較的大型のもの（ＢＳＫ10・15・16など）については、隅丸長方形の土坑と同様に土坑墓である可能性を考えていた。しかしこれも断定できる状況にはない。

ＢＳＫ１・２（図37）

検出時には不明瞭な広がりであり、堆積確認のためにサブトレンチを入れてプランを確定した。図はサブトレンチの断面図である。

ＢＳＫ１は南西から北東にのびる落ち込み状の遺構で、断面形は南側が緩やかに傾斜し、北側は比較的急に立ち上がる。南西部分ではプランを確認できなかった。ＢＳＤ６・ＢＳＫ14と重複関係にある。埋土の堆積状況はⅢ層由来土と細砂を含む砂質シルトの互層堆積であり、滞水状態にあったと考えられる。

遺物（図40－１～５）は、華南地方で生産された白磁（１～３）、龍泉窯系青磁碗（４）、龍泉窯を模倣した青磁（５）を図示した。時期は13世紀末～16世紀前半に位置している。出土遺物の時期幅は古代～16世紀前半までであり、16世紀前半がＢＳＫ１の最終埋没年代と捉えられる。

ＢＳＫ２はＢＳＤ６と接して検出されたが、新旧関係は明らかではない。堆積土はⅢ層由来の堆積で、Ⅳ層由来の堆積を含む割合で分層している。全ての層に炭を微量に含む。

遺物（図40－６～10）は、土師器（６～８）、瓦質土器（10）、龍泉窯系青磁碗（９）を図示した。出土した年代が分かる遺物の時期幅は古代～13世紀代までである。底面からの遺物の出土はなかった。

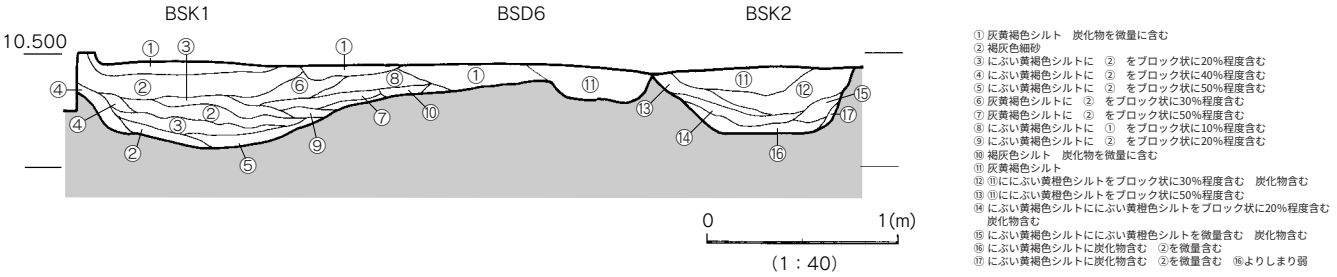


図37　ＢＳＫ１・２、ＢＳＤ６堆積状況図（１：40）

ＢＳＫ６

近世溝ＢＳＤ４に切られる。検出面から底面まで10㎝と浅く、堆積土は最下層の堆積であると考えられる。Ⅲ層由来の堆積である。

ＢＳＫ７

堆積状況は木棺墓の埋没状況と理解している。堆積土はⅢ層を由来とし、炭・焼土を微量に含む。①層にはⅣ層土が多く混ざる。底面からの遺物の出土はなく、土師器坏（図40－12）が破片の状態で出土している。他に器種不明の鉄片がある。

ＢＳＫ13

堆積はⅢ層由来土であり、これにⅣ層が混じる割合によって分層される。①層は③層に焼土が混じるとして分層した。底面からの遺物の出土はなく、土師器皿破片（図40－17～20）が出土した。

ＢＳＫ17

堆積状況はＢＳＫ13に似る。①～③層はⅣ層を含む割合によって分層した。底面からの遺物の出土はなく、土師器小破片が出土している。

ＢＳＫ18

堆積土はⅢ層由来である。Ⅳ層を含む割合によって分層した。中世のピットと重複関係にある。底面からの遺物の出土はなく、土師器皿、坏（図40－24・25）が破片で出土している。

ＢＳＫ26・32・34・35

ＢＳＫ26・32・34・35は検出時に不明瞭であったため、この範囲を少しずつ掘り下げて検出を行った。この段階での出土遺物は、図40－47～49である。堆積土は他の土坑同様の堆積となっている。ただＢＳＫ32は①層に砂質シルトを含む。この①層は検出のために掘り下げていたⅢ層が残ったものである。

ＢＳＫ34とＢＳＫ35は重複するが、新旧関係は判断できなかった。底面は切りあっていない。

いずれも底面からの遺物の出土はない。土師器坏や皿、青磁（図40－36～41）が破片で出土している。ＢＳＫ35からは鉄釘（図40－38）が出土し

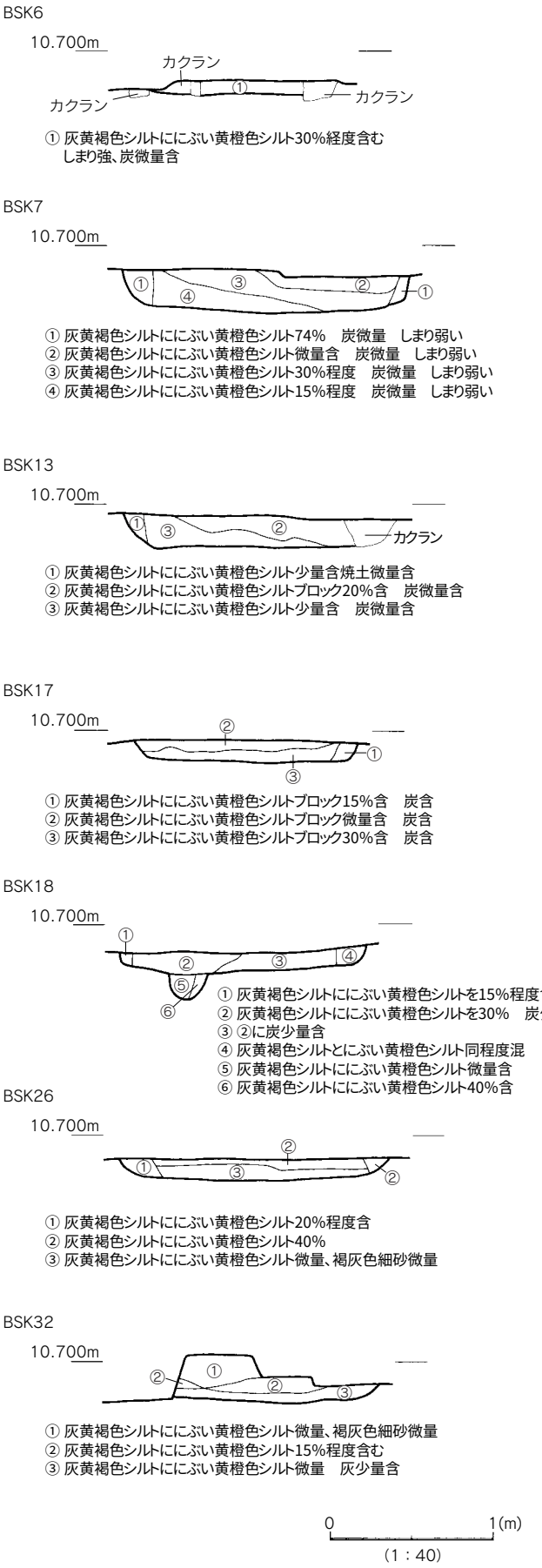


図38　土坑堆積状況図（１：40）

ている。

ＢＳＫ40・41・42

堆積土はⅢ層を由来としているが、ＢＳＫ40はⅣ層を含む割合が他と比較して高い。遺物は土師器皿破片（図40－42・43）が出土している。

ＢＳＫ48

大部分を近代の攪乱に削平されている。遺物は土師器皿破片（図40－45）が図示できた。

ＢＳＫ50

ＢＳＤ10と重複し、堆積土の状態からＢＳＤ10より新しいと判断した。

土坑出土の遺物（図40）

土坑出土の遺物は、土師器・須恵器・瓦器・東播系須恵器・貿易陶磁（白磁・青磁）・滑石製石鍋・鉄製品である。時期は大半が中世で、古代の土器も出土している。図40はこの中で図示可能なものを抽出した。時期比定の可能な遺物を中心として概観すると、12世紀中葉から後葉の龍泉窯系青磁碗（９・太宰府Ｉ－２）、皿（35・同Ｉ類）、同安窯系青磁碗（37、同Ｉ－１ｂ）、13世紀前半の東播系須恵器鉢（48）、形態から13世紀と考えられる瓦器碗（32･34）、13世紀末～14世紀前半の白磁碗（１、沖縄分類Ｃ群）、14世紀後半～15世紀前半の龍泉窯系青磁碗（４・上田分類Ｃ－Ⅱ、５・同Ｄ－Ⅱ）、15世紀前半、中葉の白磁碗（２･沖縄分類Ｄ群、３･同Ｄ’群）、15世紀後半～16世紀後半の?州窯産染付皿（46･小野分類皿Ｃ群）といった時期幅である。

土師器は小皿が多く、年代を比定するのに困難であるが、６・14・28・42・43は口径と器高から14世紀以降の所産と思われる。また、内面に段を有する特徴的な土師器（８・41）が出土している。これは、強いナデによって段をつくりだすもので、底部は糸による切り離しである。技術的な系譜は不明である。

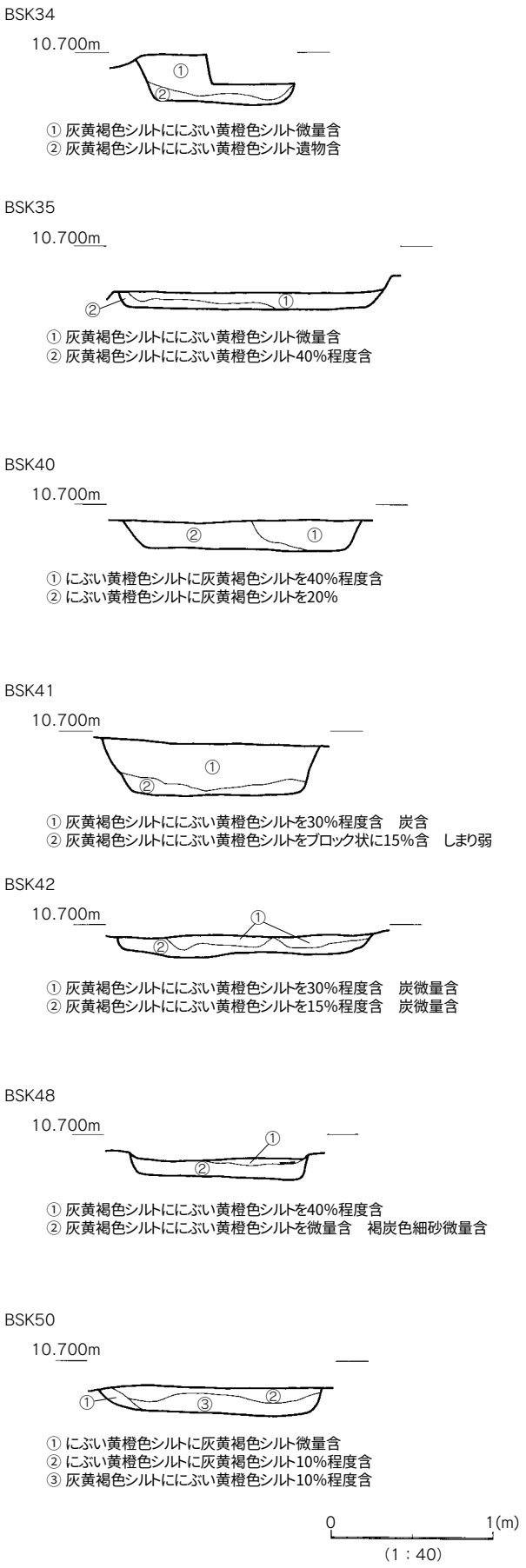


図39　土坑堆積状況図（１：40）

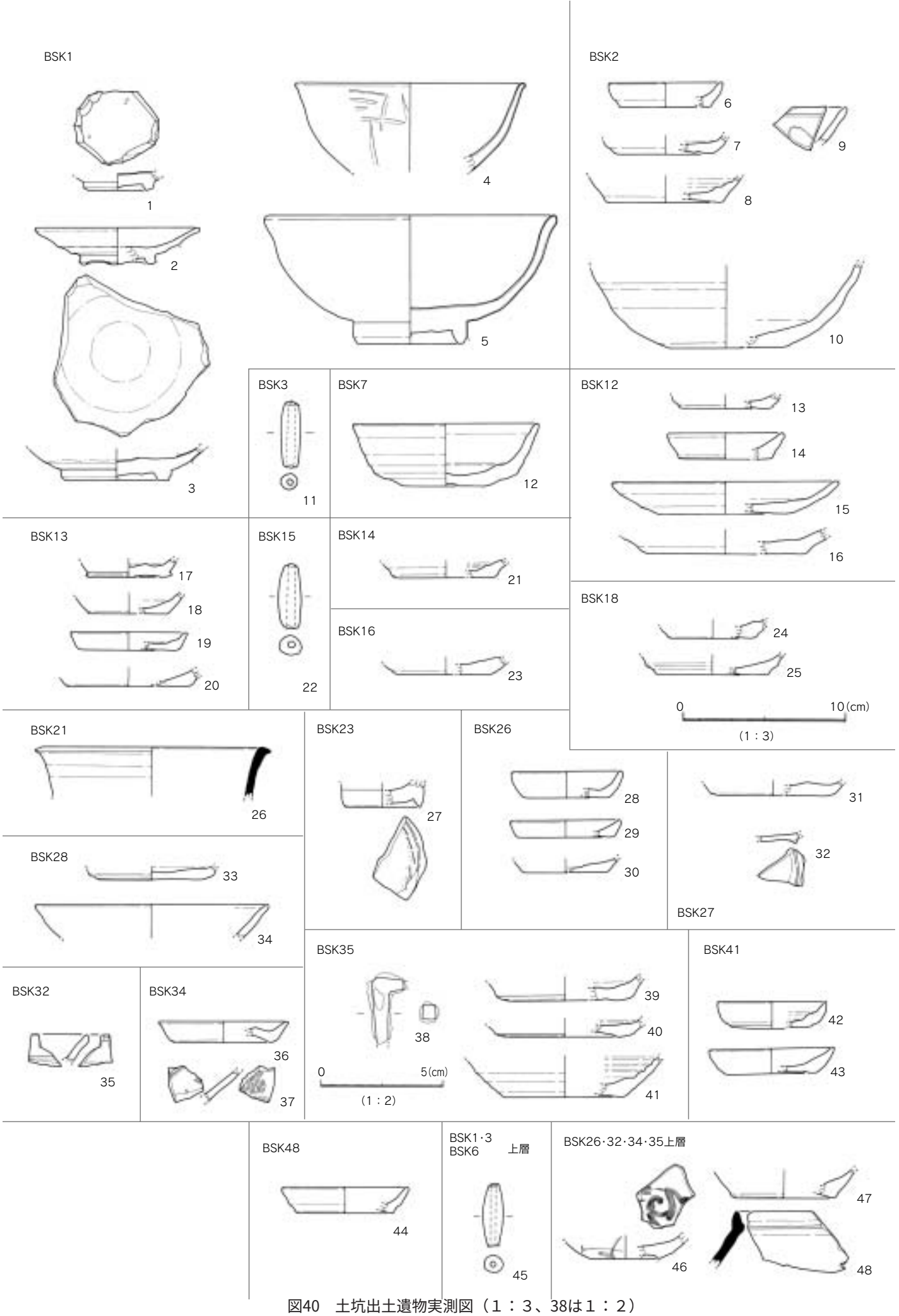


図40　土坑出土遺物実測図（1：3、38は1：2）

石組土坑（ＢＳＫ51）

ＢＳＫ51は調査区北端部分で検出した石組みの土坑である。検出時には円礫が数個かたまっている状態で、確認のためのサブトレンチをいれて検出した。石組みの掘り形は明確ではなかった。

堆積状況は中層に石組み上部の円礫が崩落した状況で、最下層は空隙の多い堆積で、上部の積み石は土圧によって土坑内部にずれ込んでいる状態であった。この状況から土坑内に木棺・木廓・木室などが設置された墓であると考えている。

構造は比較的大型で扁平な円礫を底面に敷き、扁平な円礫を積んでいくものであるが、上部にいくほど小型の円礫が目立ち、これを小口積みする部分もある。底面では炭化物・焼土の広がりを直径50㎝ の円状に検出した。底面からの遺物の出土はなく、最下層中に少し浮いた状態で土師器皿（図42－４）が出土した。

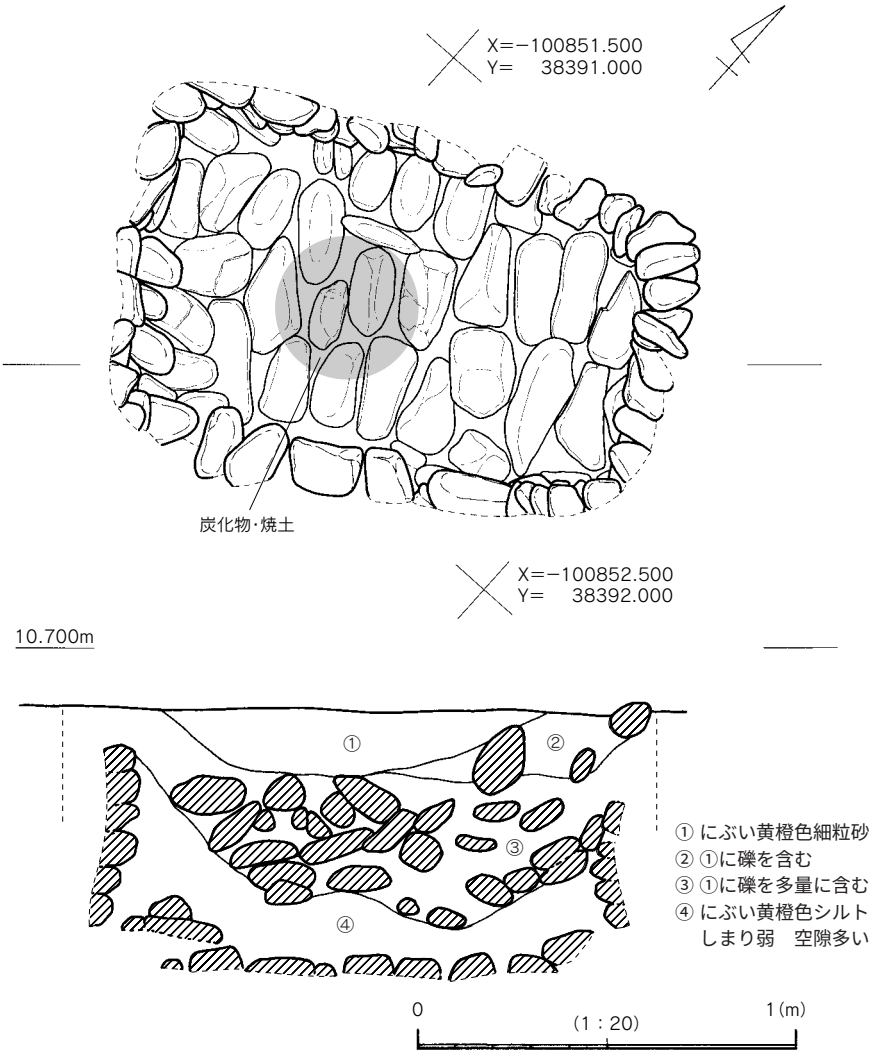


図41　石組み土坑平面・堆積状況図（１：20）

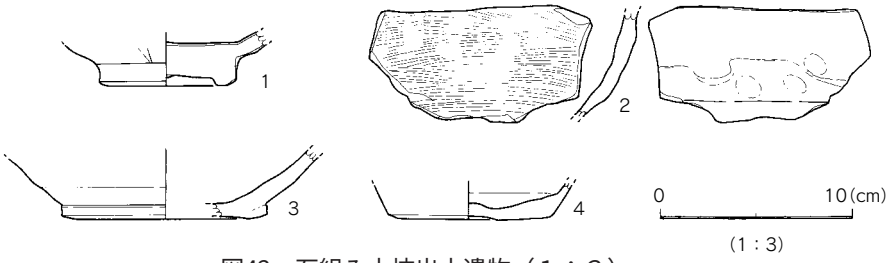


図42　石組み土坑出土遺物（１：３）

遺物（図42－１～４）

４以外は検出面付近で確認したものである。４は土師器皿で、出土した時は完形品が割れた状態であったが口縁端部を欠いてしまった。２は瓦質の煮炊具の破片で、内面に細かいヨコハケ、外面は指おさえの痕が残る。３は越州窯系青磁碗の底部で太宰府分類のⅡ類に相当するものである。１は龍泉窯系青磁碗の底部で片切り蓮弁文が施される。高台の形態から13世紀後半に位置するものであろう。

表９　土坑一覧表

遺構				遺物	
遺構番号	規模(m)	平面形・方位	備考	概要	質量(g)
SK1	6.4×3.6	不整形	自然地形の落ち込みか	図40－1～5	859
SK2	1.36×0.96	隅丸長方形・北東	BSD6と重複	図40－6～10、鉄製品	296
SK3			大部分がカクランと重複	図40－11	11
SK4	0.8×0.56	楕円形	BSD6と重複	土師皿破片	2.5
SK5	0.64	円形	BSD6と重複		
SK6	1.44×1.04	隅丸長方形・北西	BSD4と重複		
SK7	1.76×0.64	長方形・北東	木棺痕跡	図40－12	141
SK8	0.64	円形		土師器破片	28.5
SK9	1.04	円形	小穴と重複	土師器破片	66
SK10	1.12×0.8	隅丸長方形・北東	BSD5と重複		
SK11			カクランと重複		
SK12	0.88×0.8	ほぼ正方形	柱穴か	図40－13～16	132
SK13	1.76×1.12	隅丸長方形・北西	BSD8・9内	図40－17～20	142
SK14		不整形	カクランと重複	土師器破片	46
SK15	1.36×0.96	ほぼ正方形	BSD8・9と重複	図40－22	9
SK16	1.12	円形	BSD8・9と重複	図40－23	41
SK17	1.36×0.96	隅丸長方形・北西		土師器破片	35
SK18	1.6×1.28	隅丸長方形・北東	BSD7と重複	図40－24・25	94
SK19	0.8	円形		土師器破片	33
SK20	0.8	円形		土師器破片	21
SK21	0.88	円形		図40－26	6
SK22	1.04×0.88	楕円形			
SK23	1.2×0.8	不整形	2基の土坑重複か	図40－27、瓦器破片	19
SK24	1.2×0.8	楕円形			
SK25	0.8×0.54	楕円形			
SK26	1.68×0.96	隅丸長方形・北西		図40－28～30	75
SK27	1.28×1.12	楕円形		図40－31・32	37
SK28	1.0×	楕円形？	BSD5屈曲部分と重複	土師器・瓦器破片	56
SK29	0.8	円形	SK30と重複		
SK30	1.28×0.88	不整形	2基の土坑重複か	土師器破片	19
SK31	0.8	円形	カクランと重複		
SK32	1.44×1.12	隅丸長方形・北西		図40－35	47
SK33	0.96×	隅丸長方形？		土師器破片	17
SK34	1.44×1.12	隅丸長方形・北東	SK35と重複	図40－36・37	77
SK35	1.68×1.12	隅丸長方形・北西	SK34と重複	図40－38～41	109
SK36	柱穴		SK35と重複		
SK37	0.96×0.72	楕円形		土師器破片	151
SK38	1.0×0.8	不整方形	柱穴と重複	土師器破片	27
SK39	0.96×0.88	楕円形			
SK40	1.52×0.84	隅丸長方形・北東			
SK41	1.36×1.08	隅丸長方形・北東		図40－42・43	107
SK42	1.68×1.04	隅丸長方形・北東		土師器破片	6
SK43	0.7×	隅丸長方形？	カクランと重複	土師器破片、鉄製品	3.5
SK44	1.04×0.96	楕円形			
SK45	0.96×	方形？	カクランと重複		
SK46	柱穴			図44－1・3	45
SK47	0.92×0.72	楕円形		白磁・土師器破片	3.5
SK48	1.2×1.04	隅丸長方形・北西	BSD8・9内、SK53・カクランと重複	図40－44	68
SK49	柱穴			図44－2	34
SK50	1.48×	隅丸長方形・北東	BSD10と重複	土師器破片	12
SK51	1.44×0.8	隅丸長方形・北東	石組土坑	図42－1～4	123
SK52	1.12×1.04	円形		土師器破片	10
SK53	1.12	楕円形	SK48と重複		
SK54	1.6×	円形？			
SK55	1.2×0.48	楕円形			

柱穴列（Ｐ１・２・ＢＳＫ46・49、図43）

ＢＳＫ46、49は検出時に土坑として検出した。１列の柱穴列のみ確認した。東西方向の列で、周辺はカクランが著しく建物の復元には至っていない。建物であったのか、柵状の施設であったのかは不明である。柱穴の堆積状況は炭化物を多く含む堆積である。

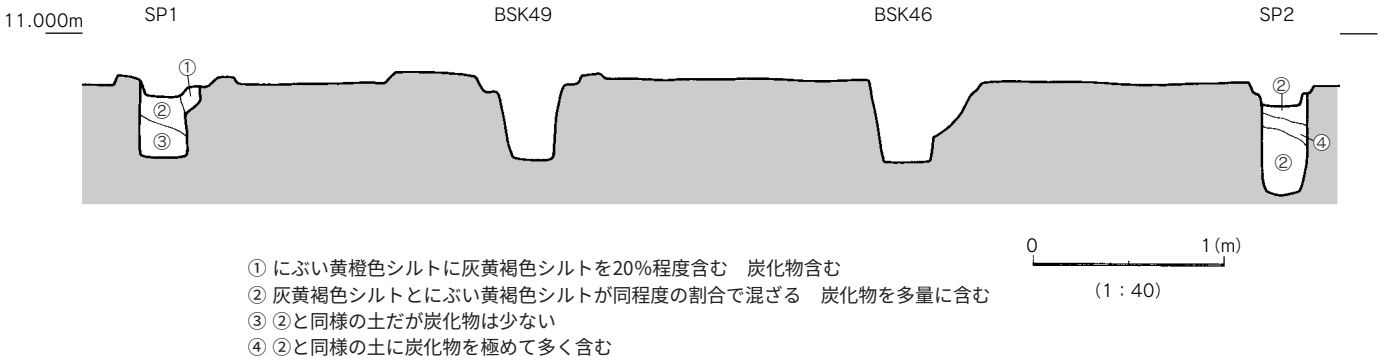


図43　柱穴列堆積状況図（１：40）

遺物はＢＳＫ46から白磁皿（１）、同安窯系青磁、古代甕（２）などが破片で出土している。ＢＳＫ49からは土師器皿（３）が出土している。１は沖縄分類でＣ群に相当し、13世紀後半から14世紀前葉の年代が与えられよう。２は体部内面を強くロクロナデし、段をつくり出すものである。

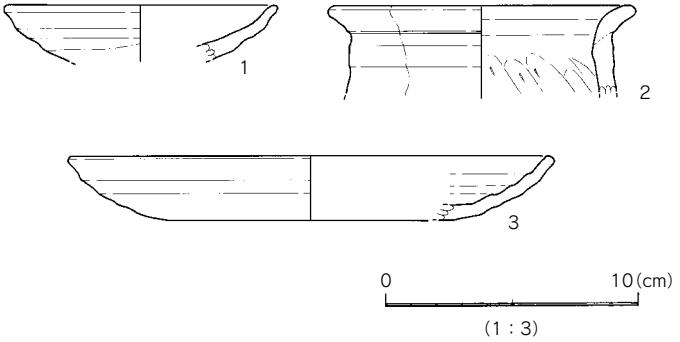


図44　柱穴出土遺物（１：３）

その他の柱穴

Ｂ区において確認した柱穴は68基である。その多くは、直径30～10㎝のもので、中には柱痕跡を持つものもあるが、建物復元には至っていない。埋土はＡ区の柱穴と同様に、古代～中世の遺物包含層であるⅢ層に由来する堆積である。分布範囲はＢ区東側、特に南東部に多く確認しているが、Ａ区のような集中範囲はない。しかし、後世のカクランや遺構の密度の影響を考慮する必要はある。強いて言うならば、区画溝の性格を有するＢＳＤ５より北側は密度が低い。

遺物が出土していない柱穴が多く、柱穴出土の遺物の総量は326ｇと少量である。また、出土遺物のほとんどが土師器小破片で、時期の比定は難しい。

これらの柱穴は埋土から、中世に属する可能性は高いが存続した時期や時期幅については不明であると言わねばならない。

出土遺物はほとんどが土師器破片で時期を比定できるものはない。

Ⅲ層、カクラン出土遺物（図45）

１は白磁碗、太宰府分類でⅣ類、11世紀後半から12世紀後半まで出土例があるものである。２は古代の土師器甕である。内面体部を縦方向にけずり、頸部から口縁部は横方向に板ナデを施す。形態から９世紀代の年代が考えられる。３は白磁碗、高台形態から太宰府分類でⅣ－１ｂに分類でき、11世紀後半から12世紀後半までの年代が与えられる。４は白磁碗、太宰府分類でⅤ－４ｂ、体部内面に櫛歯状工具で施文する。12世紀中葉から後半の所産である。５は把手付石鍋の破片で、破断面を研磨して平滑化したものである。破片を転用したものであろう。石鍋自体の時期は、10世紀末から11世紀初めごろのものと考えられる。６は備前焼の摺鉢で15世紀中葉から後半にかけてのものであろう。外面体部下端には丸を放射状に８分割したヘラ描きがある。窯印だろうか。７は龍泉窯系青磁椀、太宰府分類でⅠ類に分類される。見込みに片切り彫りの文様が入る。８～13は土錘である。土錘はＢ区では各遺構から出土しているが、10・11・13といった細型や、12の体部中位が膨らむ形のものがすべてで、８・９といった大型品は出土していない。14は煙管も吸口である。近世から近代のものである。

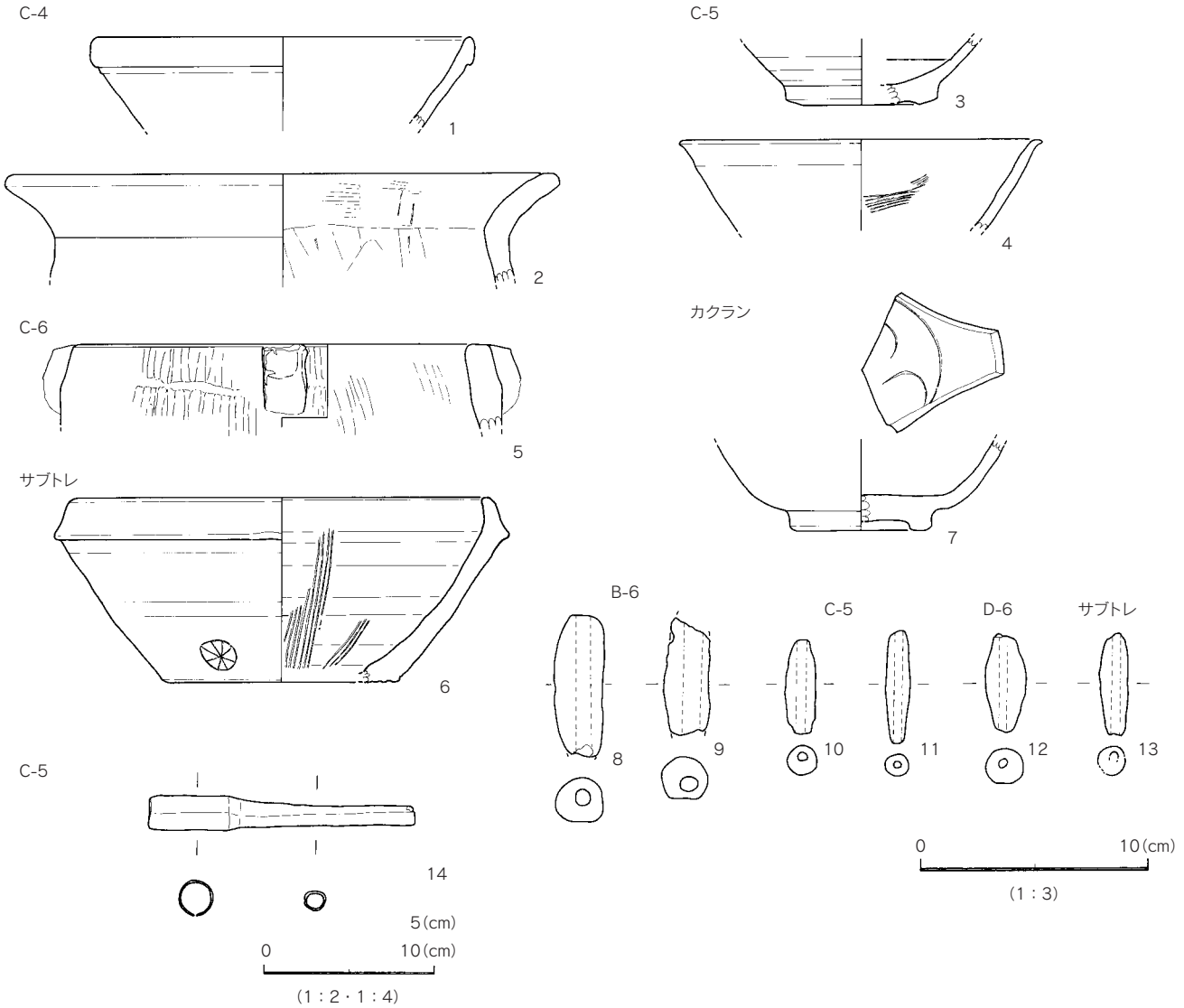


図45　Ⅲ層・カクラン出土遺物実測図（１：３、６は１：４、14は１：２）

第７節　次郎左衛門遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、古代の柱穴から出土した木材１点である。

3. 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

樹種同定の結果、スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に１～２個で２個存在するものが多い。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で１～15細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

5. 所見

樹種同定の結果、古代の柱穴から出土した木材はスギと同定された。スギは、本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で大きな材がとれる良材である。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

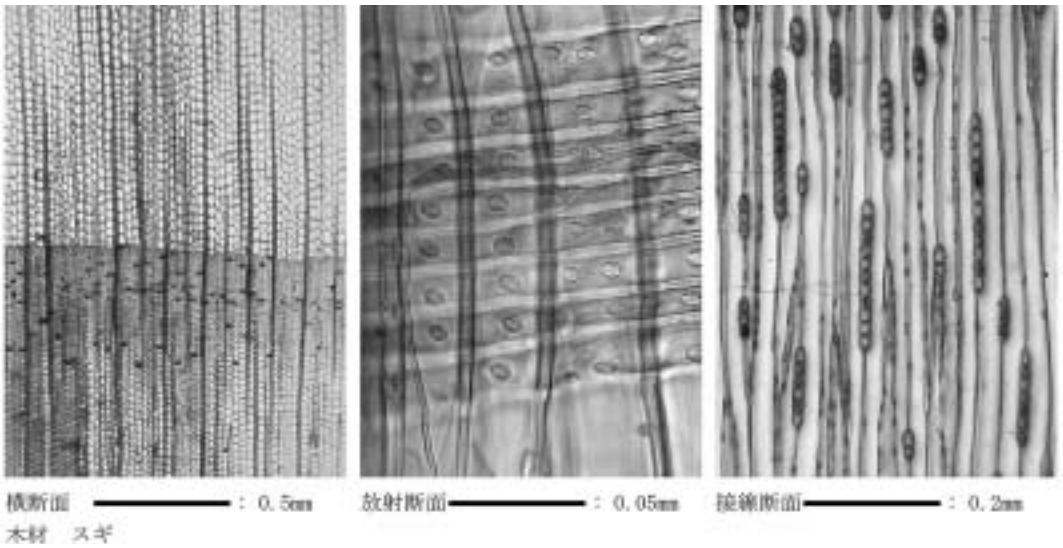


写真11　次郎左衛門遺跡の木材

第Ⅳ章　まとめ

調査区の堆積状況について

遺跡は、河川の堆積によって形成された微高地上に立地しており、その堆積土は明黄褐色シルトである。この明黄褐色シルトは調査時に中近世遺構の検出面としたⅣ層にあたる。Ａ区ではⅣ層直上の遺物包含層であるⅢ層が残存していなかった。Ｂ区ではⅣ層上にⅢ層が生成する状況が見られたが、漸移する幅が広くはっきりと線引きできるものではなかった。Ⅲ層からは、古代以前から16世紀に至る遺物が出土している。Ａ区ではⅣ層中に９世紀代の土師器・須恵器を含む部分があり、調査時には疑問であった。今では、Ⅳ層中と見えていたのはⅣ層からⅢ層への漸移的な部分であったと解釈している。また、落ち込みとして調査した部分もこの可能性がある。

地元住民の話によれば、Ａ区は戦後までは水田だったらしい。Ｂ区ではⅡ層の堆積する調査区南側はⅢ層上部が残っていなかった。Ⅱ層は、褐灰色の細砂で平行に堆積することから水田であると考えられるが、水田耕作によってⅢ層の土色・土質が変化したものとも捉えられる。

土地利用の変遷

① 古代

Ⅲ層に含まれる遺物からは、微高地上での人間活動の初現が古代以前（確認している最古の遺物は弥生中期）にあることを示している。ただ、調査区が所在する微高地縁辺では、出土遺物数から、このころの活発な活動があったとは考えにくい。出土遺物が増加するのは９世紀から10世紀であるが、これも確実な遺構は検出していない。先述したように、Ⅳ～Ⅲ層への漸移層中に当該期の遺構が存在している可能性は高いが、調査地区においては、集落を形成するような規模ではなかったと推測している。ただ、Ａ区の時期不明遺構とした柱穴がこの時期のものであると仮定するならば、調査区南側にその主体があると考えられる。包含層や中近世遺構から出土した遺物には、越州窯系青磁・灰釉陶器・縄目瓦といった特筆すべきものがあり、遺跡周辺に集落の存在を伺わせる。

検出遺構の中で古相に位置づけられるのはＢＳＤ６内Ｐ１である。出土土師器から11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる。この時期に廃絶された柱穴と考えれば、11世紀代に建物が存在した可能性がある。

② 中世

次にＢＳＤ５・７が上げられる。12世紀中葉～14世紀前半までの遺物が出土している。掘削されたのは12世紀前半、埋没年代を14世紀代としておくが、この２条の溝が同時期に存在していたかどうかは疑問が残る。ＢＳＤ５は集落の方形の区画溝として機能していたと考えている。12世紀代のこのような区画溝を伴う集落の成立については、低地開発と関連づけることも可能であろう。方形の区画は、新しい地割が施行された可能性を示唆するものである。それは周辺耕地の給排水路、畦畔方向とも無関係ではなかったと考えられる。沖積低地での水田耕作には灌漑が不可欠であるが、一ツ瀬川流域における地形の傾斜から考えると、北西方向から給水し南東方向に排水するのが合理的である。給水源となった河川は、一ツ瀬川の分流や、鳥子川のような西都原台地の伏流水からなる小河川であったと思われる。遺跡

内の溝が真北から東扁するのは、このような耕地の給排水に関係した地割のためとも考えられる。もちろん微高地内の地形も無関係ではない。微高地内の傾斜は写真５に見える旧河川の位置からすると、北東から南西に傾斜していると推測される。区画溝には排水溝としての機能もあっただろうから、この傾斜に併せて東扁しているとも捉えられる。また、交通の要となるような道を基軸として地割がなされた可能性もある。なお、ＢＳＤ５・７に連続する溝はＡ区では確認していないが、垂直方向の位置関係からＡＳＤ１・２は、中世に掘削されて近世まで存続していた可能性もある。

方形周溝（ＢＳＤ８・９）が掘削されたのは、区画溝と軸を同じくすることから、溝が掘られてまだその機能を失っていない時期であったと考えている。最初にＢＳＤ９が掘られ、埋没後一回り大きなＢＳＤ８が掘られたが、ＢＳＤ８掘削以前に植物遺体を多量に含む周溝（③層）があったことは先述した。ＢＳＤ８・９の底面付近から遺物の出土はなく、いずれも埋土上層土か③層からの出土である。出土した遺物の年代は、常滑焼甕が13世紀後半～14世紀前半に位置づけられることから、ＢＳＤ９の掘削年代を13世紀代としておきたい。周溝は本来、土を盛った「塚」であったと考えられる。さらに、その中央部に墓坑を持つ「塚墓」であった可能性もある。しかしＢＳＤ８・９に墓坑が伴っていたか否かは判断できない。県内での類例は、宮崎市大字熊野の前原西遺跡、１例のみである。前原西遺跡の方形周溝は中央部に長方形の墓坑を持つもので、出土した土師器から13世紀前半の造墓であろうと思われる。

ところで、中世墓制研究には「屋敷墓」という概念がある。屋敷地内に造られた墓で、その家の祖となる人物の墓であると考えられている。ＢＳＤ８・９が、「屋敷墓」にあたるかどうかは充分な検討が必要であろう。当遺跡の方形周溝が、区画溝の屈曲する内ではなく外に掘られていること、区画溝に隣接していることなどは、塚を築いた人々の空間意識や精神性を反映しているのかもしれない。

Ｂ区全域に分布する隅丸長方形の土坑は墓坑であると考えているが、それぞれ時期を比定できる状況にはない。図40にあげた土坑出土遺物から敢えていうならば、６（ＢＳＫ２）・14（ＢＳＫ12）・19（ＢＳＫ13）・28・29（ＢＳＫ26）・42・43（ＢＳＫ41）・45（ＢＳＫ48）の土師器小皿、８（ＢＳＫ２）・12（ＢＳＫ７）・21（ＢＳＫ14）・41（ＢＳＫ35）土師器坏は、ＢＳＤ５・６・７、ＢＳＤ８・９の時期に後出する要素が看取される。隅丸長方形の土坑は、長軸方向に北西･北東の２つの方向があり、ＢＳＤ８･９内部のＢＳＫ13・ＢＳＫ48は北西を向く。さらに北西方向の土坑がＢＳＤ８・９の近くにまとまって分布する。これらの土坑が掘られた時には、ＢＳＤ８・９は塚としての姿を留めていなかった可能性がある。２つの長軸方向に時間差があるとすれば、北西方向が後出であろう。上記の土坑に加えて、石組土坑（ＢＳＫ51）もやはり墓であると考えている。石組上部の礫崩落状況からの推定である。出土土師器は棺外副葬に伴うものであると考えられる。

ＢＳＫ１は埋没年代が16世紀前半と考えられる落ち込み状の遺構である。堆積状況から滞水状態にあったと判断され、ＢＳＤ６に切られることが分かった。微高地内の凹みにできた池であったと推測する。Ｂ区ではＢＳＫ１埋没以降の中世遺構については詳らかではない。ＢＳＫ１から出土した遺物は、Ａ区近世溝（ＡＳＤ１・２・３）から出土した中世遺物と同時期のものである。Ａ区周辺には、ＡＳＤ１・２・３出土の中世遺物（14世紀後半～16世紀代）を所有していた集落があったと推測できるが、それがＡ区南西に集中する柱穴群であるかどうかは不明である。

③ 近世以降

17世紀～18世紀前半にかけての土地利用は不明である。ＡＳＤ１・２・３、ＡＳＫ１・２は、古代～中世、18世紀後半～19世紀初めの遺物・礫で埋められた溝・土坑であるが、埋没年代は19世紀代と考えている。この遺物廃棄の状況については、以下に述べる問題点が含まれている。①遺物はどこから持って来られたか：一括で大量の遺物が廃棄される状況は、日常生活の中での廃棄行為とは考えにくい。さらに、同じ器種・文様のものが何個かセットで廃棄されているものもある。こうした状況からこれらの食器類は、所有者を同じくした可能性が高い。しかし、まだ使用できる食器類を廃棄するだろうか。②一緒に廃棄された礫は何か：これもどこから持って来られたのか疑問である。河原から運んだのだろうか。周辺にこれらの礫を利用した何らかの施設があったのだろうか。③古代・中世遺物が上層・下層を問わず出土している。以上を含めて廃棄の状況を復元すると、使用されなくなった溝をゴミ溜として利用していたのではなく、溝を埋めて更地にすることを目的とした廃棄であって、そのために周辺地形の削平や、施設の取り壊しが行われたと想像される。この土木工事の目的は、水路の付け替えや耕地拡大などであったのかもしれない。

生産力増大を目的とした土地改良は各時代を通じて行われている。記録に残る大規模なものは、杉安堰の開鑿である。赤池地区には、開鑿にあたった児玉久右衛門顕彰の碑［寛保３年（1743）］が今も残っている。住民は18世紀後半には堰の水利を得、以後も土地改良は続いたのだろう。Ａ区近世遺構の廃絶にはこうした背景が想定される。

Ｂ区の近世溝が、明治初期に描かれた地籍図の地割に一致することは先述した。空中写真と地籍図を重ねたものが図46である。調査地の19世紀以後の土地利用については遺構・遺物の少なさから、地籍図にあるように田畑となっていた可能性が高い。

赤池地区では、今日も地籍図の地割をほぼ踏襲している。中世から土地利用は変遷し、近世の地割は約25°の傾きであった。さらに今回の道路新設に至るまで、土地利用は今も変わり続けている。

④ その他

遺跡名となっている「次郎左衛門」は、土地の所有者に関した小字名であろうと思われる。次郎左衛門に南接する「熊野田」は熊野権現を想起させる字名であるが、現在ここに鎮座する赤池神社の祭神は歳神である。調査区Ｂ区は通称「ヘイタカ」と呼ばれ、寺であったという地区の伝承がある。調査地南西の水田の中には集落の墓地があるが、中世に遡る墓石はみられない。

遺跡出土の中世土師器について

遺構の年代比定は、年代観のほぼ固定している資料を目安にしているが、その出土状況は良好とはいえない。これを補完する目的で遺跡出土土師器を見ていくことにする。年代の根拠として、県内遺跡出土土師器と、　畑光博氏の都城盆地における中世土師器編年案（　畑2004、以下　畑論文）での土師器坏・小皿法量を参考にする。　畑論文では、都城盆地の11世紀の新しい段階から15世紀代までの一括資料を概観して、口径の大きなものから小さなものへ、体部が内湾するものから直線的に立ち上がるものへ変遷する傾向が紹介されている。一般に在地生産とされている土師器には、地域ごとの差異が存在している可能性が高く、都城盆地と西都市域では底部切り離し技法の差をはじめ単純に比較できるものではない。しかし、法量の減少を軸とした時系列には汎地域的な妥当性があると考え、参考にする。

ＢＳＤ６内Ｐ１出土の土師器（図33－17）であるが、古代的な様相と中世的な様相を併せ持つ。白磁Ⅳ類と供伴した都城市大島畠田遺跡出土土師器に似ることから、11世紀後半～12世紀前半の時期を考えている。ＢＳＤ６資料の方が、器壁が薄く丁寧なつくりをしている。これより少し遡る可能性はある。ＢＳＤ７出土土師器（図33－22）は、完形に復元された。類似する資料は西都市宮ノ東遺跡柱穴Ｓ2311一括資料であるが陶磁器類は伴っていない。報告書では14世紀中～15世紀前と記載されている。ＢＳＤ８・９出土土師器（図36－２・６）は、内湾する体部に口縁を引き上げた形が特徴である。同様の土師器は、西都市竹淵Ｃ遺跡、宮ノ東遺跡で出土している。宮ノ東遺跡では道路状遺構Ｓ3218から出土した資料（4857・4858・4859）である。この遺構の中にはＳ3226という一括資料も出土している。Ｓ3226資料は、法量が縮小し体部の内湾が弱くなるが口縁を引き上げる特徴を残した器形で、Ｓ3218資料より新しい要素を持つ。時期は、　畑論文一括資料⑥～⑦（13世紀後半～14世紀前半）の時期と考えられる。これより、ＢＳＤ８・９資料を13世紀前半と考えたい。土坑出土遺物では、内面に段をつくりだすＢＳＫ２・35資料（図40－８・41）は都之城跡の15世紀中頃の土師器に類似する。ＢＳＫ７資料（図40－12）は法量から、14世紀代の年代が考えられる。ＢＳＫ12・49資料（図40－15、図44－２）は、国富町西下本庄遺跡の土坑ＳＣ14（白磁Ｖ－４類出土）の大皿に似る。12世紀中頃～12世紀後半に位置すると思われる。

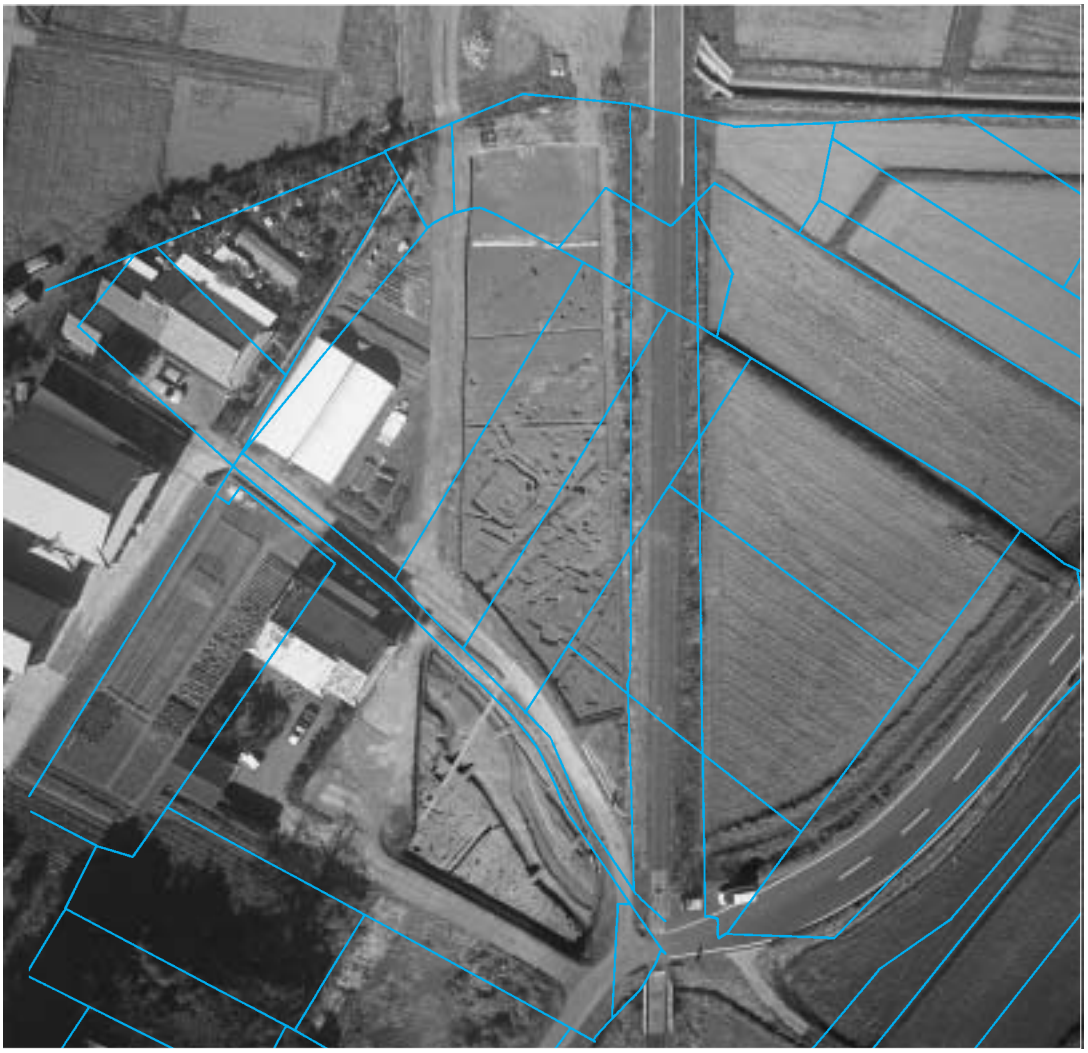


図46　調査成果と地籍（縮尺任意）

参考文献

【発掘調査報告書・県史・市史他】
西都市教育委員会2009　『日向国分寺跡』　西都市埋蔵文化財発掘調査報告書56
宮崎県教育委員会1988　『熊野原遺跡Ａ・Ｂ地区・陣ノ内遺跡・前原北遺跡・車坂城西ノ城跡・前原西遺跡・前原南遺跡・今江城（仮称）跡』　宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第４集
宮崎県教育委員会2001　『寺崎遺跡』　国衙跡保存整備基礎調査報告書
宮崎県埋蔵文化財センター 1999　『西下本庄遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第15集
宮崎県埋蔵文化財センター 2005　『竹淵Ｃ遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集
宮崎県埋蔵文化財センター 2006　『銀座第１遺跡（一・二・三・四次調査）』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008　『宮ノ東遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第173集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008　『大島畠田遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第178集
石川恒太郎編1963　『日向郷土史料集　第五巻』日向郷土史料集刊行会
西都市1976　『西都の歴史』　西都市史編纂委員会
宮崎県農政水産部農業振興課1982　『土地分類基本調査　妻・高鍋地域』
宮崎県1990　『宮崎県史　史料編　中世１』
宮崎県1998　『宮崎県史　通史編　中世』
宮崎県2000　『宮崎県史　通史編　近世下』
宮崎県1999　『宮崎県史叢書　日向記』
【陶磁器の分類他】
上田秀夫1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究　No.2』　日本貿易陶磁研究会
江戸遺跡研究会編2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
小野正敏1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究　No.2』　日本貿易陶磁研究会
九州近世陶磁学会2000　『九州陶磁の編年』
畑光博2004　「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（１）」『宮崎考古　第19号』　宮崎考古学会
戸哲也ほか2007　「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要　沖縄埋文研究５』　沖縄県埋蔵文化財センター
太宰府市教育委員会2000　『太宰府条坊跡ＸＶ　陶磁器分類編』　太宰府市の文化財第49集
中野晴久2005　「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相　生産技術の展開と編年』　全国シンポジウム「中世窯業の諸相　生産技術の展開と編年」実行委員会
乗岡　実2005　「備前」『中世窯業の諸相　生産技術の展開と編年』　全国シンポジウム「中世窯業の諸相　生産技術の展開と編年」実行委員会
森田　稔1995　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
狭川真一編2007　『墓と葬送の中世』　高志書院
中世墓資料集成研究会2004　『中世墓資料集成 ── 九州・沖縄編（２）── 』
【自然化学分析】
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司1985　『木材の構造』文永堂出版，290p.
島地 謙・伊東隆夫1988　『日本の遺跡出土木製品総覧』　雄山閣，296p.
山田昌久1993　『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間･植物関係史』　植生史研究特別１号　植生史研究会，242p.

図 版

遺跡上空から一ツ瀬川を望む

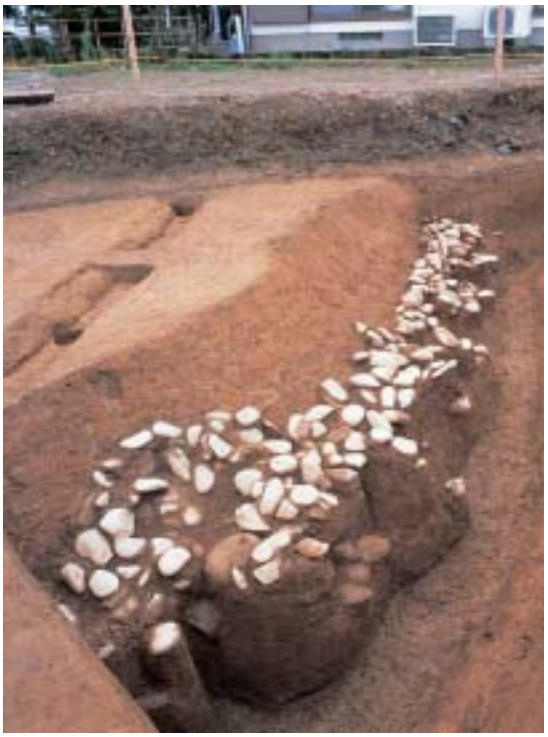
A区・B区合成写真

A区全景（真上から）

B区全景（北東から）

A区中世柱穴（真上から）

B区周溝（真上から）



一段目：左）ASD2人頭大礫出土状況（東から）
　　右）ASD2円礫出土状況（東から）

二段目：左）ASD2堆積状況（東から）
　　右）ASD3堆積状況（東から）

三段目：左）ASK1遺物・礫出土状況（南から）
　　右）ASK2遺物・礫出土状況（東から）

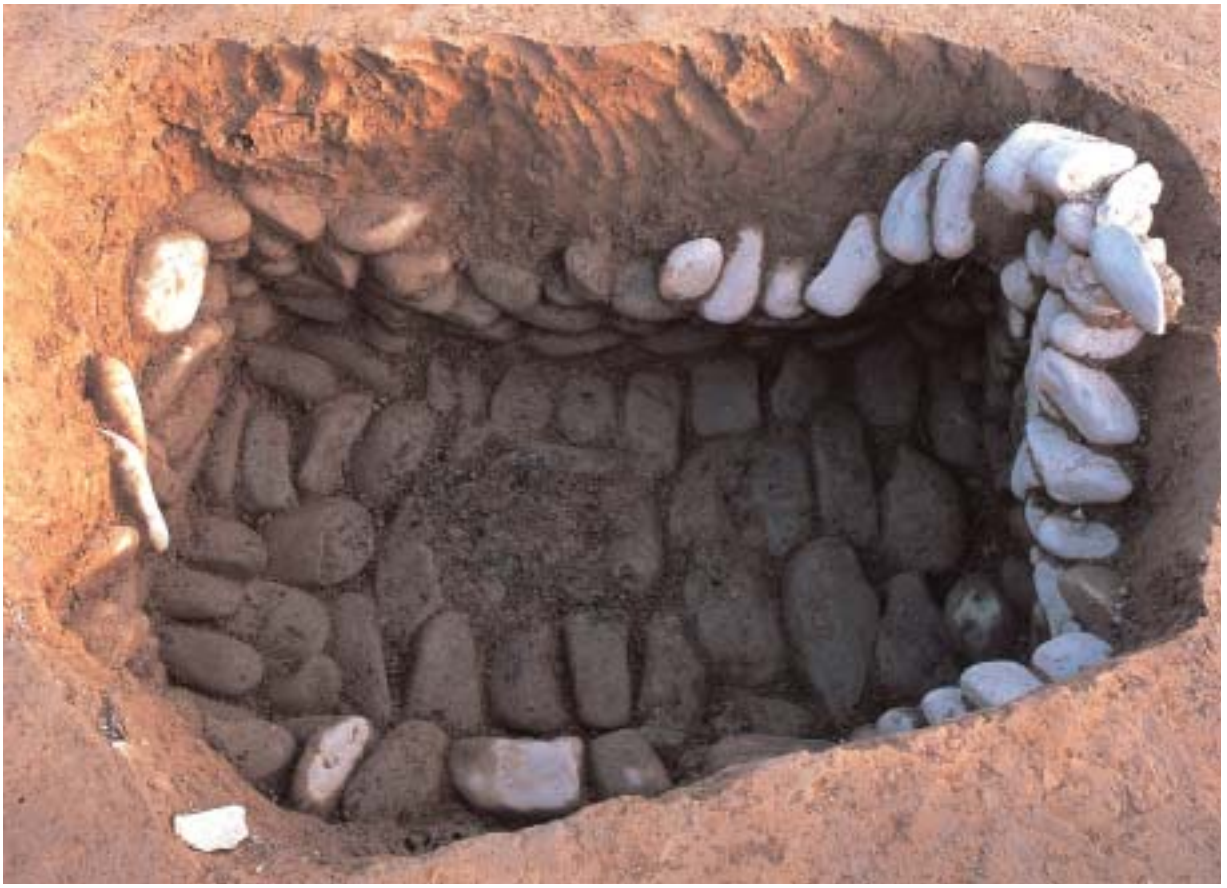
四段目：P31木柱（東から）

B区中心部（真上から）

二段目：左）周溝（北西から）　右）周溝堆積状況（南から）
三段目：左）BSD5屈曲部（西から）　右）BSD5堆積状況（西から）

一列目：上）BSD10（南西から）
　　中）BSK7（南から）
　　下）BSK15・16（南東から）

二列目：上）BSK6（北西から）
　　中）BSK13（西から）
　　下）BSK17（南西から）



一段目：左）BSK18（南から）　右）BSK26・32・34・35（北西から）
二段目：左）BSK51石組崩落状況　右）同堆積状況（南から）　　三段目：完掘、炭化物検出状況

図10-18

図10-20

図10-23

図10-24

図10-26

図10-32

図10-30

図11-37

図11-39

図11-40

図11-43

図11-51

図11-53

図11-56

図13-105

図11-58

図13-73

A区出土遺物①

図12-70
図12-69

63
64
67
66
図11-62
図12

15
14
図10

13
16
15
14
図10

1
2
3
4
5
図10

13
16
15
14

図14-108

図20-1

A区出土遺物②

128
130
131
129
132
133
134
図15

135
136
141
137
142
図16

150
152
151
155
156
154
157
158
153
図16

159
160
161
162
163
図16

150
152
151
155
156
154
157
158
153

159
160
161
162
163

192
193
194
195
196
197
図17

206
207
208
209
図18

A区出土遺物③

図17

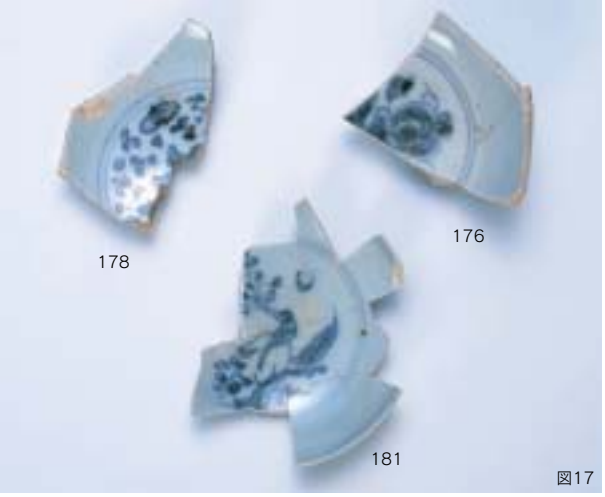


図17

図17-175　上から

図17

図17-175　横から

A区出土遺物④

24
23
20
25
26
27
28
29
図33

24
23
20
25
26
27
28
29

図36-13

図33-22

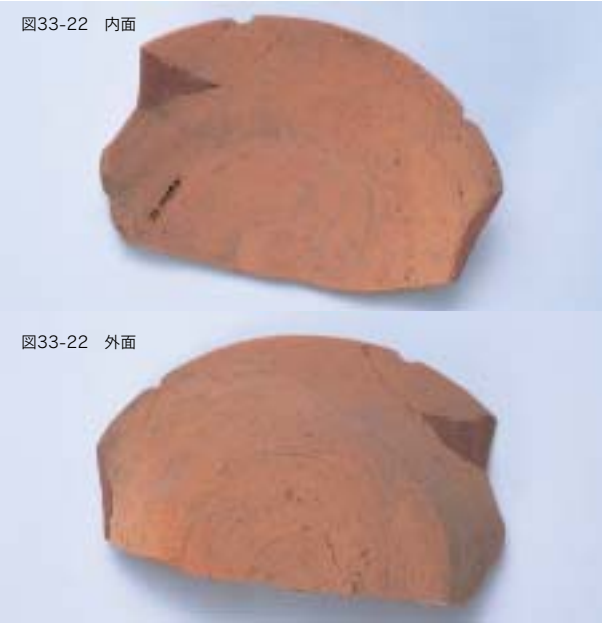


図33-22　内面
図33-22　外面

図36-12

図36
5
1
7
11
2
6
9

B区出土遺物①

図40
1
4
2
3

1
4
2
3

図40-5

図45
4
7
6
3
5

図40
8
15
41
10
42
29
43
33
12
図44-1
図44-3
8
15
41
10
42
29
43
33
12
図44-1
図44-3

図42
1
2
3
4

1
2
3
4

B区出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	じろうざえもんいせき
書名	次郎左衛門遺跡
副書名	国道219号交通円滑化事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第192集
編著者名	森田　利枝
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL0985-36-1171
発行年月日	西暦2010年３月12日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
次郎左衛門遺跡（じろうざえもんいせき）	宮崎県（みやざきけん） 西都市（さいとし） 大字三宅（おおあざみやけ） 480番地（ばんち） ほか	45	208	32度 5分 22秒 付近	131度 24分 24秒 付近	2008.9.8～ 2009.2.6	約1800㎡	国道219号交通円滑化事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
次郎左衛門遺跡	集落	中世	溝　８条 土坑　58基 柱穴　162基	土師器、瓦質土器、東播系須恵器、常滑焼、備前焼、貿易陶磁器	集落縁辺の区画溝のほか周溝、石組土坑など墓の可能性がある遺構を確認した。
		近世	溝　７条 土坑　２基	肥前系陶磁器、焙烙、瓦質土器、鉄滓	溝は水田、畑に伴う用水路や区画溝である可能性が高い。
		時期不明	柱穴　３基 落ち込み　１基	土師器、須恵器	古代か

要約	中世の溝は集落の区画溝である可能性が高く、14世紀代には埋没していたと考えられる。また、区画溝と傾きを同じくする周溝やその周りに分布する土坑は墓である可能性が高い。調査区北辺では石組土坑が検出されたが、これも墓である可能性が高い。近世の溝は19世紀代に埋められた状況であったが、弥生時代から近世に至るまでの遺物が出土している。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第192集

次郎左衛門遺跡（じろうざえもんいせき）

国道219号交通円滑化事業に伴う発掘調査報告書

発行　平成22年3月12日
宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL(0985)36-1171

印刷　有限会社　鉱脈社
〒8880-8551 宮崎県宮崎市田代町263番地
TEL（0985）25-1758